い意味を持つて居る。社會は此くして益々複雜に、立體的に構成せらるゝのだ。

第二に、集中主義にあつては、權力の意識が不自然に高まる。何故なれば、其の社會では、各人は自らの個性的要求の滿足せられない聯合體より、自由に離籍する事が出來ぬ。社會といへば、たゞ此の集中の行はれる一聯合體だけだ。其れよりの離籍は自らの死を意味する。强制力の中心としての政治的權力は十分に强大となり、如何なる社會力も其れには對抗出來ぬ。然る時には、權力は屢々不合理的なる强制をすらも行ひ、此れに加へる社會の批判は、其の實行を訂正する實力を持たない。よし其の權力の發動が不合理的で無い場合でも、社會にあつて此の如き唯一强大の權力を意識するは、我々に取り毫も悅ぶ可き事では無い。

第三に、隨つて集中主義にあつては英雄主義を養ひ易い。英雄主義は權力と關係を持つ。人によつては、人間性情の中に英雄主義其のものを藏するから、完全に此れを克服するは不可能の事だといふ。又或る人は、英雄主義は社會文化の進歩の一動力であるから、我々はたゞ此れを善用すればよいといふ。私は前者の考へ方を全然的には否定しない。併し人間性情の中の支配心は、其れだけで發達すれば、現在見る如き權力萬能の英雄主義を構成しなかつたと思ふ。其の火炎を煽つたものは、正に制度としての集中主義だ。權力者となれば、經濟的に有利だらうといふのでは無しに、權力者となつて他を支配する事自身を、人間活動の有力なる一動機と爲すに至るのだ。



後者の考へ方は多くの眞理を含んで居ない。其れは私的競爭無き社會主義社會を現出せしめれば、競爭心無きが故に生產が起らないといふと同樣の誤謬だ。彼は現制度によつて痲痺せしめられた心理で、正しい制度の下での心理を測定して居るのだ。地方主義の社會にあつては、權力を悅ぶ心理が發生しようとしても、其の權力は一聯合體內に及ぶだけだから、現社會に於ける如き妖魔的の英雄主義では無い。のみならず他の聯合體の價値を容認せざるを得ないこと、他の聯合體より獨立した批判を受け易いことゝは、英雄主義の發生を大いに妨害するのである。

最後に、集中主義にあつては社會生活內容の推移は容易で無い。卽ち其の社會の變化發達は流動的で無く、機械的だ。然るに地方主義にあつては、此の推移は割合に容易であり、且つ批判的、流動的である。社會生活の批判には背景としての政治的實力を要する。其れ無ければ、批判が實行に影響するところは微少である。集中主義にあつては、其の固定した社會生活內容を批判するものは、權力を持たない。且つ其の批判の意義は、全般の社會に徹底し得られないものだ。地方主義は機能本位なるが故に、其の缺陷を除いて居る。其れ故に集中主義的社會の推移は常にキャタストロフィックであり、文化に危險を及ぼす。地方主義的社會の其れは部分的であり、且つ批判的だ。全社會の文化をキャタストロオフによつて破壞する事は、稀少の場合である。

私は今總論的に二主義の得失を論じた。併し此の問題は、具體的にもつと大きな問題である。

我々は後に再び其の分析を試みなければならぬ場合に接するだらうと思ふ。

## 七　地方自治の迷夢

各人の個性的自律的要求を保護する爲めには、我々が現在持つて居る地方自治制度だけで十分である、少くも其れを完備する事でよい、と考へて居るものが、なほ我々の周圍に多いのは遺憾だ。

地方自治制度と我々の機能本位社會觀とは、精神に於て全然異るものだ。前者の發達が後者では無い。我々の主張するのは、人間の文化的要求を基礎とし、複合的、多元的に、社會を其の自然形態へ改造しようとするのであり、地方自治制度には何等其の精神が行はれて居ない。機能本位とは其の社會の成員の大小に關係する事では無い。地方自治制度は、地理的分團體主義だ。地理的自治主義だ。此れに反して我々の豫定する制度は、機能的分團體主義だ。機能的自治主義だ。兩者は其の目的を全然的に異らしめる。

現在の地方自治制度は、要するに其の本質に於ては集中主義だ。大集中主義の社會の成員數を縮少せしめただけのものだ。寧ろ其れは大集中主義、例へば專制的なる中央集權制度に比して、其れ以上の大いなる弊害を持つて居る。其れは現に我々が地方にあつて常に經驗して居るところ



だ。

第一に、現在の地方自治制度にあつては、其の社會生活內容の批判者の權威は、中央集權制度の場合以上に乏しいものだ。其れ故却て其處には多くの惡法が布かれ、專制が行はれて居る。多くの人が此事に留意しないのを、私は遺憾に思ふ。我々は中央の議會で行はれる法律制定の紛糾を見て居る。一つの法律の制定にも、全國の民心は非常の興奮を示す。批判者は自由に此れを批評し、其の非を社會に公表して居る。中央の施政は右の如きものである。然るに此の法律が一旦地方に實施せられる場合となれば、地方の自治單位は更に其の單位內だけで實施せらる可き具體案を作製する。此の具體案によつては、中央の立法は全然の骨拔き案にさへなされ得る。此れに反對する批評は、其の地域だけに限られて居るから、社會一般の視聽を集め得ない。若し其れが全社會に公表せられるとすれば、社會は其の非常識的なる、又專制的なるにいかに大いなる驚愕を感ずるだらうかと思ふ樣なことさへも、此の批判の實力の微弱なるが爲めに、其の自治單位の具體的實行案となつて强行せられるのである。其れ故に我々は、寧ろ中央官廳が全部的の責任を持ち、社會の批判に堪へた大集中主義を爲す方が、遙かに感謝す可きことだと信ずる場合をすら屢々持つに至つて居る。

なほ地方自治單位の最高權力者は、其の社會の成員より、一言の要求、一言の批判をさへ聞か

す、所謂訓示なる形式に於て、全然專制的に自己の主觀的人生觀を、其の成員に强制する場合がある。一體訓示なるものは、中央官廳の最高權力者も屢々此れを爲すが、其の法律的性質は何であるか。訓示の內容は政治の全部的目的或は方針だ。法律を此れに比較せしめれば、法律は其の目的或は方針の運用の一形式だ。目的は主であり、形式は從だ。然るに我々が立法機關に參畫することの出來るは、僅かに其の形式許りであつて、其の主たる目的では無い。目的は諸官廳の最高權力者により、其の未熟なる主觀的人生觀が基礎とせられて、氣隨的に、機會主義的に作られる。民衆が權力者によつて指導せられる社會文化の目的が、卽ち此の愚なる專制案だ。とても堪へられたもので無い。其れ故に、從來とても機能的に幾分の統一形を保つて來た聯合體は、此の所謂訓示なるものに惱まされ、其れに反對態度を取るの餘儀無き場合を頻發せしめた。敎育、產業等は其の主たるものである。例へば敎育にして見れば、其の最も重要なるは敎育の目的或は方針であるが、此れは所謂大臣の訓示、又は方針なるものによつて決定せられて居る。立法機關は毫末も容喙出來ない。大臣は敎育に關しては一介の素人だ。其れ故彼は其の場だけの機會主義から、甚だ主觀的なる方針を定め、此れを訓示する。實際の敎育家は其の愚訓示に堪へられない。のみならず、大臣の更迭と共に此の方針は始終變更せられるから、敎育の目的は確立せず、民衆敎育の前途寒心の至りだ。併し大臣の訓示はまだ上々の部だ。地方の府縣知事、郡長輩のものに



至つては、眞に噴飯に値する。恐らくは此れを中央の滿目環視裡へ持ち出せば、其の餘りの非常識的なるに笑ふ事さへ出來ない樣なものがある。其れすらなほ其の自治單位へは强制せられる。私はさうした實例を幾らでも見て居る。蓋し地方自治制度なるものが、大集中主義の中央集權制度以上に多くの害惡を包藏する所以だ。

第二に、個性的、地方的なる要求が、普遍的、常套的なる要求より、何等か偏倚した、不健全なる其れであるかに取扱はれることは、地方自治單位にあつて、大集中主義以上に頻繁だ。隨つて其の壓迫は强硬だ。大形態の社會では、さうした個性は互に呼應する同志を發見するを得、隨つて可成りに普通より遠ざかつたものでも自己を貫徹する事が出來、且つ社會に其の特色を認めしめる事が出來る。社會も亦其の特色ある個性の與へるものに傾聽することがある。然るに小なる自治單位にあつては、かゝる個性は要するに不健全なる偏倚だ。豫言者は其の鄕黨に容れられぬといふ言葉は、此の事實を表現するのだらう。所謂地方自治制度が確立すればするほど、社會には個性が缺除し、固定沈滯、凡俗者の凡俗文化を凝結せしめるのである。

此くして我々の希求する社會は地理的分團體主義の其れでは無い。バアソナル、アナアキイを永遠的目的としての複合的、多元的機能社會だ。其處には學術、藝術、宗敎、敎育、衞生、諸種の產業、諸種の消費と、個性的に甚だ數多くの機能を基礎とし、强制を其れ々々に獨立せしめた

聯合體が確立し、其の立體的疊積によつてすべての社會文化の發達が行はれなければならぬのだ。諸種の勞働組合、消費組合等は、其の聯合體の一つの形態だ。其の本質は現社會に於ける鬪爭機關たる事では無く、將來社會の實在的基礎たる事である。



# 第八章　政治機關の根本形態

## 一　社會組織と政治形態

社會組成の根本樣式を解明したから、私は其れに關聯せしめて、我々の政治機關の根本形態を闡明す可き場合に立ち至つた。學問や藝術やは、必ずしも社會概念を必要としない。其れ自身の目標とする價値は、其れ々々に基本的文化價値なるが故だ。併し政治や經濟やの生活は、社會概念を離れて根本的に其の意義を成し難い。其れの目標が社會文化價値なる所以だ。政治機關の根本形態は、隨つて社會組成の根本樣式を離れる事が出來ない。否寧ろ正當には、社會組成の樣式を、政治生活の觀點に立つて理想的に表現せしめたものは、卽ち政治機關の根本形態でなければならない。然るにヘエグルに根據を置いた國家哲學者は、最初にさうした社會組成の樣式を分析しない。たゞ漠然と一個人の心的內容を分析し、其れによつて國家論の立論基礎を得るだけだ。彼等は個人の中に必然的に社會性を含むと論ずるも、其の所謂社會性は單に抽象的のものであり、如何なる特質を持つた社會性であるかゞ吟味せられて居ない。其れ故に其處へ歸結として持ち出

された社會組成は、社會と呼ばれても或は國家と呼ばれても、何等の區別が無い。たゞ抽象的社會性をさへ含んで居れば其れでよいのだ。我々に取つては、其の如き社會性の抽象は何の意味をも持たぬ。其れは人間が生きて居るとか、生活するとかいふと同じ程度の抽象だ。社會組成に、隨つて政治形態に問題となるのは、其の所謂社會性が如何なる特質を持つかの點だ。換言すれば、其の社會性が何の機能を根據したかの點だ。社會組成に機能を考へるから、其の機能の政治的表現としての政治機關が問題となつて來る。

極めて自由に思索の出來る哲學者も、社會組成の根本理論や政治機關の根本形態やを論じ出すと、status quo から一歩も出ないのは遺憾である。我々の解放せらるべき偶像の中で、實用の偶像は其の勢力が割合に弱い。其れ故に思想家はプラグマチズム、相對主義等から理想主義、絶對主義等に移るのはさほど困難なことで無い。併し其の社會制度の偶像に至つては、我々は容易なことでは其れから脱却し得ないのである。其れ故に思想家が、よし哲學の根本論の上では理想主義人格主義等に徹して居ても、其の社會論や政治形態を爲すのを見れば、其處では推論は餘りに粗笨である。彼は心理主義を排斥して論理主義を樹立すると稱しつゝ、社會概念を單に心理主義的に論じて居る。個人の漠然たる結合に社會を考へる。又よし其處に共同社會としての理念を考へて居る人でも、其の如き社會がいかなる組織を有するかは考へて居ない。然るに社會概念は個



人心理を止揚しての客觀的概念だ。其れは心理で無くて一の組織だ。形態だ。社會の理念は個人心理の理念では無くて、組織の、形態の理念でなければならぬ。此の意味に於て、私は我國の哲學者から、しかも理想主義、文化主義、人格主義等を標榜する哲學者から、一度でも滿足した社會組成論、政治形態論を聞いた事が無いのである。

我々は出來るだけ現在の社會制度、政治形態から解放せられなければならない。眞理としての普遍妥當性は毫も疑問にならないが、問題にせられるのは、此の普遍妥當論者の現に爲す議論內容が普遍妥當的であるかどうかだ。總論としての理想主義は最早我々の問題では無い。彼が理想主義者であることは個々の問題に就ての彼の批評が理想主義的なることを意味しはしない。

## 二　所謂デモクラシイの選擧論

私は前章の末尾で、所謂地方自治制度の價値を簡單に批判した。地理的分團主義の其れは、自治として其の目的を達することが出來ず、此れを理想の政治形態と爲すものは、一片の迷夢を追うて居ることを斷言して置いた。然るに此の自治論と其の本質を共通ならしめるものには、理想主義者の所謂デモクラシイ論や普通選擧論やがある。私は今其の中の後者に就て幾分の考察を試みよう。

普通選擧が制限選擧よりも理想態に近いことは言ふまでも無い。所謂制限選擧は、當初から問題になり得ないほど不正義なものなのだ。卽ち普通選擧は政治の常型だ。併し勿論此れは各人の總ての立場を同一と見ての上の事だ。社會に甚だしい經濟的不平等がある時、なほ此の上に公平なる普通選擧を言ふは、却て民衆の公平を害して居はしないか。此れはデモクラシイを論ずるものゝ忽がせにしてならな問題だが、今は其點をまで取扱はない。たゞ私が問題にしたいのは、普通選擧に就て次の點だ。理想主義者の或るものは言つて居る。理想社會にあつての選擧は、先づ選擧人が理想的に自律的の人格でなければいかぬ。次に被選擧人が同樣に理想的自律的の人格で無いといかぬ。選擧をした場合、甲は乙へ全權的に其の人格を信賴して、自己の權利を委任したのだ。選擧せられたものは、一旦選擧せられゝば、其の選擧人の意向如何に拘らず、良心的に自己の信念に隨つて行動す可きだと。理想的デモクラシイ論者の此の主張はいかに批評せらる可きであらうか。

右の意見は要するにヘエゲル流の社會論を離れ得ない缺陷を持つ。換言すれば、此の考への中には、客觀的組織としての社會が考へられて居ず、所謂理想社會としての社會は、實は社會では無い抽象概念だ。歷史を持たない殿堂だ。私は先づ疑問を提出したい。人格が其の如く理想的の自律に達したとすれば、何故其處に選擧といふ如き一の政治制度を考へるか。社會の理想態は、



バアソナル、アナアキイだ。其處には絕對的自律に生きる個人の實在的統一あるのみで、何等か外部的に社會統一制を爲す政治機關を考へるは矛盾である。所謂アナアキズムでさへ其事を信じて居る。世の多くの常識政治學者が批評するアナアキズムは、何人の實際に主張したアナアキズムであるか。私は批評者の無理解を遺憾としなければならない。

選擧が行はれ、多數の議員が集つて、政治の將來內容を議するときには、既に其等議員の意見が、何程かづゝ內容的に異る事を豫定する。人間が理想的となれば、其の結果としてすべてが同一價値判斷を有するものであるとすれば、政治には何等の選擧も亦議員も必要では無い筈だ。然るに其處にはなほ此等のことがある。其の意味を我々は如何に解す可きであらうか。

各人は形式的に人格の自律に達して居る。形式的に自律するとは、其のすべての行動に於て、完全に理想的なることだ。併し彼等は事實に於て、內容的に其の判斷を異にするが故に、議員による會議の必要がある。會議は多數決といふ理想に遠い機械的方法によつて、或る一の將來行動を決定する。此の現象の前半が眞ならば後半は僞だと私は信ずる。或は少くも前半と後半とは其の理論根據を互ひに異らしめると思ふ。各人が悉く理想的に自律的人格になつたとすれば、或る將來行動に關しての彼等の判斷は全く同一である筈だ。換言すれば一の場合、一の價値ある行動は、客觀的には唯一の筈だから。各人が最高の自律に達した時、其の判斷は此の客觀的なるもの

に一致しなければならぬ。例を擧げる。甲地より乙地へ向ふ鐵道を敷設する事の善惡は、我々の主觀の好惡に關せず、客觀的に一定せられて居る筈だ。今其の價値は善であつたとする。然らば各人が完全に自律的となつた時には、各人の判斷が悉く一致して此れを善だと斷定しなければならぬ理だ。斯樣な社會にあつては、政治に代議制や選擧やは必要で無い。或る一人が、完全に自律的に批判し行動して居れば、其れはすべての社會人の當に在る可き行動を含まなければならぬ。卽ち各人は所謂デモクラシイを必要としない。アリストクラシイが理想的政治形態だ。しかも此の專制主義は、各人すべての同時に取る專制主義だ。

矛盾を破る途は、其の何れかを破却することだ。理想社會を考へるとすれば、右の如くにして選擧や代議制は其の意義を持ち得ない。選擧や代議制は、人格に何等かの缺陷を認めて然る後に可能なものだ。換言すれば、其れは單に價値的に考へられた人格では無くて、存在を含んでの歷史的現實的人格だ。選擧や代議制やは、人格の完全なる自律へ到達する徑路に於ける人格の活動だ。此く考察すれば兩者の矛盾は正しく解舒せられる。

人格が理想自律を憧憬して進んで居ても、其れは飽くまで現實の一人格なるが故に、理念としての人格たる事を得ず、常に其の判斷に何程かの主觀的偏倚を含ましめるとすれば、其處には政治機關の根本形式を決定する一の問題を生起せしめる。各人の判斷は、いかに理想的に進んだ場



合でも、なほ互に多少の相違を持つ。殊に或る種の問題に就ては全然に其の判斷を抑止しなければならぬ。何故なれば彼は此の問題に關しては、全然の無識の狀態に置かれてあるから。苟くも選擧制度を云々するならば此れだけの事は許さて居なければならぬ。繰り返して言ふ。代議制のある社會は理想への過渡世界だ。然る時に前述の理想的デモクラシイの所論は、甚だ乏しい價値のものになつて來る。

## 三　現在選擧制の批判

甲が乙を自己の代表者として選擧したとする。理想的人格としては、代表するまでも無く、甲乙人格は互に照映し、其のすべての判斷を同一ならしめるから、選擧するまでも無いことだ。選擧するからには、自己の判斷と異る、僞と信せられる判斷を爲す人格の並立することを豫定する。さて一の人格を自己の代表者として選擇するに、或る一問題に就ての彼の判斷が予の其れと同一なる事は知り得らるゝにしても、其の他すべての判斷が予の其れと同一なる事を、我々は如何にして知り得べきか。此の如きは不完全なる我々現實の人格に推測の不可能なる問題である。なほ言へば、彼を自己の代表者に選擧して滿足し得られることを我々はいかにして十分に知り得るか。

其れよりも重大な問題を惹き起すのは選擧せられた議員自身の立場だ。私は今現在の所謂代議制度が、其の制度自身を何等變更せしめず、たゞ其の選擧者と被選擧者とがより以上に理想的となり、其の上に普通選擧制が實現せられたとして考へて行く。其の時選出せられた議員は、或る程度まで理想的なる良心的態度を持ち、其の學識も亦甚だ優秀なるものであらう。理想的デモクラシイ論者は、此の完全の程度を高めるだけで滿足して居る。彼の着眼はたゞ個人の上にだけ及んで社會の上に及ばない。制度としての客觀的不完備は疑問にせられて居ない。

さて此等の議員が、一の會議を組織したとする。此の會議の上で論ぜられる問題は、甚だ廣汎なる範圍のものだ。外交、軍事、産業、教育、其他すべての問題範圍を含む。地域的にも亦同樣に甚だ廣汎なる範圍を包括せしめて居る。例を以て言へば、沖繩縣の選出議員は根室の鐵道敷設問題の議決に一票權を有し、九州の炭坑經營者は長野縣の養蠶問題を取扱ひ、漁業出身の議員は音樂學校の存廢問題の議事に加はる。一人の議員は苟くも其の會議で議せられるすべての問題に就て、透徹極まり無き知識と批評眼とを具備しなければならぬ。此れ無くして議事に加はり甲乙の贊否を表示するは、甚だ無責任なる仕方だ。

併し大體に於て、我々は其等すべての問題に痛切なる利害を感じて居ない。例言すれば、沖繩縣の議員は根室の鐵道敷設が可決せられようが否決せられようが、何れにせよ自らは何の痛痒を



感じない。其他前述の例に於て皆なさうだ。我々が其の會議に於て直接の利害を感ずる問題は幾干も無い事だ。然るに何の利害をも感じない問題、換言すれば自己の構成する社會以外の問題に就き、我々が何等かの意志表示を爲す權利は何によつて與へられて居るか。例言すれば、炭坑業者が養蠶業の問題を左右する權利は、其の基礎を何處に置くか。我々にはどうも納得のいかぬことだ。次には、さうして大半は利害を感じない問題を議するのが所謂政治だと考へられて居るけれども、利害を感じないところへ表明する批判は、勢ひ責任を持たなくなる。何方に定まつても、自らは其の爲めに何等の利或は害を蒙らない。しかもなほ政治は腐敗してはならぬといふ。此れ亦我々には納得のいかぬ事だ。

此くして地域的選擧制は、根本的に大いなる虛僞を含む。若し此の制度が正しく行はる可しとならば、第一に其の地域は甚だ狹少なるものに限定せられなければならぬ。地域が狹少になれば、其の議員は、會議へ提出する問題へ、略んど全部的に利害を感じ得る。又同樣に略んど全部的に、其の問題に稍々完全に近い知識と批判とを有し得る。古來此の問題の考察に接觸した人達が、期せずして小國主義を主張したのは所以あることだ。老子もルソオも其れであつた。併し地域的の小範圍主義は、主義としては徹底的のもので無い。こゝに理論的に機能本位の選擧論の發端が横はる。

第二に、各人の判斷が、出來得る限り誤謬の無いものになり得る爲めには、選擧せられた議員は、出來得る限り廣汎なる地域と問題とへの完全なる知識と批判とを有するものでなければならぬ。併しいかに各人が黽勉したからとて、外交にも、軍事にも、あらゆる產業の細末にも、教育にも、其他某々活動にも、透徹誤る無き知識と判斷とを有するは、一場の空夢を語るに等しい。其れは人力以上の能力と奮勵とである。併し如何なる人も、其の主として關係する生活の範圍に對しては、自づから必要的に、可成りに精到した知識と批判を有し得る。換言すれば、自己の現に生きる社會、卽ち聯合體の問題に對しては、略々誤らない判斷を有し得るものだ。此の見方に於ては、個人の判斷は、可成りの程度にまで完全に近付き得る。其れ故に、會議に於ての各人の理想的判斷を保持する爲めには、議員の選擧は聯合體本位、機能本位でなければならぬ。

我々の新らしい選擧制度論の出發點は、右の批判の二點にある。

## 四　地域選擧制と機能選擧制

我々の現に有する選擧制は地域的分團體主義の上に立つた其れだ。一定範圍の地域の上に生活する人間は、略ぼ同一內容の利害關係を持つとの前提の上に立つて居る。併し此れは封建時代の遺物制度だ。我々は社會組成の根本理論に於て考察し、又現に其の日常生活に於て經驗し居る如



く、地域的には其の隣人と、必ずしも最も多くの利害關係を共通ならしめて居ないものだ。文明が進めば進むほど、地域的分團體主義は事實に合適しないものとなる。甲が染織勞働者であつたとすれば、彼は其の隣家の銀行家乙に多くの利害關係を持たず、寧ろ遠方の同じい染織勞働者丙に密なる親近を感ずる。

地域的分團體主義の選擧制が、理論的にも隨つてまた事實的にも過去のものだとすれば、我々の取る選擧制は當然機能的分團體主義に對應し、其れを基礎とするものでなければならぬ。其の方が便利だとか、有益だとかいふのでは無い。其れが制度としての理想に向つて居るからだ。社會主義者は專ら制度の問題を論じ、理想主義者は主として個人の心意の問題に關心する。併し制度は卽ち心意である筈だ。社會は主觀的心理では無くて客觀的組織だ。社會の理想主義的改造とは、社會の組成員たる個人の心意の改造をのみ意味しない。其れは當然社會としての改造、卽ち客觀的組織としての改造に思ひを潛む可きだ。制度としての惡の中に心意としての善は生長しない。制度の理想的改造に情熱と勇氣を感じないものは、自己心意の惡に平然たる無道德者と何等選ぶところは無い。現在の選擧制が不合理的基礎の上に立つものならば、我々は選擧民の覺醒や其の政治敎育や理想選擧を云々する前に、其の制度自身の改造に就て自らを覺醒せしめ、且つ他を納得せしめるやう努力す可きでは無いか。普通選擧は當然の制度だ。併し其れよりも以上に當

然なことは機能選擧の制度だ。機能選擧制が先づ建設せられて、然る後に其れに就き普通選擧が行はれなければならぬ。機能選擧制の上に制限選擧が行はれる事は考へられさへしない。現在の地域的選擧制の上に制限選擧の行はれる根本理由を、人は熟考して見なければならぬ。其れは實は地域的選擧制の弱點を匡正する爲めに、止むを得ないことであつた。此の選擧制の當然の前提としては、第一に、議員は其の地域内の全部の問題に或る程度までの知識と批判とを持たなければならぬ。被選擧者の資格が然る限り、選擧者の資格も其れである可きだ。第二に、政治の運用が無責任とならない爲めに、被選擧者も選擧者も、其の地域内のすべての問題に利害關係を持つて居なければならぬ。此れだけの事は必然的に許容せられて居る。例を以て言つて見る。沖縄縣選出の議員が、根室の鐵道敷設問題に正しい賛否を表明し得るためには、其の議員、隨つて其の選擧民は、此の問題に或る高さの知識と批判とを持つものである可きだ。次に沖縄縣選出の議員は根室の鐵道敷設に利害關係を持つて居る可きだ。此の二點が缺除せられるとすれば、議會の腐敗、隨つて選擧民の腐敗は當然の歸結だ。然るに此の二の條件を滿足せしめ得るものは、其の教育程度の高いこと、其の所有財産の大いなることを具有する人格だ。即ち選擧は普通選擧であつてはならぬ。制限選擧でなければ政治は腐敗するのである。

今一人の大資本家を取つて見る。彼は某々大學で學んだから、國家の、否世界の萬般の問題



に、可成りの程度に精通した知識と批判とを持つて居る。又同時に彼は其の事業の關係上自らは炭坑業者でありながら養蠶業に、海運業に其れ々々の利害關係を有し、國家の外交に、軍事に、直接の利害を感じ、國家の租税政策に重大の關心を意識する。然るに今彼の代りに低い賃銀勞働者を取つて見よ。彼は本來無識だ。自己の勞働に關しては、直接の體驗の教へる深い知識、資本家以上の知識を持つけれども、所謂議會の要求する天下國家の問題に就ては、遺憾ながら多くの知識を持たない。又此れに興味を感じようともせぬ。次に彼は其の炭坑の穴掘りに從事するだけで、國家に幾干の納税をも爲して居ないから、國家の外交や軍事がどうあらうと、又根室の鐵道や長野縣の養蠶がどうならうと、又國家の租税政策がどう變更せられようと、すべて其等の大局問題に對しては何程の利害をも感じない。其れよりも彼に取つて直接日常の利害問題となるは、自らの賃銀、勞働時間、坑内設備等の小局問題許りだ。然るに國家が議會の議員を選擧せしめる場合には、小局問題では無い、大局問題を議する人を欲して居るのだ。無教育なる勞働者は議員になつてならぬ。又大局問題に何の利害心をも有しない勞働者は議員になつてならぬ。同樣の理由より、彼等は同時に其の選擧者となつてもいかぬ。此くして地域的選擧制の腐敗を防ぐ爲めには、制限選擧制、特に所有財産と性別とを標準としての其れは、當然の準備なのだ。

制度としての惡を問題外に置いて、單に心意としての惡を攻擊する理想主義者、デモクラシイ

論者は、右の事實に鑑み、其の所論の基礎を先づ機能選擧制の上に置く可きである。

機能選擧制とは、各々聯合體が其れ々々に獨立した會議機關を有し、其の議員を選擧するものは、其の聯合體の組成員に限られる制度のことである。此れは理論的に餘りに當然なる主張だ。其れ故に機能選擧にあつては、會議機關は聯合體の數だけ多數にある。我々が家庭にあつては家庭内の問題を家族の會議によつて處理し、學級にあつては其の學級の問題を其の級の學生の會議によつて處理すると同じことだ。此の會議機關の議決は、何等他の聯合體によつて掣肘せらる可きで無い。又他の聯合體は、此の聯合體に利害關係を持たないから、實は其れに掣肘を加へようとさへ欲しないのである。若し利害關係を感ずるとすれば、其の利害を基礎にして別に新らしい聯合體が組成せられ、問題は此の新らしい聯合體の會議を經過して實行に移される。掣肘を欲する時が卽ち新聯合體の發端だ。此くして或る一人格は、其の有する機能の數だけの聯合體の所屬員なるに對應して、其れだけの數の聯合體の會議の議員選擧者被選擧者たる資格を持つて居る。機能選擧制は必然的に聯合體の社會學の歸結だ。各機能を代表する議員が、宗教團體、勞働組合、學校、産業組合等より選出せられ、其等を一丸とした一個の會議を組成するの謂では無い。宗教團體、勞働組合、學校、産業組合等が其れ々々に別個の會議を有するの意である。其の場合、地域的區別は理論的には影響を與へない。ギルド社會主義者の或る者が機能的選擧制の外に



地域的選擧制を存置し、此れにより消費者の機能を表現せしめようとしたのを見て、其の主張は兩者の折衷だとしてはならぬ。其の場合に考へられた地域は、機能としての消費作用の副指標だ。地域が地域として問題に上つたのでは無い。併し地域は、全然的に機能を制限しないとは言へぬ。或る聯合體の大いさが、地理的に甚だ廣い範圍のものとなり、主觀的中心の共同社會として意識する平面が餘りに大きくなれば、其れは自づからなる制約を受けるであらう。卽ち地域的制限は單に物理的のものだ。

## 五　政治の腐敗と政治教育

此れだけ解析して來た序でに私は一つ注意して置きたい事がある。其れは我國の政治評論家や代議士中の先覺者を以て任せられて居る人達が、國民の政治教育に熱心せられて居る態度に就てゝある。我々は常に與へられた環境を、與へられる最高の善にまで改造し創造しなければならぬ。其れが或る一定時の或る一點に立つての最高善だ。其れ故に我々は、現に我々の境遇が與へて居る政治的法律的規定の下に最高の社會改造を爲す可きであり、其の點では或は普通選擧論に、或は理想選擧運動に熱心するは至當の行動であらう。併し注意す可きことは、其等の場合、同時に目標として取られて居る選擧制度の根本惡を明瞭に意識して居ることだ。然るに私は不幸にし

てさうした場合を見ない。普通選擧、理想選擧等の運動者は、殆ど例外無しと言つてもよいやうに、現選擧制度は其れ自身何等の非難も加へらる可きもので無いとするか、或は其の制度を以てしても、各個人の政治的良心さへ正されゝば、極めて良好なる結果を見得ると爲す。よし明瞭に其の事を言はないものも、其の主張の背景裡には此れを許して居るとより外考へられぬ。私は其の態度に贊成し得ない。

彼等が口を開けば言ふところは、國民が政治に冷淡なる事だ。國民が政治的良心を缺いて居る事だ。折角與へられた選擧の特權を正しく使用して居ない事だ。小利にのみ凝滯して國家の大局に着眼しない事だ。いかにも事實は其の通りであらう。併し此の事實は寧ろ一の必然的眞理を雄辯に語つて居るのだ。此く動くは、水の低所に就くと同じい人情の一必然だ。此れをしも國民の政治心の腐敗だといふならば、抑も政治なる社會文化現象は腐敗する樣に出來て居るのだ。其の理由を知る爲めには、私が前に例示した一炭坑勞働者を見るがよい。彼の關係するところは日常生活の小利だけであつて、國家世界の大局では無い。前者は具體だが後者はたゞの概念だ。自己の生活内に占める意義の高下は殆んど全く比較せらる可くも無い。彼等は國家世界の大局に用事を持たぬ。其れ故に與へられた選擧の特權も、實は此れをいかに行使しようと、其の生活に影響しないのだ。關係の無い事に冷淡なのを咎める事は出來ぬ。何れに決定しようと自らの生活價値



に關與しない事の贊否を、一々良心の缺除として非難してはいけない。大局とは自己の機能の關係範圍内に就いてだけ言ひ得られるが、其の範圍以外の大局は實は無用の干渉だ。

此の意味に於て政治評論家や代議士の憤慨する國民の政治的腐敗は、實は射的を外れて了つて居る。此れによつて非難せられるものは民衆では無くて制度自身だ。若し政治教育なるものが、右の如き漠然なる所謂大局の利害心を與へるものだとすれば、政治教育は不必要教育だ。否寧ろ有害教育だ。人格は其の如き機能超越の擴散を加へらる可きもので無い。人格の擴大は機能を基礎とする。愈々鞏固に、自らの組成する聯合體の文化的目的を意識して、我々は愈々確實にその社會の共同意識を築き行く。無意義なる人格の擴散は卽ち英雄主義の醱酵する培養基である。一面に空疎なる所謂政治教育を行ひつゝ、他面に粗大なる英雄主義の跋扈を咀ふは、其の意を知るに苦しむ。

眞の政治教育は、機能選擧制への民衆の政治的良心喚起である。

## 六　政黨と其の腐敗の原因

一般に政治の腐敗する原因は、政治機關の形態自身の中に含まれて居ることを、私は既に述べて來た。政治は地域的分團體主義の上に立たず、機能的分團體主義の上に立たなければならぬ。

此れと同一の理論は、現在の政黨の上にも適用せられる。我々は現に我々の眼前に忌まはしい政黨の腐敗を見る。何とか此れを改造しなければならぬとは、殆どすべての少壯政治家の意見だ。彼等が其の範例として持ち出して來る所謂政黨の形態を見れば、概ねは英國の其れだ。所謂立憲政治なるものは一の歴史的文化的産物では無くて、一の合理的究極的形態であり、次に政黨は此の立憲政治の合理的理想的伴隨物だと考へるものゝ如くである。併し政黨の腐敗は、其の程度にこそ深淺はあれ、今は殆ど全世界的の現象だ。各國の有力なる學者は憲政常道論などを言ふ前に、抑々憲政と政黨との本質的關係を尋ねる樣になつて居る。

政黨の意義に就て何等かの考慮を費す必要の起つた實例として、私は今大正政變史の中から一つの事實を持ち出して見たい。其れは高橋内閣の崩壞である。此の場合、憲政の常道に隨ふならば、内閣は何れの政黨によつて組織せらる可きであるか。所謂憲政常道論者の說くところによれば、其れに相當するものは憲政會であつた。一の政黨内閣が崩壞すれば、次内閣は、當該政黨に次ぐ第二の大政黨によつて組織せられるのは、政黨政治の本義だといふのだ。併し事實はさうは動かなかつた。又世間でも所謂常道論なるものに餘り多くの同情を持たなかつた。私は現に起つた此の一實驗より何等かの理論を學びたい。

理想論者は一の典型的場合をのみ考へ、苟くも現實が其の典型の如くに運轉しなかつたとする



と、何等か此れを特別の場合であるかに考へるのが普通である。今の場合で言へば、政黨政治なるものは實はいくらでも理想的に運轉せられて行く筈のものではあるが、政治家の良心の腐敗した爲めに、此の如き特例を作つて了つたといふのである。併し事實には、一として特例、或は例外と稱せらる可きものが無い。すべてが例外的に動くは事實の本質である。理論は其の例外のすべてを蔽うて妥當的に考量せられなければならぬ。所謂常道論が世間に不人氣であつた理由を尋ねて、多くの人はすべての政黨の墮落を以てした。卽ち政友會が墮落したと全く同じ程度に憲政會も墮落したから、國民は内閣を組織する政黨が甲なると乙なるとに關しなくなつたといふのである。此れは確かに大いなる原因である。併し其れはなほ原因の一端緒だ。より根柢的なる原因は背景に潛む。今や社會は政黨政治其のものゝ本質を疑ひ出して居るのである。忌憚無く言へば、社會の民衆は次の如くに考へて居るのでは無いか。政黨政治は結局此の腐敗を生み出す原因を持つて居る。其れは凡そ如何なるものも何等かの理由によつて腐敗すると同じことだ。併し其れは事實としての政黨政治のことである。本質としての其れは、必ずしも腐敗しないでよい。世界の何處かでは、嘗て理想的の其れも存在して居たらしいと。此の考へ方は其れ自身決着の附かない、不徹底のものだ。我々は其れをもつと徹底して行つて、次の如くに言ひ訂したい。政黨政治其のものは、本質的に腐敗の原因を其の組織自身の中に持つてゐる。だから事實としてさうなつ

たのだ。我々は從來、事實の上に於て理想的の政黨運用を見たことが無い。幾分でも理想的に見えて居たのは、實は政黨政治の爲めでは無くて、其の他の原因によつてゝあつた。其れは政治史の實例に就て一々に論證し得られることであつた。

## 七　政黨成立の根據

私は今政黨政治なるものが政治の常態であるかどうかを深くは詮索しない。併し大體に於て、政黨は、政治運用の一手段樣式として不必要なものでは無いと思ふ。併し現在の政黨は、地域分團體主義の議會を前提しての其れだ。此の場合の政黨が正しく運用せられるや否やは大いなる疑問だ。政黨は一の立場を共通ならしめるものが、其の立場の上に立つて政策の甲乙を爭ふ爲めの手段である。其れ故に共產黨なるものが無產者の立場に立ち、ブルジョアジイに對抗するとすれば、此の場合の共產黨は、正しい意義の政黨では無い。何故なれば無產者の立場が直ちに共產主義なるや否やは一の疑問だからである。無產者の立場を共通ならしめるものが、其の理想を共產主義と爲すや或は然らざるやによつて政黨の分立は始まらなければならぬ。政黨は常に政策による對立だ。共產主義を問題外とし、兎に角無產者の立場に立つての政黨なるものがあるとすれば、其時には此のものはブルジョアジイと經濟政策の上に於て反對することを豫定して居る。露國で



は所謂新經濟政策なるものが問題になつた。此れに贊成するものと反對するものとあつた。併し彼等はすべて共產主義者であり、共產黨の黨員だ。けれども今此の政策の上での對立を見たから、其處には穩和派と徹底派との二政黨を分立せしむ可きだ。すべて政黨の本義は此處にあると私は思ふ。

右に言つたことを既述の社會論に對照せしめれば、要するに政黨なるものは、一の機能に對比せられて始めて意味を爲すことゝなる。一の機能に就き其の將來政策の意見の相違により、政黨が分立するものである。例を以て言へば、鐵道政策の上に於て、主交通系統に力を入れ、主として此れを改善するか、或は小交通系統にまで同樣の注意を加へ、隨つて全系統に徹底的の改善を加へないで置くかの意見の相違は、直ちに持ち上がることゝ思ふが、其の主見解の相違に對應して二の政黨が成立する。此れが正しき意味の政黨だ。機能が異れば其れに對應して又他の標準による政黨が成立する。軍事、外交、敎育、產業のすべての問題に對して其れ々々に別個の政黨が成立し、一人は其れ々々に此等の何れへでも所屬する。併し其れによつて政治は少しも複雜にならない。何故なれば聯合體の異る每に別個の會議を有するが故に、其の一會議に於てはたゞ一標準の政黨だけが成立するからである。此くして政黨は始めて其の活動を純粹ならしめ得る。

## 八　地域的政治と現在政黨

現在の政黨は、此の如き機能本位の會議を前提しない。其れ故一の政黨は、軍事、外交、教育、産業等のすべての機能に對し、何等かの綱領を立てゝ居る。現在我國の政黨の頭首が屢々發表する意見を見れば其のことは分かる。併し我々が其れに賛否を表明する場合には、綱目によつての分離的賛否にして置くより外は無い。教育政策産業政策には賛成するも、軍事外交の其れには賛成し得ないといふが如くにだ。然るに政黨は此の如き分離的賛否を許さない。たゞ全體的に味方か敵かを決定するだけである。其れ故政黨の一員にならうと思ふものは、其の政治的良心を痲痺せしめ、政治的意見を考慮しないことを、必然的の資格にして持たなければならぬ。又全くのところ、事實が其の通りになつて居る。現在の政黨は其の腐敗を自らの制度の中に含むといふ理由は此れだ。

其れ故此の如き政黨は、實は政策決定の爲めに何等の責務をも盡しては居ないのだ。此の政黨の結果として次のことが起る。

第一に、政黨は餘り具體的に其の綱領を掲げて置いてはならぬ。もし其れが具體的に、明瞭に、發表せられて居たとすれば、綱領の各要目は互ひに矛盾を起す惧れを持つかも知れぬ。又さうした政黨へは入黨者が無くなる。何故なれば、入黨者は何等かの利害關係から、必ずや此の綱目の中の何れかに賛成の出來ないことになるであらうから。此くして事實的にも、我國のすべての政黨が甚だ漠然たる言葉の綱領を掲げて居る。政黨の首領の爲す演說は全くの骨拔きで、何の內容をも含んでは居ない。故原氏の如きに至つては白紙主義と言ひ、或は是々非々主義と言つた。此れは最早政黨存立の意義を失つて了つたものだ。何れの政黨といへども是々非々を方針とするも、其の是々非々の內容に對する理解を異らしめるから、政黨は成立するのだ。

右の如くに政黨が、何等具體的の綱領を有しないことの結果は次の如きものだ。第一に、政黨は其れが爲め、常に瞞着の議論をのみ立てる。大綱が漠然として居るから、小節はどんなにでも便宜的に、機會主義的に變化せられるのだ。第二に、其れ故に我々は一の綱目の理論的發展を知り得ない。政黨の中には綱領の變更せられないことを手柄にして居るものもある。併し其れが眞に歷史的文化的の政治現象の將來行動を規定するものであるならば、實は絕えず變化するが當然のことだ。形式的理想原理は不變である。併し其れは政黨の甲と乙とによつて差違のあることでは無い。例へば我國の政黨では、皆な其の綱領を形式的に、概念的に言表するから、一の政黨の綱領は其のまゝに他の政黨に當て嵌まる。政友會は産業の興隆や教育の振興やを標榜するが、苟くも國民たる限り、誰れでもが其れだけの目的を持つて居る。其れはたゞ政治を爲すといふ概念

を言ひ換へたゞけのものなのだ。併し一旦其の形式が事實の上に投射せられ、內容を含んだとすれば、產業はいかに興隆せられ、敎育はいかに振興せられるかにより、政策の相違を生せしめる。政黨は當路者としての體驗を基礎とし、次第に繼起する環境に對應して、其の綱目を進化展開せしめる。政治は此れが爲め絕えず進步するのである。我々は此の如き綱領や政黨領袖の所信發表やを、世界の中で勞農露國に於て見るだけだ。第三に、隨つて政治は何時になつても理想的に進まない。理論の進みが無いから事實の進みの無いのは當然だ。第四に、同じ理由により、民衆は政治的に何等の訓練をも經ない。政治敎育は口頭だけでは駄目だ。實際の運動が最もよい敎育である。綱領の漠然たる言表によつて訓練せられ、敎育せられる民衆ありとすれば、寧ろ其れは一奇蹟である。

再び元とへ歸り、現在の政黨政治の歸結を尋ねて見る。次に此の政黨組織によつては、同一人が屢々政黨の板挾みに逢つて居る。蓋し或る一人は其の政黨の綱領の甲乙には贊成するも丙丁には贊成しない。しかもなほ彼は此の政黨に屬して居る。そこで一旦丙丁が主問題になつたとすれば、彼の立場は甚だ苦しいものになるのである。例へば普通選擧案にして見れば、其の反對黨の某々議員は內心此れに贊成するにも拘らず、その屬する政黨に掣肘せられて、表面的に此れが反對者にならなければならぬ。又自分の選擧區への鐵道敷設問題が議案となつたとき、自らは其れ



に大贊成であつても、屬する政黨自身が反對する場合には、自らも已むを得ず此の反對者の一人とならなければならぬ。甚だ心苦しい事だ。或るものは、此の事を避ける爲めに、某々案に限り、黨議に拘束せられず、各自の自由意見に任かすことにしたいと主張する。又或るものは、前例の自選擧區の鐵道敷設問題の場合に、板挾みとなつて居る反對黨議員を攻擊し冷嘲する。併し此の冷嘲は、政黨政治の始めから極まつて居る弱點を事新らしく指示して居るのであり、甚だ智慧の無い仕方だ。要するに此等の弱點は、機能的政治にあつては全部的に除去せられるのである。

此の歸結によつて齎らされる政治的弊害を言へば、此れが爲めに黨員は自己の信念を裏切る無理な議論をしなければならぬことだ。例へば嘗ては普通選擧案の熱心なる提出者であつたものが、今其の反對案の說明者になつて意見を公表する樣の場合だ。自らの人格を侮辱し、他の信賴を裏切る、此れより甚だしいは無い。政黨者は愈々益々其の政治的活動に節操無く、民衆は、表面的であつて眞實さの無い政治に望みを失ふのである。

最後に此の意味の政黨にあつては、政黨の成立意義が政治には無く、何等かの利權にある樣になるのは理の當然だ。政黨が政黨として結社するには何等の意味も無いからだ。自己の主張の無いところ、寧ろ其の主張の反對を、政黨の所屬員なるが故に採用することを、黨議に服すと稱し

て居る。併し政見の一致しないところに服從を强ひる黨の結束とは抑々何ものであるか。其れは當然何等かの政策ではあり得ない。政策は既に自らの其れと反對なるが故にだ。黨の結束の爲めの此の本質的なるものは常に何等かの利權だ。政黨政治の形態其のものに、此のものは餘りに當然なる結論である。其れ故に民衆は一の政黨に對し、良心的には贊否の意を表し樣が無い。政治的良心の無いものだけが政黨員となつて加はり得る。政策を離れての政黨だから、其の何れが如何なる消長を爲さうと、民衆は其れに何等の興味をも繫がぬ。又政黨員の議員は、政黨は政策に無關係だから、自づから議會での行動に無責任となる。議會や民衆の前やで爲す演說は、彼の人生觀から出て居ない。其處にはたゞの芝居がある。民衆が此れを悅ぶとしたら、其れはたゞ一場の芝居としてだ。政治論は全く三百代言化せられて了つた。

## 九　政黨政治の危機

機能本位の政治、隨つて機能本位の政黨にあつて、我々は始めて憲政の常道を言ふことが出來る。一の政黨が失脚した場合、他の反對黨が此れに代り、政治の實際を運用するであらう。政策は甲ならざれば乙なるの外無きが故だ。政黨交替とは實は政策交替の意だ。何等か政策を相反對せしめない政黨には、交替も常道も考へられないことでは無いか。今若し我國の所謂政治家等



が、依然たる地域團體主義の上に立つ政黨論者であり、其の所謂政黨政治を民衆の前に齎らして、政治的訓練、政治的敎育を叫ばうとするならば、其れは却て民衆を蒙昧ならしめ、政治の遊戯化を敎へるものだ。政黨政治の上には今正しく一の危機が來て居るのである。

併し或る人は言ふでもあらう。政黨政治が其の如く無意義のものならば、其れは過去に於て何等の功績をも擧げ得なかつたに相違無い。併し事實は全く此れに反するでは無いか。例へば英國過去の憲政の如きは、政黨政治の好模範である。我々の政黨政治は今後改善せられてさへ行けば、やはり同一の效果を擧げ得るものだ。政黨は現に腐敗したとしても、政黨其のものゝ形式に罪があるのでは無いと。私は此の說に贊成しない。英國過去の政黨政治を云々するものは、詳密に其時の政治に現はれて居た政治問題の性質と、及び其の問題に對する民衆の態度とを調査して見るがよい。政治問題は餘り複雜では無かつた。換言すれば、或る定まつた時に問題とせられた政治問題は、略んどすべて單一の性質のものであつた。言ひ換へれば、重要なる政治問題の幾つかゝ、同時に社會に問題となる場合は、割合に少なかつたのである。其の結果は自づから政黨を機能的のものにした。政黨政治が腐敗しなかつた理由は其れである。そして右と相反する場合、換言すれば、幾つかの主要政治問題が、同時に社會に問題となつた時には、政黨政治は常に動搖を呈して居た。此れは社會の自然的法則だ。我々は其の事實を如何とも動かし難い。確定的の安

全路は機能的政黨政治だ。地域本位の議會の政黨政治が腐敗しなかつた場合は、寧ろ偶然に機能的政黨政治の法則が行はれて居た特殊の例だ。文明が進み、各々の文化生活が其れ々々に分離した、正當の勢力を保有し、複雜に交錯する現代の社會にあつては、政治問題は單一化せられ得ない。又若しさうした單純化が行はれるとすれば、此れは何れかの文化價値の專制を爲す場合であり、我々は進んで其の傾向を打破しなければならぬ。すべての文化範圍の政治問題は、共に等しい重要さを以て政治闘の上に現れなければならぬのだ。其れ故に、地域本位の政黨政治がなほ痛切に不便に感ぜられて居ないときは、文化範圍の何れかゞ重視せられ、其他が此れにより蹂躙せられて居るときの實證である。例へば現代にあつては、教育は經濟により餘りに強く壓迫せられて居る。其れ故に教育政策の上での政黨對立といふ如きことは、一般の政治家の耳に寧ろ滑稽にさへ聞えるのである。

## 一〇　政治機關の役員の法的性質

政治機關の根本形態を問題にしたとき、我々は先づ選擧制度を考察した。此の場合地域制に反對して機能制を取つたのである。次に其の問題に關聯して政黨成立の基礎を考察した。いふまでも無く政黨は機能的政治を前提して始めて其の意義を發揮し得るのである。併し政治機關の形態



問題として取扱はなければならぬ問題、特に現在の社會思想の上で問題にせられて居るものは、此の外に二つある。其の第一は、政治機關の持つ權力、換言すれば政治機關を組織する役員の行動權力は、名代的(デレゲエト)であるか、代表的(レプレゼンタティヴ)であるかの問題だ。其れは必然的に役員解任の方法の考察をも含めて居るから、解任(リコオル)の問題とも呼ばれる。其の第二は、所謂三權分立の問題だ。特に立法と行政との關係問題だ。右の二者を論ずれば、其れで我々の取扱ふ可き政治機關の問題は悉された譯だ。

私は右の順序に隨ひ、次には役員の權力の性質に關する問題を解剖して見よう。

此れには二の見解がある。第一は、役員は全體の民衆の代表者だといふのであり、第二は、其れは單に全體の名代に過ぎぬといふのだ。代表說に隨へば、役員は全部的に、又人格的に立法或は行政の權力を委任せられる。其れ故に選擧せられた役員は、一旦選擧せられた後は、其の基礎である選擧者の意向如何には無頓着に、又其の意向によつて何等掣肘を受ける處無く、自己の意志に隨つて行動を爲す。或る一の事項に贊否の意を表しようと思へば、彼はたゞ自己の人格の自律的命令に隨つた表意を爲せばよいのである。役員選任には一定の期間が定められる。其の期間中は、彼はいかなる行動を爲さうと、其の行動の故に選擧者の反對を買ひ、選擧者によつて解任せられはしない。此れにあつては、役員は完全に自律すると。

此の代表說が强く進んだものにあつては、代表其の事をすらも許さない。議會政治は代議政治では無いといふのだ。議員は國家の議員である。民衆を代表したが故の議員では無い。隨つて解任の權力はいかなる場合にも選擧者などにあるのでは無いといふのだ。

第二說の名代說は、すべての點に於て代表說の反對だ。役員は單に選擧者の名代だ。すべての意見は選擧者によつて豫め決定せられ、役員は單に此の意見を上階の立法會議に齎らし行くか、或は其の意見の實行に當るだけだ。役員自身が選擧者から離れて立法し行政する權力は、絕對に何處よりも與へられては居ない。役員は絕えず其の背景たる選擧者により監督せられて居る。一旦彼が其の囑任に背反し、立法議會に於て彼の背景たる選擧者の全體意見に反する決議に贊したとか、或は其の決議の執行を誤つたとかすれば、彼は卽座に背景たる選擧者により役員たることから解任せられるのである。隨つて役員は單に他律的だと。

此の問題は今に始まつた新らしいものでは無い。併し今また其れは新らしい色彩を以て考察せられ始めたのだ。そして此れは當然なことでもあるが、代表說は地域的選擧制を取る人によつて、又名代說は機能的選擧制を取るものによつて其れ々々に贊成せられて居る。機能的選擧制が新らしい制度だとせられると全く同じい程度を以て、名代說は新らしい立場だと稱せられて居る。



## 一一 名代と代表

地域的選擧にあつては、名代說は必然的に採用せられ得ない。此の場合にもなほ且つ名代說をいふのは大いなる謬說だ。何故なれば此の選擧制にあつては、選擧者と被選擧者との關係は單に人格的であり、機能的では無い。軍事、外交、產業、敎育等のすべての問題に關する贊否の權能を、或る一人格に囑するのだ。其等すべてに對しての意見が、選擧者と被選擧者との間に同一となる場合があるとは考へられない。よし其の稀れなる場合があるにしても、更に其の關係が永續せられ得るとは限らない。被選擧者が選擧者を選擇する標準は、單に彼の學識、財產、人格等である。意見と意見との全然的合致では無い。其れ故に地域的選擧制には、名代的性質の役員なるものはあり得ないのだ。名代となつて上階會議に出席す可き基礎の、下階團體の總體意見なるものが無いからだ。從來の選擧論に於て名代說の排斥せられたのは當然である。

其の代りに名代說は、直接に機能選擧制と結び付いて居る。機能選擧制の必然的具現は名代的役員だ。選擧者が被選擧者を選ぶ標準は機能的だ。其れ故、よし下階團體は集合して全體的意見を纒めないにしても、或る一問題に對する役員を選擧するときには、其の役員投票の數の相違が、卽ち下階團體の全體的意見を示すこととなる。況んや其處には先づ下階團體の會議があり、

其の後に役員が選擧せられるのだ。役員は名代であるより外は無い。又次に其の役員が背任の行爲を爲したとすれば、機能的團體にあつては、直ちに役員の責任問題に關しての輿論が持ち上る。役員は此の輿論の大勢に逆抗することが出來ないから、自ら其の地位を退くだらう。此れは自然の趨勢だが、併し團體は更に此れを有意的に行つて、背任役員を解任する。地域的政治にあつては、役員の背任が社會の輿論を喚起する力は甚だ微弱なものだ。此くして我々は機能選擧制の贊成者なる限り、役員の權限に關しては名代說を採用せざるを得ない樣に見える。

地域選擧制にあつても、其れが政治なる以上、名代說の萠芽を起さうとする趨勢を社會の中に始終包藏して居た。此れは當然なことだ。選擧者は主たる政見に於て自己と見解を同じくするものを選出しようとする、名代的役員選擧の要求を發揮したものだ。併し地域的選擧制其のものゝ性質上、被選擧者はいかにしても選擧者の希望を裏切らざるを得ない。彼は其の選擧區へ歸つて其のすべての選擧者に面目無い思ひをしなければならぬ。此の不面目を誤魔化す手段は、現在に於ては政黨だ。自分は某政黨の所屬員なるが故に黨議に服するものとして、此の主張に贊せざるを得なかつたと辯明するのである。選擧者も亦さう聞けば、誠に已むを得ない事情だと思ひ諦めて居る。互ひに反省の無い行爲だ。目下の處、地域的選擧制に伴なふ役員背任の避難所は政黨だ。政黨の惡は周知の事實でも、なほ且つ破壞せられ得ない根本の理由である。



元へ歸つて私はなほ代表說と名代說とを比較して見よう。機能選擧制と名代說とは不可分離の關係があると私は言つて置いた。併し詳しく實例に就て見れば、其の名代の意義が何處まで徹底せられるかはなほ大いに疑問だ。例へば下階團體は一々の方針や執行やの事柄を其の細末に亙つてまで決定することが出來ぬ。若し其の細末に亙り、且つ持續的に全團體員が決定し得るといふのであれば、本來役員なるものは不必要な筈だ。役員が存在するといふことは、卽ち役員による獨立行爲を既に何程か許して居るのだ。實際の政治運用に於て役員は背景たる團體から解放せられた行爲をするので無ければ、どうにも進みのつかぬものだ。

又次の樣な例もある。會議は小團體より大團體に進み、段階的に幾多の會議を成立せしめる。役員は順次に下階の甲より上階の乙、乙より丙と選任せられる。然るに今一人あつて、下階の甲會議の役員たるのみならず、同時に其の會議より選任せられて上階の乙會議の役員であつたとする。今若し彼が其の最下の背景團體によつて背任したと認められ、解任せられた場合はどうなるか。彼は甲の役員を解任せられると同時に、乙の役員たることをも解任せられたのであるか。もしさうだとすれば、甲會議の全員の決議權を侵害したことになる。又一々に此の如き頻繁複雜なる解任を爲して居ては、事務は澁滯し、何等の進捗をも見ないであらう。

此くして理論的にも實際的にも、名代說は採用せられ得ないものとなる。併し或る程度までは

名代說を採用して居たいのが機能的政治の特色だ。此の矛盾はいかにして解決せらる可きであるか。私は考へる。役員の本質的性質としては、我々は人格の絕對的自律を認めるが故に、いかにしても代表說に贊せざるを得ない。代表は役員たることの意義である。たゞ選擧及び解任の實際的形式としては名代說の主張する處の如くにならなければならぬ。名代は役員たる事の樣式だ。代表說と名代說とは、恐らくは其の問題の性質を異らしめて居たのであらう。樣式に於ての代表が不可なる如くに、意義に於ての名代は不可だ。樣式に於ての名代は、單に方法の問題だから、運用の便宜に隨ひ、種々の折衷案を講じなければならぬであらう。併し其れあるが故に、役員の意義を變化せしめることは無い。



# 第九章　經濟制度の根本形態

## 一　生產と消費の組合組織

政治機關のすべての形態が社會組織の根本形態を無視し得ず、此れを基底として組成せらる可きであると全く同樣に、將來社會の經濟制度も亦根本的に、社會組成の根本原理を基本にしなければならない。社會組成の原理は一の文化的の其れではあるが、併し其れを基本とし、其の上に組成せられる經濟制度の原理に對比せしめられゝば、なほ一の存在態だ。存在態と文化態とは、低次と高次と、一の相對的關係を以て連續する。經濟制度の理想形態を求めるときには、社會原理は其れの規制原理では無く、存在世界としての制約だ。經濟原理は其れへの規制原理として臨み、社會原理の存在的制約を無視し得ない。政治機關の社會原理に對する關係も亦全く此れと同一である。

經濟制度の究極的に理想的なる形態はいかなるものであるか。我々は社會組織の理想形態を尋求したときに、既に其の問題に觸れて居た筈だ。バアソナル、アナアキイこそは、我々の理想社

會である。經濟的活動には生産の其れと消費の其れとが一先づ區別せられる。パアソナル、アナアキイの社會にあつては、生産と消費とは、給付と反對給付と、相互に代償的關係を以て結び付けられてはならない。共通標準に照して量的に生産と消費とを交換することは、ブルジョア的法律だ。然らば我々は最早經濟制度の理想形態を求めることが出來たのだ。其の制度にあつては、我々は生産しようと欲するだけ生産し、消費しようと欲するだけ消費すれば其れでよい。何を何れだけ生産し、消費するかは、全く個人の自由選擇の範圍に屬して他人の干渉を許さない。併し勿論其處には普遍妥當性の完全に發揮せられることを豫想する。生産と消費とは、個人の氣隨的選擇で無い。彼の自然的素質と社會の中に占める關係的地位とに、普遍妥當的價値附けを與へたとすれば、其れが卽ち彼の正しく發揮する生産と消費とだ。

此く言へば、其處には何等かの制度なるものも考へられては居ないとしてよいであらう。何故なれば、機關といひ制度といふには、異質的の人格の上への同質的制限を、何程かの程度には許容せざるを得ないであらうから。理想の社會は無機關であつて有機關の理想的なるものであり、無制度であつて有制度の極限的なるものであらう。理想社會は我々の理想主義的努力の究極態だ。たゞ極限概念としてのみ考察に上り得るものだ。

其れ故に我々は今、此の極限概念と現實態とを結び付ける爲めに、さうした極限よりは一歩手



前の經濟制度を考へて見たい。此れを發展すれば、遂に其の極限に理想態を豫想す可き其の領域だ。此の社會にあつては、經濟制度は多元的組織の社會木理に順應する。生産と消費とは、其れ々々に組合組織を作る。

## 二　賃銀制度の廢止

先づ生産活動を考へる。我々が生産制度の理想的、寧ろ言へば本質態と、現實の其れとを對比した時に、直ちに主張しなければならぬ事柄は賃銀制度の廢止である。其れは餘りに當然なる要求だ。寧ろ我々が今現に此の制度の中にあつて活動し、息の詰まる樣な苦しさにさへすつかり平氣となつて居るのが不思議な位だ。賃銀制度は現代文化人の持つ偉大なイドラだ。此れが廢止を社會に宣傳するは、昔時の奴隷解放の其れ以上に普通の常識だ。しかも其の結果の道德的影響は驚く可く甚大である。恐らく其れは現代人の人生觀を一變せしめるであらう。自由の東明が其の時始めて全人類の上に輝き出でるであらう。我々は賃銀制度の廢止せられるに至る時まで、我々のあらゆる行動が、よしいかに良心的に選擇せられたにせよ、何等人類的の價値を發揮しないことを此處に宣言する。賃銀制度は現代文化のあらゆる光耀を湮滅せしめる。賃銀制度の下にあつて、すべて生命的なるものは窒息する。

勞働は一の目的を意識した人格の活動だ。單なる生理力の必然的發揮では無い。勞働は機械の勢用（エナヂイ）とは性質の違つたものだ。勞働又は勞働力は、人格に結著して其れからは分離せられ得ないもの、人格の表現は、或る見方からは常に勞働となるより外に途の無いものだ。卽ち勞働非商品主義の起る所以だ。勞働非商品とは、賃銀制度を廢止する事だ。根本的に賃銀制度を廢止しないで置いて、勞働を商品として取扱はないといふ意味を私は理解し得ない。商品は一の物である。一の固定品である。然るに勞働は本質的にさうした性質を持ち得ない。人格、又は人格の一部、又は人格に結び付いた表現が、商品の如くに彼此賣買せられることは、人類の此の上も無い汚濁だ。人格は自律する。單に其の一つの行爲でも他の人格によつて律せられたとすれば、其れは人格の侵害として非難せられなければならぬ時に、人類は未だ勞働商品主義の迷妄を破り得ない。白日は世界を照らす。其の暉々たる光耀の下に、人類の殆ど全部は自らの人格を商品陳列棚の上に並べて、甚だ少數の顧客の値切りを待つて居る。人類の世界は動物の其れよりも窒息的である。我々は賃銀制度を廢止しなければならない。

他人の人格表現を商品として購ふものは、自らの品位を破り、又彼の品位を傷ける。凡そ人格の品位を失へば、あらゆる不德として爲さゞるは無い。人類の上に道德の頽廢の起るは全く根本的に賃銀制度の爲めだ。人格は賃銀によつて賣買せられ、商品は商業主義によつて僞瞞せられ



る。しかも人類は自らを此れが渦中に投ずるよりほか、其の生存の途を見出し得ない。其の泥を濁して其の波を揚げ、其の糟を食つて其の汁を啜る。賃銀制度と商業主義との世界にあつて其れは已むを得ない事だ。現代人の良心の痲痺は全く此處に原因したと私は信ずる。我々は賃銀制度を廢止しなければならない。

人格と、人格の表現としての勞働とが分離して取扱はれて居ないとき、勞働は其れ自ら快適である。其れ自ら目的である。人は勞働せずに居られない。人格を自律せしめるとは、人格活動をあらゆる文化範圍へ伸達せしめることだ。創造の根本義を發揮することだ。隨つて勞働の表現は個性的である。質として賞味せらる可く、量として賣買せられない。生產と消費とは、藝術品の創作と鑑賞とに匹敵せられるものだ。其れ故に生產者が自ら勞働を目的とし、勞働を快適だとして生產した時の生產品は、質に於て甚だ高雅だ。例へば昔の刀工や陶工の作品が其れだと言へる。我々は我々の使用し消費するあらゆる貨物が、此の如く質としての高雅を持つ事を要求する。我々の周圍のあらゆる貨物がさうなつたとき、我々の藝術意識はいかに高く維持せられ、我々の良心はいかに貴く其の歸す可きところに歸するであらうか。併し我々の社會に今此れを言ふは無益である。何故なれば、勞働者はたゞ賃銀を得んが爲めに勞働するのであり、其の勞働自身には何の興味をも見出さないから。別に賃銀に相應する收入の途があれば、其の時彼等は勞働し

ないで已むのだ。吾々は勞働者のさうした態度を攻擊す可きで無い。賃銀制度の奴隷となつて居る勞働者に其れは必然的なる態度なのだ。我々の周圍の貨物がすべて、粗質であり、非藝術的であることを攻擊してはならない。何故なれば、商業主義は大量生產の間に巨額の利益を收める。現代の要求するものは質で無くて量だからだ。此くして人類の社會は、燦爛たる文化の產物を陳列するに拘らず、其の品質に於て荒蕪を極める。遑々として眩暈の途を歩む人類の姿が其處にある。我々は賃銀制度を廢止しなければならない。

## 三　動產奴隷と賃銀奴隷

往時は人類の世界に所謂動產奴隷があつた。經濟制度の推移は、自づから動產奴隷を廢して賃銀奴隷を生んだ。併し其れが根本的に人格の奴隷性を離れないことは昔と今と何の變りを見ない。寧ろ賃銀奴隷は動產奴隷以上に辛辣だ。商業主義の產物として、前者は後者よりも遙かに近代的なる危險の十字角に曝される。

動產奴隷は人格全部を一の動產として取扱ひ、此れより彼へ他の動產と何の差別も無く賣買する。併し其の目標とするものは何かと言へば、いふまでも無く動產奴隷の勞働だ。たゞ其の時代には、勞働と其れの主格である人間とを分離して考へることが出來なかつた。其れ故に、資本家



は勞働を所有せんが爲めに、勞働者を併せて所有するより外に仕方が無かつた。賃銀奴隷の所有主は、更に狡猾となつて其の必要とする勞働のみを所有し、無用なる勞働者を彼等から排斥した。動產奴隷を解放して賃銀奴隷の範圍を擴大したのは時代の趨勢だけでは無く、正しく彼等の利益標準に隨つたのである。

賃銀奴隷は、其の勞働を賣ると賣らないとに關し、自由の選擇を爲す可き政治的自由を持つて居る。其れだけを見れば賃銀奴隷は確かに動產奴隷よりも勝れた地位を占めた。若し勞働者が、其の勞働を賣らないで生活し得るとすれば、其時から彼等は完全なる人格の自由を得たかも知れない。併し其れは單に口實的に許された自由であつた。勞働者が勞働を賣らないで生活するとは、現在にあつては其の概念自身が既に矛盾したものだ。彼等は一日といへども其の勞働取引を休んではならない。

資本家としては、勞働者を勞働から切り離し、單に其れの果實だけを吸收し得る制度になつた爲め莫大の利益を享ける。彼等は其の事業の性質により、大量小量其の意に隨つての勞働供給を受けることが出來る。一旦其の勞働を不必要だとするに至れば、直ちに其時から此れが購買を止めればよい。しかも其の勞働の價格は、其時の社會的關係に隨つて定まつた最低のものに就くことが出來る。其の賃銀は商品の値段だから。勞働者の生活費などゝは何の關係も無い。此れを決

するものは商業主義の一般の標準である。

昔時の動産奴隷にはかうした事が無かつた。兎に角其の所有主は、自らの經營事業の有無盛衰に關せず、奴隷の生活を保證しなければならなかつた。又其の生活の保證が餘り貧弱であれば、奴隷の果實としての勞働も粗質になるから、結局其の持主に不利益となる。奴隷は其の生理的生活に對してだけは不安を感ずる必要が無かつた。換言すれば、動產奴隷には失業の危險と最少生活費の危險とが無かつた。然るに賃銀奴隷は、動產奴隷の曾つて知る處の無かつた其の二つの危險に曝された。最少生活費の保證は、其の勞働を購買する資本家の關知しないことだ。彼等はたゞ一般の商品を値切ると同じ樣に最低價格の勞働を購ふだけだ。自己の經營する事業の盛衰に從ひ勞働者を解雇せず、或は現に解傭する勞働者を解雇したとしても、其れは商業主義の制度下には止むを得ない罪惡だ。失業は現制度の釀す必然的歸結だ。商業主義の旗幟の下に一の英雄と呼ばれる投機的冒險家が、頻りに名を成し功を擧げれば、其の名、其の功に正比例して勞働者の冒す失業の危險は大となる。一世に羨望せらるべき實業家と、其の經營する近代產業の大建築は、一世に浩嘆せらるべき勞働者の人格と、並びに其の身體を傷害するのである。賃銀奴隷は動產奴隷よりも遙かに悲慘だ。遙かに不道德的だ。我々は賃銀奴隷を廢止しなければならない。



## 四　生產者組合の組織

賃銀制度が廢止せられ、勞働は勞働者と離れて其の意義を失ふに至つた社會は必然的に產業に於ける勞働者の自治だ。

同一性質の產業に從事する勞働者は、地域的、個性的其他の制約に隨ひ、或は大、或は小なる生產組合を組織する。其の生產組合內の事は、其れに屬する勞働者によつて自治的に決定せられる。此の如き一產業の小組合は、幾つか結合して一の高次の組合を組織する。此の階次は次第に高く進み、すべての產業を含んで、其處に最も廣汎なる範圍の生產組合を組織するであらう。其の組成の原理は、全く機能的だ。一の組合の勞働者は、其の生產の技術の高下に隨ひ、階等的の數群に分れ、其れ々々に其の組合への發言權を異らしめる。此れはデモクラシイの精神を破るものでは無い。例へば、其の生產の原料品購買、生產品の種類選擇等、生產の技術方面に關してのことは、其の組合の最高技術者の階群が決定す可きであらう。此れに反して、其の組合員の進退、組合の政治的意見の決定等は、組合員全部の一般投票に待たなければならない。

組合員は其の生產の技術に就き、絕えず高級の專門技術監督者の指導を受ける。此の監督者は勿論、最高技術者の階群に屬する組合員に對し、全組合員の一般投票を以て選擧せられたもので

ある。技術監督者は組合員に對し專制的であることが出來ない。若しさうであれば、彼は直ちに一般組合員により排斥せられ、其の任を解かれる。組合員となるには、一定の技術的資格を必要とする。其れ故に、或る組合へ入會を欲するものは、相當の學校教育を經過するか、或は亦其の組合の入組合試驗を受ける。假入組合を許諾せられたものは、一定の期間其の組合の技術監督者より技術の教育と訓練とを受ける。其れ故に生産組合の監督者の性質は寧ろ監督では無くて教育にあるのだ。假入組合員の中に就き、監督者により其の組合員として十分の技術を持ち得たと認定せられたものは、監督者の鑑査申告を待ち、一般組合員の投票により確定的に入組合を許可せられる。以上の如くにして組合員は其の生産に怠慢であることが出來ない。又一の生産に何の技倆をも持たないものが、其の生産を悦ぶからといふ理由だけで其れへ參加することは許されない。高い技術を持つものは、高い階等の群へ所屬して、其の程度の生産に携はる。此くして我々は、生産は其の人の稟質へ正當に相當す可しといふ普遍妥當性の要求を略ぼ完全に滿たし得るのだ。

組合は、なほ其の全體の政治的運用を敏活ならしめる爲めに、種々の階等の群によつて組成せられる會議、一般組合會議、指導者、事務人等の機關と役員とを持つ。其の役員がいかなる法的性質を持つ可きかを私は既に前節で述べた。



生産組合に就て特記しなければならぬことは、其の組合員はすべて共通の報酬を其の組合より受けることだ。報酬（ペイ）と賃銀（ウェージ）とは根本的に其の意義を異らしめる。報酬は勞働への支拂ひで無くて勞働者への機能保證だ。勞働者が一の人格として、他のすべての人格と全く同じ權利を主張し得ることの保證だ。其れ故に、其の支給額は全組合員に等額であり、其の仕事の結果により差等を設けられはしない。但し組合員の中には、其の專門技術の必要や、疾病の事故等の爲めに、他の組合員よりもより多くの支給を受く可きものがあらう。此の特殊資格者のあることは、其の社會の平等的權利を破りはしない。そして此の特殊支給者を決定するものは亦一般組合員の會議である。

## 五　消費者組合と最高經濟會議

經濟活動の他の半面を占める消費に關する制度は、寧ろ我々の政治作用に關聯するところが多い。國家の所謂行政は、其の大半、消費に關しての制度だ。其れ故、現在の社會主義者の中には、消費活動の規制機關が卽ち國家だと見たものさへある。

消費活動が消費組合を基礎として實現せられることは、なほ生産活動の場合と同一だ。其の組織の根本原理も亦生産組合の場合と大差は無い。たゞ此の方は彼よりも著しく地域的に制限を受

ける。我々の消費活動の性質に隨ひ、消費組合は大別して、合同使用會議と個別消費組合とになることは、コオルなどの既に注目した通りだ。水道電氣等は前者に屬し、食料品、娯樂物等は後者に屬する。

生產と消費とは、人間の持つ機能の中の甚だ著しいものだ。其れ故生產組合と消費組合との社會に占める地位は、他の組合の其れに凌駕し、他の組合は社會の僅かに附錄的地位を占めることになり易い。少くも思想としては此く考へる人が經濟學者の中に多くなることは、自然の勢ひかも知れない。併しさうした形勢を遂げることは、實は我々が現在の經濟制度に捕はれて居るからだ。賃銀制度の廢止せられた社會にあつては、實は經濟活動は人間の機能の中にあつて甚だ高位を占めるものだとは見られない樣にならう。此れに代つて重要な視點となるものは、他の學問的、藝術的、宗教的等の機能を中心にしての聯合體であらう。其れ故に生產組合と消費組合との組成協同によつて全社會の問題を決定するは、許さるべきことでもなければ、又可能なことでも無い。

併し生產と消費との間を融通連結する機關としては、最高經濟會議が組成せられなければならない。其の委員は生產組合消費組合よりの選出委員を中心とし、其の他の聯合體よりの代表委員を含む。最高經濟會議は、物價の制定、貨幣政策の決定、銀行政策の運用等を主問題として議決する。隨つて此等に關聯しての機關は、すべて此の最高經濟會議の下に從屬するのである。



# 第十章　國家の本質

## 一　現實國家の二つの見方

國家の本質に關する考察と論議とは、今甚だ盛んだ。世界大戰が思想界に齎らした贈物の一つは、確かに此れだと言つてよい。其の論議にあたり、私は次の事を區別して考へたい。現在の歷史的國家は、言ふまでも無く、我々の政治的法律的文化生活の要求線上に結晶せられた文化的生產物だ。純粹に國家の本質を考へるとは、國家の政治的法律的意義を考へることだ。けれども歷史的現實國家は、單に其の純粹理論的意義だけから見られてはならない。其れは一の民族の親緣的集團でもあれば、又一の個性的文化を共有するものゝ精神的集團でもある。事實としての國家が、此の性質から離れて居ないことを、我々は否定出來ないし、又必ずしも否定す可きでは無い。だから國家に關しての論議は複雜したものになる。彼此應酬するところは、視點を違へて居るのだ。私は二の見方を區別して論ずる。第一は、政治的法律的文化概念として見た國家の本質だ。第二は、民族的精神的集團として見た國家の其れだ。我々はなほ最後に、二つの見方の交渉

をも考へなければならない。

## 二　一元的國家哲學

ヘエゲルの國家哲學は、兎に角一つの完成思想だ。我々は其の議論の應用を結果的に非難する前に、其の思想の論理構造を仔細に分析して、其れへ賛否を表しなければならぬ。結果の誤謬は、組織の其れに比較して意味は甚だ輕い。

彼は先づ宇宙過程の理法を示すに、彼の所謂精神の發展を以てした。精神は先づ主觀的に個人精神となり、次に客觀的に社會精神となり、最後に止揚し綜合せられて、絶對的なる神的精神に發展する。客觀的精神の發展は、同樣に辨證法的に進み、正と反とを止揚した道德の合に達する。道德も亦三段階を經過する。家族は正、社會は反、國家は合だ。此くして客觀的精神、換言すれば社會的精神の最高發展は國家であり、國家概念の中に、其の前階のすべての文化的結晶は包含せられる。國家は我々の道德的生活の究極的完成だ。だから國家は個人に犧牲を要求する。道德を支配する精神は、家族にあつては愛、社會にあつては利、國家にあつては國民的精神だ。

ヘエゲルの國家哲學は、要するに人生の價値の形而上學的體系を大規模に遂行したものだ。そして價値の品位の上に段階を附し、價値の價値を求めて究極へ進んで行つたものだ。我々は今あ



らゆる價値の上に、此の如き形而上學的序位をつけることを正當だとは考へない。價値は解放せられなければならない。結局其れが人生を解放する所以だ。我々は價値群に、個人的なるものと社會的なるものとの並立することを認める。けれども社會的文化價値の究極完成を、狹義の道德に要約し得るとは考へない。

ヘエゲルの國家哲學にあつては、社會を支配する精神は利であり、國家を支配する其れは國民的精神だといふ。併し利は本來支配する精神では無くて支配せられる內容だ。一の社會團體には利を共通の基礎として結合す可き衝動が與へられるけれども、衝動は結合を命令し、規制し得ない。一の集團が集團としての統制を與へられるのは、利とは何等か違つた精神によつてだ。卽ち其處には、國民的精神に對比せらる可き、一の集團的精神が必要だ。次に他面の國家を見る。國民的精神は歷史的に成立した一の精神的集結力だとしても、其れは此の歷史の起原に於ける國家の集結原動力を說明し得ない。國民的精神は、國家が成立して後の歷史的精練だ。發生的に國民的精神が國家を組成せしめたといふならば、我々は其の國家組成以前の社會に、既に國家的本質を具備して居たと斷ずる。豐葦原瑞穗國が天孫降臨による國家建設を爲す前に、高天原は一の國家形成だ。本質的に國家を規制する精神は、其の歷史的要素を排除するならば、多性に對する全體性の立場だ。ヘエゲルの正と反とに對する合の其れだ。全體性の規制は價値の實現だ。基礎には

其れによつて規制せられる自然性が横はる。卽ち個人の持つ何等かの要求だ。當に純化せらる可き意義を自らの中に豫想し包含する利だ。

社會集團は、利を自然要素とし、全體性の價値的規制を加へた一文化生産だ。國家は又其れと同じい本質の上に立つ。ヘエゲルの言つた意味では、我々は兩者の組成の本質的區別を爲し得ない。寧ろ國家は一の社會だといふことになる。

## 三　國家形式と資本主義

國家の本質を社會學的に解剖し、經濟學的に分析した結果、現在の歷史的國家と資本主義的經濟制度との間に不離の關係があるとする一派の考へ方がある。其れに隨へば、現實國家は要するにブルジョア國家だ。國家權力の發動とは、プルジョアジイがプロレタリアを壓迫する搾取的勢力の表現だ。國家統制は、ブルジョアジイが其の地位を擁護する爲めの其れ以外に何等の目的をも持たぬ。國家主義は資本主義だと。

此の思想は其の大部に於て眞理だと私も信ずる。國家はよし本質的にいかなる高尙な目的を持ち、又現に持つて居たとしても、其れは僅かに或る一面に於ての事だ。國家權力が資本主義の擁護に立つことは、其れの本質では無い。資本主義は歷史の上に現れた一の經濟的制度だ。經濟的



文化價値の一表現形式だ。然るに國家は政治的法律的文化價値に關係する。事實的によし資本主義か國家を產んだことは眞であつたとしても、其れは偶然の相依だ。資本主義が無い時にも國家は發生し得た。又發生す可きであつた。隨つて資本主義によつて生れた國家にも、本質としての國家の意義は含まつて居る。國家が其の本質的のものを最もよく發揮し得ず、寧ろ國家には偶然的の關係を持つた資本主義の辯護者となつたことは、國家に取つても一の邪路だ。墮落だ。

けれども其の相依關係によつて、國家の權力は著しく增大し、國家の自衞設備を野蠻的に、暴力的に强力ならしめたことは疑ふ可くも無い。最も理想的の國家は、所謂强大國家であり、生物的保存のあらゆる設備を持ち、國民の上に於ける權力の規制が絕對的であり得る其れだとすれば、現實國家は正に其の發達の理想點に達して居る。國家は「大レヴァイアサン」だ。國家は「奴隷的國家」だ。併し國家の目的は一の文化的なものだ。生物的自然的のものでは無い。武裝的强大は國家理想の充實だとは必ずしも言はれぬ。資本と勞働との對立は、自づから勞働者をして國家の成立を否定する傾向をつくらしめた。勞働者に祖國無しといふのが彼等の標語であつた。其處には規制のみあつて、規制の內容となる可き利が無いからだ。國民的精神は現實國家の支柱であり得ない。其れは國家成立の後に堆積せられた歷史的產物であるが、現實國家は國家成立の政治的法律的理論價値を持たない樣になつた。我々は歷史を取るか、理論を取るかの岐路に立つたとき、

前者を否定し、後者に準據することは當然に取る態度であるからだ。

併し私は此の見方に立つて國家を批判する場合にも、二つの立場を混同しようとは思はない。第一は、現實國家の權力は現にいかなる樣式を以て發動するかの見方だ。第二は、一般に國家權力は否定せらるべきかの見方だ。私は其の前者の見方に立つて、現實國家と資本主義との間に存する甚だ密接の關係を非難し、隨つて現實國家の權力發動に、大いなる信頼を置かない。國家主義は其の多くの場合に資本主義の別名だ。しかも武裝せられたる侵略的資本主義の異名だ。此れが崩壞を計るは、寧ろ國家概念を純化せしめる所以である。

現實國家は非難せられ、現實國家は改造し否定せらる可しとしても、其れは直ちに國家形式一般の非難と否定とでは無い。問題の趣旨は全く別だ。我々が非難し否定するは現實國家の機能の或る部分だ。我々は次に進んで一般に國家形式は否定せらる可きであるかを問題にしなければならぬ。

## 四　アナアキストの權力批判

アナアキストは國家の權力無しに社會の統制が行はれ得ると考へて居る。即ち此れは國家形式一般の否定だ。現實國家の權力發動形式がいけないといふのでは無しに、凡そ權力の發動がいけな



いといふのだ。國家權力は資本主義と結びつくから社會を害したといふのでは無く、權力其のものが人間生活に傷害を與へたといふのだ。隨つて彼等の社會改造の第一歩は、今直ちに國家權力を否定して行くことに始まる。

アナアキストは經驗論の上に立脚する。其處がいけない點だと私は思ふ。彼等はすべての建築がたゞ下から自由に行はれることを言ふ。其等の要求を規制すべき價値的要素を見ない。社會集團の內在性を知つて其の超越性を知らないのだ。人間の自然性は直ちに制度を創作しない。制度は一の犧牲だ。理想による自然性の一拘束だ。然るにアナアキストは、一般の經驗論者が陷つた其の同じ誤謬を繰り返す。自然性さへ自由に發揮せられゝば、犯罪も刑罰も其の姿を消すと考へて居る。

けれども其れは人間性を餘りに信じ過ぎた仕方だ。又人生の徑路を餘りに安易に決定し過ぎた見方だ。人間の自然性は規制せらる可き人生の材料だ。價値は其れへの超越的立場から與へられなければならぬ。人生の努力は無限だ。人格完成の究極點は、現實的には存在しない。人生は其の何れかに完成せられない空虛を殘す。理想は無限の努力の歸嚮を支持するものだとするのは理想主義であり、其れは何等かの位點に完成せられた社會典型として現前せしめられ得るとするのはユウトピアニズムだ。アナアキズムは一のユウトピアニズムである。何故なれば、其の主張者は、たゞ權力を否定し、自然性を自由に解放することにより、現實的に此の理想境地を創作し得

ると考へるから。マルクス派社會主義は一のユウトピアニズムだ。アナアキズムは其れ以上に奔放な空想的教說を立てる。併し唯物史觀が一の宿命的辨證法的決定主義へ墮したに對して、アナアキズムの根本要求は、遙かに理想主義に近いものだ。其れは人格の自由主義であり、創造主義であり、反主知主義であるからだ。

## 五　理想態と現實態

私はバアソナル、アナアキイの理想態にあつては、國家權力は否定せられると考へる。或る努力を加へて此れを否定するのではない。權力による集團の規則は不必要になるからだ。マルクスやレエニンの言葉を借れば、國家は死滅するからだ。理想態にあつて、個人の人格は絕對的に自律する。其の人格自律の極限をユウトピアから區別して、我々は單に理想態といつたのだ。理想態は文化主義的努力の究極完成だ。其れ故に此處では實は社會集團なる形態も消滅したといつてよい。道德性と適法性との間に區別は無く、すべては道德性だ。人格の外部的拘制が無く、各自による內部的人格的規制がある。然るに國家形態は、多少に拘らず人格の外部的拘制を爲す。其れを本質として國家形態は成立し得るのだ。然らば國家形式のあることは、社會集團の中に反理想的に活動する要素、隨つて適法的に、外部的に規制して、全體の統一を維持する要素の含まれる



ことを意味する。換言すれば、國家の存在することは、人間が、社會が、究極的に理想的では無いことを意味する。其の反對はバアソナル、アナアキイだ。其處では國家形式は終熄する。

けれども我々はさうした理想態を單に一の極限概念として考へるだけだ。現實の歷史の上には永遠に實現せられることの無いものだ。人生は理想への無限徑路である。我々が今現に問題にするは、其の徑路に於ける國家形式だ。其處にあつては、我々はすべての社會集團、卽ち聯合體に國家形式を容認する、容認せざるを得ない。國家的形式とは、一の聯合體が、其の全體性の立場に於て、其の聯合體の統一を濫すものを適法性的に强制する權力發動をいふ。其れは勿論一の力の發動だ。外部的規制だ。併し其の根據には、道德性の內面的拘束がある。一の聯合體の組成員となるものは、其の聯合體の共同目的を容認し、此れによる社會的統制を豫定するからだ。社會契約の新らしい意味が其處にある。個人は單位だ。聯合體は全體性だ。多性とは違ふ。利害だけでは聯合體を生まない。强制力の中心は、個人の人格の場合と同じく、個人に內在し、同時に此れを超越する價値でなければいけない。

敎會、勞働組合、消費組合、學校、其他すべての聯合體は一の國家的形式を持つ可きだ。其れ々々が權力の中心を持ち政治の機關として他より獨立した執行機關を持つ可きだ。一の聯合體は、自らの持つ集團的權力によつて他の聯合體の自律範圍に侵害することを許されて居ない。

## 六　聯邦的國家形態

此の見地に立つときは、各々の聯合體は國家的形式を持ち、特に國家形式と稱するものに存立の餘地は與へられない。よし何等か國家形態なるものありとするも、其れは何等かの機能を基礎にした特殊の聯合體の國家的形式でなければならない。大レヴァイアサンの虚位は國家から廢棄せられた。現實國家にあつて、國家に屬する機能だと思つたものは、殆ど大半他の獨立した聯合體に歸屬した。例へば宗教に關するすべての事は、宗教の聯合體の中で自治的に決定せられ、財の生産に關するすべての事は勞働組合の手によつて解決せられるといふが如くにだ。消費者の機能を基礎とした聯合體は、本質的に國家の範圍だといふものがあるけれども、よし現實國家と我々の消費機能との間にさうした關係があることは眞理だと假定したにせよ、此の聯合體に從來の國家なる名稱を適用するは正當で無い。

併し我々は此處に、多くの聯合體に關して其れとは全く別の見方を取ることを必要とする。其れは多くの聯合體相互の間に結び付きを作らなければならぬ場合に於てだ。此の聯結は、理論的には其れほど困難な問題となつて來ない。何故なれば、聯合體が互ひに結び付きを必要とするのは、常時にあつての事では無い。或る特殊の問題に就き數箇の聯合體が、不定時に其の聯結を必



要ならしめるのだ。然らば其の必要に逼られた時だけ、聯合體から選出せられた委員の協議會が成立し、其處で該問題は決定せられゝばよい。若し其の結び付きが常恒的性質を帶びてくれば、既に其處には特定の新機能を成立せしめたのであるから、其の機能を基礎として複合的聯合體を形成せしめればよい。不定時の協議會は、妥協の出來る範圍内での共通行動を決定する。共通行動は從で、聯合體自身の固有機能は主だ。自らの機能を殺して共通行動を取ることは一の聯合體に必要なことでは無い。

聯合體の複合形式を無限に高め、比較的に全體を含む複合、又はすべてを完全に含む其れを我々が考へたとすれば、其れを何と名付く可きであるか。我々は其時始めて現實の其れと同じい範疇に屬する國家概念に到達したのだ。國家は聯合體の聯合體だ。若しあらゆる聯合體を含み盡した其れが成立したとすれば、其の範圍は所謂共同的社會と同じいものになる。此れを世界國家といつてもよいのだらう。けれども其れは一の豫想にしか過ぎぬ。現實國家は其れよりももつと小範圍のものだ。そして理論的には、其れの基礎に立つ聯合體の數と、及び其の聯結の樣式とを不斷に異らしめて居るものだ。此れを聯邦的國家と呼ぶ可くんば、其れは現實の聯邦的國家よりも遙かに高い自由を持つた其れだ。

## 七　精神的集團意識と國家

純粹理論的に國家形式の成立を考へれば、私は此れだけのことをしか言ひ得ない。併し最後に私はさうした政治學的の見方以外に是非考慮しなければならぬ要素をなほ其處に殘して居る。私は豫め斷つて置いた樣に、其の要素の考察と國家形式の政治學的考察とを嚴密に區別して置いた。其の要素とは一民族又は一文化を共通ならしめるものゝ感ずる精神的結合だ。民族が同じいといふことは、實は單に生理學的の意味しか持たないことではあるが、其處に強烈なる精神的結び付きを意識せずには止まない。一つの個性ある文化を共通ならしめるものゝ間に感ずる結帶も亦、無制約的に強烈なものだ。例へば一つの國語を共通に使用する人間の間に感ずる其の精神的兄弟感が其れだ。我々は此の一の宗教的とまで言へる生活感情を破壞す可きで無い。其の結合感情は、私の考へるところでは、他を以ては歷史的に決して其れを再造し得ない、個性的現實への敬虔からのみ生れる。換言すれば人間の歷史生活を絕對的に肯定する體驗感情だ。其れは我々の生活が力强いと比例しての正しい力强さだ。我々は此の體驗を否定す可きで無い。普遍によつて個性を抹殺す可きで無い。生活は常に個性の尖端にある。國家範圍を現實的に制約するものは、民族と文化の此の精神的集團意識だ。其れを背景として或る地域內の聯合體は、常恒的結合を爲



し、其處に一の常恒的國家を形成せしめるであらう。

私は右の如き精神的集團意識が、將來次第に稀薄となつて行くと考へるものでは無い。國家を單に政治學的又は經濟學的に考へることは正しい途だと言はれぬ。本質として見た現在の國家形式は、今後容易には消滅すまい。又其れを消滅せしめる必要も無い。併し現實國家の背景は其處に置かれてあるにせよ、形式としての國家は飽くまでも聯合體の聯合體であり、其の權力の發動は此れに伴ふものでなければいかぬ。又他面に、精神的集團意識の値打は、依然として普遍妥當的價値により規定せられる。其れの個性は價値に對せしめられゝばこその個性だ。個性は價値を破り得ない。隨つて互に排他的となる筈は無い。民族と文化との個性權利を主張して、他の國家への侵害を爲す態度を私は非難する。又其の個性權利を主張するところに國家の本質を認め、次に誤謬を含んだまゝの現實國家の權力發動を其のまゝに肯定して、或は資本主義的經營を後援し、軍國主義的對外策を擁護する態度を私は彈劾する。我々は其のすべての行動に於て普遍妥當的價値の聖壇に參す可きだ。

# 第三篇　社會理想實現の根本的形式

# 第十一章　改造方法の根本義

## 一　價値學と政策學

世界は今いかにしても改造せられねばならぬ必然勢に支配せられて居る。其れが私の第一立論であつた。其れに對して我々は一の文化主義的究極理想を律する。其れが私の第二立論であつた。今や我々の、純粹形式的なる、現實に向つて規制的なる、イデエとして無限努力を要求する理想は、歴史的なる、偶然繼起的なる、我々の現實と結び付かなければならない。理想を與へるものは哲學だ。現實を整序するものは科學だ。我々の創作は、希臘以來の理想主義と十九世紀に異常の興隆を示した科學との地上結婚を策するのだ。すべて理想は現實を豫想する。現實は自らの中より理想を生まないが、我々が理想を發見するは、常に何等かの文化現實に内在するものに

卽してだ。其れ自身としての價値は論理の根據だ。當爲としての價値は實踐の核實だ。改造の方法は、其の理論と實踐との十字角に横はる。方法に於て文化主義の旗幟は最も鮮明である。我々は又此の改造方法を政策とも呼ぶ。すべて價値學には政策學が伴隨する。倫理學は單に道德價値の學だ。實踐道德學は其れに對する道德政策學として成立する。同樣に我々が社會理想を檢討したとすれば、其の價値と現實との結合を論ずるものは社會政策學だ。社會政策を社會主義に對し、一は進化的他は革命的だと解する仕方は科學的で無い。社會主義も亦社會政策の一部分に過ぎない。又政策學は、特殊一文化科學の派生ではあり得ぬ。經濟政策は經濟學の應用では無くて、經濟哲學の姉妹だ。術語の意義を右の如くに限定すれば、我々の今後論ずる範域は、卽ち社會理想學換言すれば社會哲學に對應しての社會政策學である。

## 二　價値主義の改造方法

批判哲學の決斷する態度は一定せられて居る。私は既に其れを何度と無く述べて來た。卽ち形而上學と經驗論との二の斷崖を離れることだ。思想が此の何れかの斷崖に落ち込んだとき、最早其れは救濟す可からざる獨斷に化する。形而上學は價値の永遠的妥當を高調する餘り、此れに何等かの內容を與へて硬化せしめ、現實を超越し、現實の上への專制を爲す。經驗論は現實の中への



價値の內在性を重視する餘り、價値の普遍妥當性の根據を現實自身の中に求めようとする。批判哲學は此の何れの方法にも贊せず、前者よりは價値の超越性を後者よりは價値の、內在性を抽出しようとするのだ。價値は普遍妥當的であり、價値自體は自律的に成立するが、併し其れには何等の內容を含まない。何等の內容をも含まないとは、其れがすべての內容と結合し得る純粹形式であることを意味する。價値は現實に內在し、現實以外何れのところにも見出されはしないが、併し現實自身が自らの中に基礎づけるものは普遍に妥當し得ない。妥當は事實を超越して、事實以外のところに基礎を置く。我々が社會改造の方法を求める立場も亦、此の批判哲學の上に於てだ。

改造の方法は、必ず一の究極理想を豫想する。究極の理想と、所與の現實と、其の對應の矛盾は改造政策だ。豫想する究極理想無くして、我々は一體どう現實を改造しようといふのだ。けれども私のいふ理想は、何等かの內容を固定的に指示する其れでは無い。某の道德、某の宗教、某の要求を理想の旗幟とするものは、實は正しい理想主義で無い。だから私は二宮主義と言ひ、協調主義と言ひ、國家主義と言ひ、帝國主義と言ふを理想主義だとは呼ばない。此等はすべて固定した內容を歷史的文化現實の經過とは無頓着に、非歷史的、非體驗的に其の現實の上へ强制しようといふのだ。改造の標準として或は正義を、或は愛を、或は奉仕を提示するものすら、正しい

立場だと私は信じない。價値こそ究極の無義だ。反理想主義者、若しくは無理想主義者は、此の内容的、形而上學的、似而非理想主義を我々の理想主義と誤想する。然るに我々が其の意味の理想主義を攻撃する熱心さは、彼等反理想主義者等に毫も劣るものでは無い。

## 三　價値主義と人道主義

人間性若しくは人道なる概念を以て、我々の所謂價値に換へることは正當であるか。私は此の美しい傳統的概念、人間性又は人道を究極理想と爲す主張を輕んじようと思はない。若し其の主張が人道主義と呼ばれるものならば、我々の價値主義は結局此の傳統的の主張の一人道主義に包括せらる可きものであるかも知れない。概念の正しい使用に於ては、人道とは、我々の所謂價値の全體を統轄した、價値統體（ハイアアーキイ）を意味するものゝ如くだ。換言すれば、諸文化範圍の成立前件としての價値が、更により統一的なる根本價値を求めて、何等か其のものを豫想しようと欲する場合に、人道とは其の根本價値を意味しようとするものであらう。人道主義は、主觀的に我々の價値意識を刺戟し、喚起することに於て優勢であり、隨つて人類の歴史の中より永遠に其の姿を消さない意義標であらう。

けれども人道主義の弱點は、隨つて其の長所の中に潜んで居る。人道主義は主觀的なるが故



に、文化價値としての客觀性を失ひ易い。其の所謂人道は、或る時は感情的精神であつたり、或る時は生命的脈動であつたり、又或る時は實利であり、欲望であつたりする。此れに超越性の根基を與へる立場が無いからだ。一元的の價値體統は多元的の各文化範圍へ直接に結び付くに敏で無いからだ。其れ故に人道主義は、意義に於て漠然とし、他の意味に利用せられ易い。客觀性を缺いた主張になり易い。客觀的方法を尊ぶ社會主義が、此れに不滿を持つは當然だ。

我々は自らの價値主義を、意義の上に於て全然的に人道主義より區別するものでは無い。又人道主義を單なる内容的、形而上學的、似而非理想主義と同一視するものでは無い。たゞ我々の價値主義は、人道主義の眞義を發揮して、しかも其の陷り易い主觀主義を排除し、心理主義を論理主義に進めたものとして、より以上に現代的だとするのである。價値といふ時に、客觀的ではあるが併し隨つて經濟價値を想起し易く、隨つて此れを欲望的に見る傾向は、現在には免れ難い一弊でもあらう。けれども此の傾向は單に我々の持つた過去の習慣に過ぎない。現代は、現實探索の途上に、寧ろ價値の新意義を發見したのだ。我々は先づ自らの改造方法を、眞の意味の理想主義卽ち價値主義より生れ出でるものとして、他の多くの法則的理想主義が基礎として立つ價値形而上學から此れを解放せしめなければならないのだ。

## 四　唯物史觀の必然論

形而上學の他端に立つ誤謬は素朴的經驗論だ。例へばマルクス主義者の社會改造方法論が其れに所屬する。我々はマルクス主義に立脚する社會主義の主張者と、現實批判の點で、亦其の改造方法の點で、甚だ多くの共通を持ちながら、なほ且つ其の根本に於て彼等と運動を共にし得ないといふものは、全く彼等の哲學が誤れる經驗論の上に立脚するからである。我國の現代は、思想的には不思議にも二つの全く反對する極中樞を持つた楕圓である。其の一つの極は理想主義哲學、他の其れは唯物史觀だ。哲學を學ぶものは前者を取つて後者を排し、社會問題を取扱ふものは、此れと全く反對の態度を取る。其れ故に民衆が哲學を求めれば、學者は前者を與へ、民衆が社會問題の解決を求めれば、學者は後者を與へるのである。明かなる思想的矛盾が全民衆の中に波及して居るけれども、何人も此の矛盾を打破しようとは力めない。思想的飢饉の時代だ。哲學の上に理想主義が眞なるものならば、社會問題の解決の上にも等しく理想主義は眞でなければならぬと、少くも私は主張するのだ。

唯物史觀は素朴的經驗論に立脚する一主張だ。其の中には自然科學的必然性のみが支配し、當爲の妥當的要素を缺く。經濟學的透視圖に現れた社會は、其の含む文化の學問と藝術と政治とを



併せて、悉く經濟學的色彩を帶びしめられ、一の自然科學的必然勢を追ふ。寧ろ言へば、其の必然勢に牽きづられて動くといふのだ。唯物史觀の中心主張はたゞ其れだけだ。經濟學的透視圖は既に經濟的イデエの豫想に立つた一文化範圍だ。其れが精密に自然科學の必然勢を追ふことは疑問的だ。けれどもとに角此の透視圖の上に製圖せられた、學問、藝術、政治等の諸文化果實が、經濟の色調を帶びるは些しも不思議で無い。其れあるが故に、此等の文化果實の本質は經濟學的に基礎づけられ得ないといふだけのことだ。併し其等の問題は今暫く取扱はないとして、社會改造方法論に關聯する唯物史觀の地位は甚だ滑稽のものだ。そして從來多くの唯物史觀批評者は其の滑稽を指摘したが、唯物史觀論者は何等此れに答へては居ない。

唯物史觀は、自然科學的立場に立ち、社會變化の一必然的法則を述べたものだ。何が我々の社會理想であるか、其の社會理想への努力に、此の必然的法則をいかに適用す可きかに就ては述べるところが無い。總じて評すれば、唯物史觀說には理想の妥當的要素を缺いて居る。其れ故に唯物史觀に立脚する社會主義の正しい態度としては、社會主義者は社會の變化に何等自動的努力を加へてはならない。其の努力を加へるも加へざるも、社會的變化は唯物史觀の必然勢に支配せられるだけであり、此れに何等の損益を加へない。若し主義なるものが一の努力的方向を指示したものだとすれば、社會主義者は自ら社會主義者であることを廢しなければならない。

唯物史觀論者は此點に決定的意見を持たないから、マルクス主義自身の陣營に多くの論爭を起した。其れは露國革命の場合の如く、資本主義發達の爛熟を待たないで革命が行はれた場合の解釋に關してゞある。マルクス主義者自身の手によつては、此の問題は永遠に解決せられる見込みを持つまい。何故なれば、此の場合、問題は唯物史觀と理想主義的努力との結合の其れに觸れて居るから。

私は今此の一書を草しつゝ、將來日本の改造が、價値主義者の手によつて爲されるか將た亦マルクス派の社會主義者の手に依て爲されるかを豫言しようと思はない。歷史の將來は常に我々の豫想を離れた不合理性を持つ。恐らくは其の運動の勝利はマルクス主義者に依て握らるゝでもあらう。嘗て日本の國民が勞働者と學者と學生とを併せて軍國主義を謳歌し、非戰論者の家に瓦礫を投じた其の群衆心理は、今や社會主義の方へと向ひつゝある。現に社會主義者は、中央集權的、帝國主義的態度を取りつゝあるが、何人か其の動きつゝある社會精神の中に、往時の官僚主義、帝國主義の變裝した殘光を望見しないで止まう。退いて其の精神の自由を顧れば、此の民衆の人生觀自身は、解放せられた新らしいものになつては居ないのである。よし彼等の運動が、外面的には勝利を占める時期に到達したとしても、私は其の方法が妥當的價値を擔つて居たとは考へない。私は豫言しない。たゞ人生の價値を擁護する。今私の草しつゝある一書が、人生の意義の上



に於て、彼等社會主義者の主張よりも遙に勝れたものであることを、私は今將來永遠への記錄として、此處に刻銘して置くものである。

## 五　法則主義の硬化

人生の內容は無限だ。しかも不合理的に無限だ。我々は歷史の將來を、僅かに一分を隔てた後といへども豫想することは出來ない。人生は絕えざる變化である。個性的の推移である。一として永遠の相を取り得るものは無い。然るに我々が一旦此の上に價値の放射線を加へたとすれば、現實として流轉するものは、意義として永遠相を帶び得る。一の行爲の選擇と實行とは、意義の視點より永遠に、或は賞讃せられ或は擯斥せられる。人生の上への此の價値記錄を我々はいかなる手段を以てしても拂拭し去ることが出來ないのである。

純粹形式としての價値は、無限に個性的なる人生の內容と結合する。價値は動的に、あらゆる內容を自らの方向へ一方的に規制し、綜合する。人生創造の一苦難が其處に經驗せられる。一の場合に處する一の價値ある行爲は、たゞ一つより外には無い。價値ある行爲は、「彼れか此れか」の岐路を選言的に肯定するものでは無い。價値の創造的綜合は範疇的にだ。無上命法の形式に於てだ。其れ故に、一の場合に處して、絕對的に價値ある行爲は、たゞ一つより外にあり得ず、又

此の一つの行爲は必らず定められ得る。勿論經驗的個人の良心が直ちに其れを直覺し得るといふのでは無い。其の誤らざる直覺力を得ることが一の人格的陶冶だ。

歴史の進展は、個人的にも社會的にも全く個性的である。併し我々個人は其の進展に唯一の動力者では無い。個人の進展には社會的環境自身の其れが外的に作用する。社會の進展は其れを組成する個人の相制作用だ。個人は自ら歴史の個性的進展に一人の俳優として參加しつゝ、又全體の舞臺の進みを、自らの上に外的に容認しなければならない。其れ故に我々は社會の生活を內的に共體驗しつゝ、他面に於ては此れを外的に、自己の制約者として認識せざるを得ない。何れの見方にあるにせよ、個人生活の內面に潜む規範意識は、すべての瞬間に於て絶對個性的に活動する。生活の內容を個性的に受容するから其れを規制しての生活方針も亦自づから個性的となるのだ。絶對的に價値ある行爲は、其れ故に全く個性的にして、同時に最高の行爲だ。此處に行爲が絶對的の價値を持つと言ひ、又最高の意義を持つと言ふも、其れは價値自體、又は意義自體を指示せず、其の生活內容に對して、此の選ばれたる行爲の價値が絶對的であり、最高的だといふまでのことだ。其の最高行爲が常に個性的であるとは、何を意味するか。行爲に於ける法則主義は既に無效だといふことだ。

法則主義は、或る限られたる生活內容を人爲的に假定して、云々の內容に對しては云々の行爲



が最高價値を持つことを限定したゝけのものだ。個性的に生きた現實へ、此の固定的の法則を適用すれば、既に其の法則の豫定する生活內容に對比せらる可き人生は何處にも存しない。其れ故に法則主義によつては、頻りに法則相互間の矛盾を起す。忠ならんと欲すれば孝ならずといふのが其れだ。絶對的に正直であらうとすれば、瀕死の病人に死期を告げ、捕へた父を窃盗罪によつて訴へなければならぬといふのが其れだ。これに反して價値主義の絶對信條は、價値の客觀的妥當性だけだ。一の具體的法則を律しない。

其れ故に價値主義者に對して、暴力革命の絶對價値を問ひ、獨裁主義の永遠的意義を問ふは無意義のことだ。暴力や獨裁は既に一の內容だ。しかも或る他の複雜內容に適用せられることを豫想しての、割合に形式に近い內容だ。其の價値を、適用せらる可き複雜內容を離れて論ずることは、意味の乏しいものだと思ふ。我々は、露國革命に赤衞軍が重要の役目を果した場合の、其の暴力の價値を取扱はなければならぬ。少數の共產黨が無智なる農民と對した場合の、其の獨裁主義の意義を考へなければならぬ。其れでなければ問題は、正しい位置に据ゑつけられて居ないのだ。又同時に、露國の革命が經過し來つた方法を蒸溜して、此れを一の形式に纏め、社會改造はすべて此の方法でなければならぬとする我國現時の一流行思想を私は非難したい。

## 六　心的改造と物的改造

社會改造論に心的改造と物的改造と二つの主張を區別しようとするものがある。そして彼等は理想主義的社會改造は卽ち心的の其れであり、社會主義的社會改造は卽ち物的の其れだといふのだ。此れをいふものは多く社會主義者だ。また理想主義的社會改造と心的の其れとを同一視しない人の中にも、やはり改造に此の二つの主張を區別するが便利だと考へるものは澤山ある。けれども私は、餘程限られた意義の下に於てゝ無くては、此の二つの區別を爲さうとは思はない。況んや其の一つと理想主義とを同一視する如き擧には、いかにしても贊同することが出來ない。

便宜上私は最初に歸結を言つて置く。凡そ心的と物的の區別は我々の認識內容に就て判別せらるべき其れだ。しかも我々の認識內容の中の自然の一區別樣式だ。價値に關係の無い自然現象の中で、意識經過は心的と稱せられ、物理過程は物的と呼ばれる。其れを取扱ふ科學に心理學と物理學との二大別を生じよう。現實としてはたゞ一の自然經過だ。此れを認識する科學的立場の相違によつて、其の區別を成立せしめるだけだ。此れに反して理想主義は、其等の認識內容に意識的の能作を加へる認識主觀の態度其のものだ。理想主義者は其等の經過を一々客觀的價値によつて批判し、絕對價値の方へ現實を動かさうと努めるに反して、唯物史觀論者は單に現實を一の



自然必然的經過として靜觀し、何等の能作をも其の上に與へまいとする。

其れ故に心的と物的の區別は、理想主義と唯物史觀とに何の概念的連繫も無い。强ひて言へば理想主義と唯物史觀主義は、其れ々々一つの態度だから、認識內容たる心的と物的の何れにも働きかけることが出來る。此く言つても、理想主義の中に心的と物的との其等があるといふのでは無い。心的理想主義及び物的理想主義と呼ぶは此れも亦甚だしく不都合だ。何故なれば、其の場合の心的と物的は、同じく理想主義の方法的區別を示すやうに見えて居るから。

私は既に、一つの概念區別は主觀の能作態度に關係し、他の其れは認識の內容に關係することを言つた。然らば理想主義は直ちに內容の心的と物的なるものに結び付き得るか。私は其れをも否定しようと思ふものだ。理想主義が直接に結合し得る現實は、自然形態を持たず、文化形態を持たなければならない。机や家は一の自然物だ。自然の必然的因果關係に支配せられて變化する。我々は其の必然性に何の能作態度をも取ることが出來ない。理想主義は其れに無干涉だ。併し其の同じ物が私有財產として、權利の客體として見られたときは、我々は或は私有財產制度の廢止を論じ、或は某權利の價値を批判することが出來る。我々は其のとき文化としての現實に接觸したのだ。理想主義の干涉圈內に入り得るものは文化あるのみだ。文化には心的と物的の區別が無い。此く考へ來れば、心的改造及び物的改造なる語を使用することの全然無意義なことは明

かになつたであらう。

けれども我國では、此の語を或る特殊の意味に使つて居る。私は其の意味をもう少し詳しく詮索して、其れ々々の論者の主張を檢討して見よう。

## 七　人間質改造と制度改造

或る人達は、人間質の改造を心的改造と呼び、社會制度の改造を物的の其れと呼んで、我々の取る可き方法は、或は其の前者、或は其の後者だと爲し、互に論爭する。此の如き定義の不當なことは既に分つて居るが其點は問はないことゝして、凡そ此の二つの改造方法が成立し得るものか、又成立し得るとすれば、我々は其の何れに就く可きであるかを考へて見よう。

人間質の改造といつても、我々が生理的に、社會的に、又民族的に傳へて來た素質其のものを變改し得るかどうかは大きな疑問だ。だから私は此の場合、我々の意識的努力によつて變改し得るだけの人間質を考へ、此れを心意と呼ばう。元より心的改造論者も物的改造論者も、其の他方の改造を不必要だと考へるのでは無い。否な寧ろ大いに其の必要を主張しては居るのだ。たゞ改造の第一着手として、若しくは改造方法の力點の置き場所として、其の何れを取るかに主張を分つのだ。私の考察も亦自づから其點にだけ觸れることゝなる。唯だ一方の改造だけ取れば其れ



でよいとする主張は、始めから論外とす可きだ。

或る二つの主張が、或る一つの事柄を共通目標として爭ふとき、其の爭ひが成立するや否やは、共通目標を準據として二つの主張が對角線的主張を爲して居るか否かに係る。此の考への上に立つて、私は兩改造論者の所謂心意と制度との反對を比較分析して見よう。

心意は主觀の能作豫件だ。實際活動の潛在態だ。其れ故に心意の改造は必然的に社會改造の一部である。專ら客觀的制度の改造を計るものも、心意の改造を輕視しては居ない。勞農露國の現在に於て既に然りといへる。露國は今や產業能率の增進に腐心しなければならぬ時だが、能率增進は社會的客觀的方法だけでは出來ない。寧ろ個人の自律心に待たなければならぬことだ。露國政府の最高幹部は、其れ故に熱心に宣傳を續けて、其のことを露國の民衆に訴へて居るのである。凡そいかなる運動も、實際行動と平行しては、思想的宣傳を爲さなければならぬ。宣傳は知識を介しての心意改造だ。よしいかに心意改造の空虛なることを言ひ、實際行動の必要を切言したものであつても、其れが一の宣傳に止まる以上は、依然として自らの攻擊しつゝある心意改造の一つに屬する。「科學より實行へ」の叫びは眞實であつても、其の叫びは等しく一の科學の範域に止まる。此くして私は、自ら心意改造の唯一方法を取りつゝ、心意改造を攻擊する論者の矛盾を摘發しなければならない。

我國社會主義者の多くは此の矛盾言論を爲して居る。彼等は常に心意改造の叫びを空彈に過ぎずと輕蔑しながら、自らも其の輕蔑すべき空彈以外の何物をも發射して居ない。或る特殊の祕密宣傳等を指して彼等は實彈だといふのであるか。其れは却つて乏しい效果を持つ空彈だ。我々が知つた範圍で、宣傳以外に我國の社會主義者が何の實際運動を爲したか。

心意改造を若しも心的改造と呼び得るとすれば、心意改造は十分に必要な改造方法である。其れは改造の發端から末梢に至るまで、寸刻も休められてはならぬ。又恐らくは、よし其の主張の內容はいかにあれ、すべての改造運動者は此の方法を最後まで排斥せぬに相違無い。

併し所謂心意の改造は、制度の改造と全く別のものであるか。所謂心意と所謂制度とは、互ひに關係の無い樣に取り離されて考へ得られるか。私は其れを疑問にする。心意は主觀的だ。制度は客觀的だ。前者は豫備だ。後者は結果だ。前者は心的態度だ。後者は客觀的確立だ。一應の區別は容易である。けれども心意は、すべて何等かの客觀に實現す可き、若しくは或る程度に實現した心意だ。當實現、現實現、既實現は、其れ々々程度的相違に過ぎない。言はゞ一本の方向線の上に於ての相對位置だ。此れを主觀的と見れば心意となり、此れを客觀的と見れば制度となる。そして主觀的と客觀的とは全く相對的の對立だ。



## 八　心意と制度の相對關係

我々の取扱ふ材料は、すべて自然を排し、文化に限定せられたことゝする。普通に客觀的であり、制度であると考へられるものを取れば、其れが一の文化である限り、其の客觀は主觀に對し何等かの意義を持たなければならぬ。此の意義を考へないとき、文化は自然物に墮する。例へば我々の貨幣は、若干の經濟價値を代表し得ればこその貨幣であるが、此の觀點が失はれて了へば、金屬なる自然物以外の何物でも無い。又我々が貧乏で絕えず困窮して居るとすれば、其れは經濟的に多くの財貨を持たないといふ意味であり、此の意味を除去すれば、一の生物としての人間が生活要素に缺乏を來し、不完全な生理作用を營んで居るとの自然現象だけが殘る。其れ故に我々は、自然的事實と文化的事實とを絕對に混同せしめてはならぬ。社會主義者などは、貨幣の存在も、經濟的貧乏の成立も、すべて疑ふ可からざる眼前の事實だといふのを常とするが、此れは自然的事實の中に文化的なる意味を認識したのだ。なほ彼等は、資本家が勞働者の餘剩價値を搾取することをも、否定出來ない眼前の事實だといつて居るが、併し其れは先きに述べた意味よりもなほ遙かに主觀的なる一の理論である。說明である。

此くして文化的事實は、實は事實と呼ばれるよりは寧ろ意味と呼ばるゝが正當だとすれば、我

々が客觀的であり、制度又は組織であるとなしたものと、價値主觀との關係が、いかに密接であるかは明かとならう。社會の制度又は組織は、我々の主觀との絶緣を宣言する事が出來ない。さて我々の制度又は組織は意味の觀點に立つてのみ、其の成立を確保し得るとすれば、我々に重要なのは此の場合の意味であるが、意味とは一の統一である。幾多の與材を其れ々々に無關係のものと見ず、其の中に何等かの共通原理又は共通精神が實現せられ居ると見て、其の原理又は精神へ退却することだ。併し其の與材と呼ばれるものも結局は何等かの意味であることは、前に論ずるところにより明かだ。統一としての意味は、此くして或は前方へでも、其の反對に後方へでも、何れへなり自らの觀點を變更し得るものだ。例へば貨幣は價格を客觀的に代表するものであると見たとすれば、價格は主觀的、貨幣は客觀的だ。其處に心意と制度との對立が見られる。換言すれば價格は心意、貨幣は制度である。併し更に還元して、價格は價値を客觀的に代表するものだと考へれば、價格は統一せられる與材、價値は統一する意味であつて、前者は制度、後者は心意だといふことになる。我々が貧乏して居る一文化的事實にも其れと全く同じい解釋が附け得られる。貧乏は現今の商業主義の結果だとすれば、貧乏は制度、商業主義は其れに對應しての心意だ。併し商業主義は私有財産的資本制度の必然的結果だとすれば、商業主義は制度、資本主義は其れに對應しての心意だといふことになる。



心意といひ制度といふを其れ自身で完結したものと見る考へ方に私は賛成しない。兩者は當實現、既實現の論理的配列に隨つた、一方向線上の二點である。其れだから心意を外にしての制度の改造とは何を意味し得るか。又其の反對に、制度を外にしての心意の改造とは何を意味し得るか。此等のことを主張する改造論者は、實は心意と制度とを、單に自然的外見によつて見て居るか、さも無ければ自らの豫め取る某々主義の觀點を絶對の基準とし、其れに對して兩者の區別をなすに過ぎない。例へば餘剩價値の搾取を私は一個の理論だといつたが、此れを疑ふ可からざる事實だとなす人は、マルクス派經濟學の取る理論を基準として、其の理論の說明範域をすべて事實範域とし、自らの說明を事實其のものだとしたのである。自然科學にあつてすら、其れの科學者は事實と說明とを嚴密に區別して居るのに、却て科學尊重を公言する社會主義者が其れを知らないのだ。

## 九　客觀的制度の意味的改造

或る解釋を離れての事實なるものを我々は認識することが出來ない。自然科學的見方に立つた、單なる存在としての事實に於て既にさうだ。例へば此の手指の一つの運動さへ、物理學的に、化學的に、又生物學的に、其れ々々の解釋を加へ、然る後始めて一の存在事實である權利を獲得

するが如くにだ。況んや文化的現實は、其れを文化として成立せしめる基本の價値を離れては何等の意義をも成さぬ。價値とは超個人的主觀が、自然的事實の上に獲得した、其の事實の意義だ。意義は主觀に對しての意義だ。其れ故に私が前節に解剖した如く、主觀の心意と客觀の制度とは、一方向線の兩端に就て單に相對的に命名せられ得るものだ。其の間に何等絶對的の區別を認め得ない。

此く見來れば、客觀たる制度の改造とは、要するに其の制度の含む主觀的心意の改造だ。物質的存在の布置配別を甲乙互に變換したとしても、其れは客觀改造の認識關に到達し得ない。之れに反し、よし其の物質的存在には何等の變更も加へられなかつたにせよ、其れの含む意義が變改せられたとすれば、我々は此れを一の制度の改造と呼ぶに躊躇するもので無い。

例へば我々は今賃銀制度廢止の改造要求を取つて見よう。賃銀制度は勿論現在に於ける客觀的一制度だ。或は此れを一の文化的事實と呼んでもよい。我々が希求するところのものは、一人格が他人格の活動を動產の如くに賣買する非人格的世界を廢止し、すべての人類が人格性平等の基礎に立ち、一人格は他人格を手段では無い自己目的としてのみ取扱ふ其の徹底的デモクラシイの世界を建設しようとすることだ。卽ち其れは世界に於ける一の意味の變改だ。勞働者が營々として勞働する事實は、恐らくは現在のまゝに止まり、變改せられまい。露國の產業が其れを證明す



る。革命は常に一時的生產の減退を伴ふ。其の度の進んだものにあつては、產業機關の全體を痲痺せしめ、其の影響は少くも半世紀の長きに亙るであらう。勞働者は却て以前よりも劣惡な勞働條件の下に勞働しなければならぬ。露國にあつて既にさうだ。しかも世界の勞働者が、露國の其れを羨望する所以は、彼に賃銀制度の意味が壞滅して居るからだ。

資本主義を攻擊するものは、現社會に資本利潤によつて生活する遊食の徒の多いことを以てする。そして生產能力の甚だ多くの部分が、此等遊食者の奢侈享樂に費消せられて居ることを論じ、此の生產の空費さへ廢止せられたとすれば、社會に逼滿する貧乏は、餘程の程度まで減少せしめられ得るだらうと豫測する。併し其れに反對する論者は、統計的に多くの反證を擧げ、遊食者の除去は其れ程多くの幸福を社會の上に齎らすものでは無いとする。彼等は言ふ。其の勞働が商業的方面にあると他の直接生產的方面にあるとを問はず、兎に角自らの筋肉や頭腦を働かせて生活の資を得て居るものゝ數に比し、全然の遊食者の數は甚だ乏しい。其れは全く比例にも取れない程の少數者だ。今若し此の人員を勞働者の中に加へて見たところで、社會の勞働能力をどれだけ增加せしめ得るか。又生產貨物の中で此等遊食者の奢侈享樂の爲めに生產された部分は、可成り多い樣に見えては居るが、其れは寧ろ社會全體が奢侈享樂の欲望を可成り多く發揮して居たことでは無かつたか。遊食者の直接間接費消する部分は比較出來ない程僅少なものに相違無い。

又商業主義が、需要供給の法則を根據に許す限り、社會の需要多いものを生産するは企業家に取つて同時に利得の多いことであるから、若しも生活必需品の需要量が結局に於て奢侈贅澤品の其れよりも大であつたとすれば、社會の生産機關は、やはり生活必需品の生産に其の大部分の能力を費消しつゝあるものと言はなければならぬ。其れ故に現在の商業主義を肯定し、企業家の利得心を其の儘に許容した時の社會が、現在の如く貧乏であるとすれば、商業主義廢滅後の社會も亦殆ど全く現在の其れと同じい程度に於て貧乏であらう。寧ろ言へば、其の將來社會に於ては、企業家の冒險心と發想心とを缺除せしめるが故に、生産機關は活潑に運用せられず、且つ勞働條件の改善と同時に、現在の如く極度にまで勞働者の勞働力を貨物に變形することが已んで了ふから、社會全體の富は著しい割合を以て減少するに相違無い。資本主義の廢滅は、其れ故に社會人の消費享樂量を標準に取れば、却て多くの不幸を社會人の上に齎らすものだ。

右は一部の論者の主張だ。私は此の論の中に多くの事實的、論理的矛盾の含まれる事を指摘し得る。遊食者の除去、資本主義の廢滅は、右に述べたとは全く別の理由から、社會の富を增加せしめ、其の貧乏を救濟し得ると私は信ずるものだ。併し右の論者の取る理由も亦確に一部の眞理を語る。少くも遊食者の除去、隨つて賃銀制度の廢止は、社會の富を增加せしめて消費享樂の分量を大ならしめる目的の爲めには、最良的に選定せらる可き計畫で無い。若し此れが我々の目的で



あるならば、私はなほ別の實行策を幾つでも考察し、其れの最後に漸く賃銀制度の廢止策を數へ上げよう。

然るに我々は何故賃銀制度の廢止を社會改造策の重大なるものとして選ぶか。言ふまでも無く、賃銀制度の含む意義が我々の價値觀に合致しないからだ。人格奴隷の人間性破壞を極度に憎惡するからだ。生活の享樂量の多少は、我々の眼目とするところで無い。勞働者は全く同じ工場へ通ふであらう。嘗て八時間勤務したものは、今は十時間の其れを必要とせられるだらう。昨日二圓の賃銀を渡されたものは、今日一圓の支拂を受取るであらう。其れが昨と今の對比だ。しかも勞働者は嬉々として今日の産業自治社會に生きて行く。事實に於て從來と何の相違無き、或は寧ろ從前よりも劣惡となつた此の新社會は抑も何を齎らしたのであるか。其れは事實の改變では無くて意味の轉換であつた。要するに社會改造は社會價値の顚倒である。生活の革命は生活意味の革命である。

唯物史觀論者の社會改造方法並びに其の理想とする社會の客觀的形態は、私の其れと殆ど全く同一だ。少くも方法と形態は私の其れと殆ど全く同一だ。しかもなほ私が頑强に彼等の運動と手を分たうとする所以は、彼等を支配する運動の意味が、我々の其れと全く異るからである。唯物史觀は眞理では無い。其の人生的理想を追求すれば、結局は或る內容的快樂が價値を創つたこと

となる。其れ故に我々はあらゆる場合に於て唯物史觀論者に、其の主觀的心意の轉向を要求せざるを得ない。我々の改造の意味から言へば、資本主義は却て社會主義に自らのジャスティフィケエションを見出す。共に理想主義の敵とする舊人生觀だ。

## 一〇　制度の機械性の整序

心意改造と制度改造の究極的關係を今我々は攻究し盡した。我々は概念の意義をもう少し狹く限り、問題を次の樣に書き改めた上で再び其れを考察して見たい。心意の改造は主觀の深化だ。制度の改造は客觀の整序だ。我々は今兩者の何れかを不必要とし、何れかを主たる目標に選ばうと思はない。兩者は共に必要なる社會改造の方策だ。併し其處には尙ほ着手する事の順序的先後が問題として殘る。其れは現在の社會的構成を觀察し、又改造の事功の遲速を思ふが故にだ。我々は果して何れの方策を主たる着手點に選ぶが至當であるか。

心意の改造か制度の改造かを問題とする場合、實際は此の疑問が眼目となつて居ることは珍らしく無い。目的は兩者に共通である。併し心意の改造を主とするものは、對者を社會組成員たる個人に取り、敎育や宗敎の敎化的方法を改造手段とし、其の動機の理想的開發によつて、制度改造の結果を得ようとする。之れに反し、先づ制度の改造に着手しようとするものは、對者を現在



社會の機械的なる組織と機制とに取り、同じく機械的なる力の發動を手段とし、成果たる制度の變更によつて其れに含まる可き動機の指向を改造しようとする。此の二つの方法は當然理論的に成立するのみで無く、其の通りの二傾向が、現に實際、社會改造方法論の中に動いて居るのだ。

私は今此の二傾向に長短の分析を試みるより前に、此等の傾向が、實は人間素質の個性的相違に深い根據を置くものとして、將來永遠に融合せられる機會の無いことを言明しよう。實にも人生に深い溝渠は、我々の世界觀人生觀の其れに若くは無い。社會に深刻なる悲劇の原因は各人の個性自體だ。此の溝渠、此の個性は、理論によつて征服せられることが無い。

其處に幾干かの理論の介在を許し得るとすれば、そして我々はたゞ事實的に其の統一の不可能を言明して滿足す可きでは無く、理論的に其れが統一策を律し、なほ及ぶ可くんば該策を一般に勸奬宣傳す可きであるとすれば、私が思索する主題は、或は次の如き改鑄を經愈するが至當だかも知れない。私は先づ制度の改造を主たる着手と爲す主張から始めて考察しよう。

社會の機械的なる組織と機能とを主たる對象として、此れに機械的の改造方法を加へようとするものは、過去に長き歷史的傳統を保ち、一結晶の晶系の如くに、其れ自身容易に壞滅す可くも無い組織と機能とを凝結せしめた現在社會の機械性を知悉するからである。社會の組織と機能とは發生的にも亦本質的にも、我々の生命的要求の一々に對應し、其等を表現したものであらう。

さうで無ければ、此れは一の文化的所產だと言はれない筈だ。然るに一旦創作せられた機制は驀て巨大なる怪獸の如くに創作者自身と對立し、衝突し、壞滅し合ふ生長を遂げた。社會の組織と機能とは、其れ自身に開展の根據を含み、機械的に發育し、機械的に分支する。此の制度の機械性を個人の一々の動機に對應せしめ、個人動機の轉向によつて社會制度の改造を計畫したとするも、其れは全然の不可能事だ。

例へば我々の所謂資本主義なるものを觀察しよう。資本主義は資本と呼ぶ傀儡を使つて、一の人格が他の人格の上に侵略を加へる制度だ。其れの道德性の缺除は蔽ふことが出來ない。其れ故に一人の資本家があつて良心的に其の不道德性の悔悟に惱まされ、資本家たる自らの地位を拋つ事によつて資本主義の廢滅を欲したとすればどうであらう。主觀的心意を開發誘導する方法は當然至る處に此の種の資本家を生み出す。併し此の資本家の良心的行爲は、結局は一の感傷主義の發揮となつて終り、資本主義自身は洋々たる大海の如く、此れに何の增減をも加へない。資本主義は一の機械的制度だ。個人の良心的行爲と無關係に發達して行くのみだ。

我々の心理的欲望の對象となるものは經濟的の財だ。財は人間能力により生產せられ、人間欲望により消費せられる。生產と消費とは經濟的活動の中核だ。此く考へる限りに於ては、あらゆる經濟的の活動は人間の心理的の其れに還元せられ、經濟學は結局一種の欲望心理學でなければ



ならぬ。併し私は此の考へ方に左袒するものでは無い。經濟的活動は其の起原に於て心理的ではあつても、既に經濟的と呼ばれる特色を持つた時に、其れは依然として心理的でありつゝ、なほ同時に心理的以上である筈だ。生產と消費と呼ばれるものも、消費を豫想しない生產、生產を豫想しない消費である間は、經濟的の價値を持つては居ないで、單に人間の心理的活動の座標軸に映じ得るのみだ。經濟的なるものは、單に心理的なる生產と消費とを止揚しての或る文化的立場だ。此くして建設せられた經濟的世界は、經濟自身の座標軸に其の直接の座標を描きつゝ、人間欲望の座標軸に對しては單に間接の關係をしか持ち得ない。況んや我々の倫理的評價の座標軸に對しては、より一層間接の關係を持つだけの事だ。資本主義自身は不道德的であつても、我々が此の制度の社會に生れて來た限りには、資本主義を否定したゝ一の行動を爲すことも許されては居ない。經濟的に自らの生命の存續を計るものは、よし自ら此れを不道德であると感じても、其の不道德を敢て冒さゝるを得ないのだ。個人の動機に於ける良心的態度は、其の場合何等の力をも發揮し得ない。經濟的制度は、組織せられたる一の客觀的機械性だ。其の機械的なる見方だけが、具象的なる心理的の見方に對して純粹に經濟と呼ばれ得る。

我々の所謂經濟が其れ自身の機械性を持つとすれば、此れを改造する方法も亦純粹に機械的でなければならぬ。資本主義の弊を救濟する途は、資本主義自身が經濟的に、隨つて機械的に含む

缺陷を分解し、此れを機械的に變改するのでなければならぬ。此事は敢て經濟的世界にのみ適用せられるものでは無い。法律政治等の各文化的世界に就き、すべて其事が言はれ得るのだ。

例をやはり經濟に取つて行く。勞働運動は賃銀の値上げを要求する。賃銀の値上げは卽ち自らの生活內容を向上せしめることだ。併し資本家は其の雇傭する勞働者の賃銀支拂額を增加したゞけで、他の方法を講じなかつたとすれば、企業としての性質を自滅せしめるより外は無い。其れ故に彼は此の負擔を生產する貨物の物價の上に轉荷する。賃銀値上げに相應しての物價騰貴といふ現象が其處に起きる。併し兩者の高騰する比例は正しく算術級數的では無い。後者の騰貴は前者の其れよりも率に於て遙に高い。しかも統計の示すところに隨へば、企業者の利得率は、最近に至るに隨ひ、却て減少する狀態にあると言ふ。勞働者は生活內容の向上を計り得ればこそ賃銀の値上げを欲するのだ。換言すれば、彼の要求するところは賃銀高の絕對價では無くて、物價との相對價だ。然るに彼が取る手段としての賃銀値上運動が其の目的を達したとき、究極目的としての生活內容は却て貧弱となり、しかも企業家は幾分の利得を割讓するの已む無きに至つたとすれば、我々は一體此の奇なる現象をどう解釋す可きであるか。人間の心理的說明は此の場合何の役にも立たぬ。其の心理的原則を僅に經濟學的に言ひ換へたに過ぎない所謂需要供給の法則は、純粹に經濟的なる制度の機械性に對しては、其の妥當性を持たないことになつたのだ。



此れと同じい例を數へ上げて行けば際限も無い。我々は嘗て通貨の膨脹と物價の騰貴の因果關係の眞相を知るに苦んだ。單に此れを論理的に解剖すれば其の解釋に何の困難をも伴ひさうに見えない此の問題が、世界大戰中及び其れ以後の實際問題となつて現はれて來た場合に、我々は終に其れを徹底的に解決し得なかつた。しかし此の問題の解釋如何に拘らず、通貨を縮小し、物價を低下せしめる途は、各個人の何等かの心理的努力による事を以て滿足す可きでは無いらしい。個人の心理的努力は全く無意義だといふのでは無い。たゞ經濟改造の正道としては、機械的に經濟的である通價政策を、物價政策を取らなければならぬといふのである。

此くして私は、改造方法の第一着手に客觀的制度の機械的變改を策しようと企てる論者こそ、眞に改造す可き客觀的對象の眞相を解剖し得た人だといふ。何れを改造の第一着手にするかを今問題にしなかつたにせよ、兎に角改造方法の始めに客觀的機械的の其れを取らないでは、改造は全然の不成功に終る。主觀的動機を改造する方法は、其れのみでは何の效果をも發揮しないで止むのだ。

## 一一　人間性の信賴

けれども社會改造の個人的主觀的方法は、其の效果の如何を顧慮して廢せらる可きものでは無

い。よし其の結果は全然の無に終つてもよい。其れは改造政策の正道だ。大眼目だ。機械的客觀的方法は全く廢止せられる機會があるにしても、個人的主觀的の其れは、改造方法の最初より、一時も忽諸に附せられてはならぬものだ。

機械的方法の加はることによつてのみ社會制度の機械的なる組織と機能とが改造せられ得ることは、前既に述べた通りだ。併し改造の大眼目は個人の、社會の、人格的自律だ。個性の絶對性の究極的完成だ。其れ故に改造は個人の自律に待つ。如何なる場合にも、人格の他律が其れの自律を招來し得たことは無い。又よし結果に其れを招來し得たにせよ、我々の歴史の汚濁は、永遠に其の歴史進展の將來へ一暗影を投ずるであらう。機械的方法はたゞ制度の機械性に對してのみ適用せらる可きだ。併し客觀的機械的方法は、進んで個人の心意の上へ機械的變改の斧鉞を加へる。人格の他律は已むを得ない經過だ。甚だしい場合には、人間性の美點へ殺伐なる强制と凌辱とをさへ加へる。制度は機械的に正しい方向へ轉回せしめられた。其の制度の中に生きる個人は依然として古い人生觀の信奉者である。さうした場合の生起することを何人か絶對に否定し得よう。客觀的方法の根本缺陷が其處に潜む。

個人的主觀的方法は依然として改造方法の中心でなければならぬ。其他すべての方法はたゞ此の主たるものを圍繞して、其れ々々の重要さを持つ。個人的主觀的方法は人間性の中に潜む理想



慾求の眞實性に信頼する。換言すれば、すべての人間は、苟くも其れが人格なる限りに於て、普遍妥當的なる理想に向ひ得可し、又其れへ向ふ樣に、他人格へ影響し得べしとする豫想を根基に置く。果して人間性は、此の絶對的信頼に値し得るか。理想はすべての人類の究極的目標であることを、我々は理論的に論證し得るとしても、其の論證が、事實的にすべての人類の同意を得、理想は我の内に於ける如く、又彼の内に於ける輝ける目標であるや否やは、理論的に斷定の不可能なる問題だ。何故なれば其れは不合理的に進む事實の世界に屬する問題であるから。

併し其處に理想に對する我々の根本的信念が結着するのだ。そして理想と單なる觀念との間の全然の相違が、此の信念を境界として明瞭に發現し始める。理想主義を單なる觀念裡の遊戯と見る現代一部の思想家は、實は我々の理念と觀念とを混同して居る。我々は理想の本質を人格の自覺に卽して確認する。人格の本質の自覺に卽するが故に理想の信念は絶對に疑ふことが出來ないとも言へれば、又逆に理想の本質の信念に卽するが故に、人格の自覺は絶對に可能だと信ずるとも言ひ得られる。人間性の絶對信頼は、人間の知識の妄想では無い。又よし其れが妄想であるにせよ、妄想は我々が人間であることを信じた光榮ある妄想だ。主觀的個人的方法の究極に於ける絶對勝利を私は無條件的に信じようと欲するものだ。若し改造方法に於ける着手の先後を論ずるのであるとすれば、主觀的個人的方法こそは、其の着手の最初より起り、其の最後の一端に及ぶ

も、なほ將來への無限努力を望んで此れが終末を知らないものだと斷言しなければなるまい。

## 一二　理想主義的方法規準

我々は今二の解決の交角に立つた。客觀的方法を缺いては社會の機械的なる組織と機能とが更改せられない他方では、主觀的方法を持たぬとき社會改造の戰鬪旗に絕對勝利の榮光を望み得ないことが明かにせられたのだ。併し兩者は救ふに困難なる其れ々々の缺陷を擔ふ。客觀的の其れは人格の他律を不可避的に含む。主觀的の其れは組織と機能との機械性を傍觀するより外は無い。理論的にも實際的にも、二の方法は互に他から救濟を受けなければならない。併し兎に角此の漠然たる對照によつて見るも、二の方法は其の着手に先後の區別が爲さる可きでは無い。人類の社會の永遠に存續する限り、そして理想はユウトピアで無い限り、兩者の方法は永遠に平行して進む。

併し平行と呼ぶ概念は、我々の理論的並びに實際的の要求へ徹底と勇氣とを與へ得ない。のみならず、平行線上に置かれた二つの方法は、蔽ひ難き半ばの缺陷を含むが故に、我々は先づ其れから始めて克服の手を下さなければならぬ。けれども其の缺陷の除去は結局兩者の平行の克服であつた。我々は見掛けの上の對立から退却して、より高き統一を得る。其れは依然として前に述



べた心意と制度との相對性の理論の上に於てゝある。

我々は人間の心意を單に主觀的個人的と見た。今や其の心意は社會的文化的の其れとして客觀化せられなければならぬ。社會的文化的心意は、其れが心意なる限りに於て主觀的と呼ばる可きだが、個人の肆意を超越し、普遍に妥當するものを意欲する點に於て客觀的だ。次に社會の機械的なる組織と機能とは、個人の意欲に對せられる限りに於て客觀的機械的と考へらる可きであつたが、社會的文化的心意に對せしめられゝば、此れも亦主觀的なる心意の所產だ。機械性は此の心意に對しては何等かの意味だ。又心意の主觀性の對象に於ける表現だ。改造は結局其の主觀、其の客觀の改變を目標とする。

社會的文化的心意を標準とするが故に、其の所產としての制度の機械性が機械的の改變を受けることは、本質に於ては意味の改造だ。我々は最早其れを單なる機械的のものとは考へない。此の超個人的心意に對せしめられる個人的主觀的心意の人格的自覺とは、要するに個人の超個人に於ける、主觀の社會に於ける、自覺でなければならぬ。機械性に表現せしめられた社會的文化的意味に於ける個別的肆意の自覺でなければならぬ。個人的心意と機械的制度とは當然合一せられ得る。

社會改造方法の主觀的と客觀的の對立は、今や我々の前に殘るところ無く解決せられた。兩者

を對立せしめつゝある間、我々は純粋に形式的なる價値を見ないで、此れに何等かの内容を混入せしめたのだ。此くして社會改造方法の根本義は、我々の普遍妥當的價値に歸ることだ。其れを離れて改造の方法は無い。社會改造は社會價値の顚倒である。生活革命は生活意味の革命である。我々が此後改造方法の細案を考察するに其の規準となるものは、常に普遍妥當的價値だ。他の改造方法を論評し其の意味を評量する場合に顧慮せらるべき原則は、其の方法の據つて取る價値は普遍妥當性を有し得るや否やの反省だ。我々の改造方法は主觀的でなければならぬ。併し主觀の深化はひとり客觀の整序によつてのみ其の目的を達する。内容無き形式はあり得ないからである。又客觀の整序はひとり主觀の深化によつてのみ其の目的を達する。形式無き内容はあり得ないからである。此等すべてを統一して、凡そ社會改造の方法に根本義を與へるものは理想主義的規準の外にあり得ないと私は斷言する。



# 第十二章　漸進か革命か

## 一　何を意味するか

改造方法論に於ける漸進と革命との對比論は、其の區別一見明かなるが如くで實は其れほど明かなもので無い。歴史的には議會主義を漸進主義と呼び、政治力の不合理的掌握を革命主義と呼ぶが、其れならば兩者の區別は明かだ。併し此の限られた意味の漸進と革命とを論じつゝあるものも、其の議論の中途では、何時の間にか一般的の漸進と革命とを問題にして居るのが普通だ。私は今二つの概念に此の意味の限定を置かず、一般的立場に立ち兩者の價値を判別して見たい。

最初に私は、此の二つの思想の對立は、單に通俗的のものであり嚴密的意義のものでは無い事を斷言したい。第一に既に私が論じて置いた如く、歴史的なる具象事實を離れて此の二の政策の價値を論ずるは、我々に取り全く無意義の事だ。漸進と言ひ、革命といふ。既に單純な形式概念では無く、其の中に或る事實的内容を含む。然らば我々は其の内容をもつと具象化せしめて、一回性的の與へられた歴史現實と爲し、其の時、其の處、其の位相に於ての漸進と革命を論ず可き

であらう。抽象的内容に於ての範疇論は、歴史へは適用せられ得ない。其れ故、單に抽象的に兩者の何れかを取つて以て固守するものは、其の歴史的現實の變化により、前言を食むの止む無く、範疇的選擇の誤謬を氣付かせられるであらう。範疇的に選擇せられるものは、純粹に形式的なものに限られるのだ。

其れ故に文化主義者は、抽象的には、社會で言はれて居る意味に於ての漸進と革命とに就き、其の優劣を論じない。其れはたゞ其時の具象的事實と及び批判原理としての普遍妥當的價値により決定せられる。或る時私は所謂漸進策を取り、他の時却つて寧ろ革命策を取るであらう。さうした事は、私の運動の意義を毫も沒却せしめない。一つの歴史的現實は我々をしてたゞ一つの行爲を選擇せしめる。歴史が具象的個性的なる如く、我々の行爲も亦具象的個性的だ。更に言へば一回性的だ。此れを所謂漸進と革命の何れかの範疇に收めるとすれば、私は絶えず其の態度を改變せしめる變節漢だ。しかも私は其の行爲の選擇の中に、唯一不變なる價値の優支配を確認する。變節と否とは、たゞ此の價値の殿堂に於て通用する言葉だ。

第二に、此の兩概念は、其れが何を意味するかの確定した意義に於て、必ずしも精確なものでは無い。多くの論者の使用する意義が、既に甲乙同一では無い。其れ故に私は、此の語の指示する意義を次第に反省しつゝ進んで行き、其の價値を判別して見よう。



## 二　價値に於ての漸進と革命

我々は究極的社會理想と現實の其れとを對比し、其處に漸進か革命かの選擇を尋ねることが出來る。換言すれば、資本主義的社會制度は、其れの質に於て、理想に於て、全然此れと異る他の或る制度へ變革せしめらるべきものであるか、或は資本主義社會制度を根本的に排斥せず、たゞ其の中に含まれる若干の弊害を、次第々々に除去して行くを以て、改造の根本方針と爲すかに於て、革命と漸進の區別が成立すると考へる。

若し此の概念的區別が正當のものならば、勿論私は一個の革命主義者だ。そして所謂漸進主義者を排斥する。私が資本主義的社會制度を批判するは、質に於てだ。理想に於てだ。此れと或る理想的社會形態との間に、理想實現の量的相違があると言ふのでは無い。資本主義は徹頭徹尾救濟せられ得ない。何故なれば、其れは甲人格による乙人格の非人格化を根本の前提と爲すから。資本主義が部分的に、或は量的に救はれる事はあり得ない。其の制度の意義が資本主義的なる限り、其の社會はたゞ此點に立つだけで、永遠に非難せらる可きだ。一の質と他の質との間には、突然の變革しか無い。赤を薄めて青に移り得ない如く、いかに稀薄なる青も質に於て依然たる青だ。此の突然の變革を革命と呼ぶ可くんば、私は實に其の革命の途を選ぶ。漸進に價値は無

い。資本主義社會の下にあつての如何なる改良も、其れは資本主義自身の變革では無く、資本主義の伴隨現象の微々たる改良に過ぎない。資本主義は依然として殘存する。

眞の意味の漸進と革命の區別は、恐らくは此の根本點に於て、究極理想との關係に於て爲さるべきものであらう。私は其の區別を徹底的のものであると信ずる。けれども、此の究極的の意味に於ては、すべての生活が每瞬的に革命を經過しつゝあると言へる。蓋し生活の推移は、常に量的で無く質的個性的のものであるからだ。革命主義は、毫も危險なる主張で無い。若し此れを廢棄す可しとならば、其れは我々に生活の意義を沒却せよ、なほ進んでは生活自身を廢棄せよと命ずる事だ。無理想主義者に取り、凡そ普遍妥當的の理想ほど危險なものは無いであらう。

## 三　政治力の把握と革命

究極理想に對せしめられた場合の革命主義の內部にも、なほ其の採用する手段の相違により、漸進と革命の二派を生ずる。其の一は、究極理想を顧慮する時には、資本主義を容認せず、其れの廢滅を目的として運動を續けるも、併し其の手段は飽くまで合理的であり、其の推移は漸次的であらうとする。其の二は、理想に於て資本主義の廢滅を欲するのみならず、此れが達成の手段として、不合理的の力を用ひ、先づ强制的に政治力を把握しようと欲する。前者は漸進、後者は



革命だ。此の二つの對立を、我々は現にマルクス主義者の陣營內に見た。例へば獨のカウツキイ、英のマクドナルドの如きは其の前者に、露のレエニンは其の後者に屬する。私は今マルクス主義の立場から此の兩者の何れが、マルクスの眞義から、より遠ざかつて居るかを問題としない。たゞ我々の改造手段として、何れがより賢明であるかを考察したい。

第一に、私は此の二の主張を實質的に解剖して、兩者の間に凡そどれだけの相違が成立するかを見て行かう。一つの社會制度は、其れに固有なる政治力の中心を豫定する。社會のすべての機能が、單に主觀的なる要求であつたところから客觀的の社會表現となる爲めには、此の中心點との結び付きが必要だ。政治力の中心は、其の制度の中心的意義の表現であるから、隨つて一制度より質的に異る他制度への推移は、政治力の中心の移動を豫定する。此の見方が正しいとすれば、ひとり革命主義に於て政治力の把握が其の推移の經過中に必要とせられる如く、漸進主義者も亦此の政治力把握を原理的に否定す可きでは無いであらう。兩者に區別の問題として殘るものは、此の政治力を把握することが、すべて他の擧動に先立ち、突然的に行はる可きであるか、或は、其れは他の擧動の結果として自然的に行はれる樣にし、結果に於て漸進的となるかの判別であらう。換言すれば、政治的の把握に改造運動の重點を置くか、或は他の運動に重點を置き、政治力の把握を其の自づからなる演繹と爲すかの區別だ。前者に隨へば、先づ不合理的の力に訴へざる

を得ないから革命的であり、後者に隨へば、合理的の發展を以てするから漸進的である。

けれども右の區別を爲す前に、我々は兩者の事實の內面的構造を考へて見たい。恐らくは漸進主義者といへども、社會制度の變革に政治力の移動を避く可からざるものとなすであらう。此れ無き限り、よし其れが漸進である場合にも、其の推移の確認を得る事が出來ぬ。其れ故に漸進主義の究極目的は政治力の把握にあると同時に、漸進の一歩々々が亦此れを目的とし、一歩は一歩より近く政治力の把握に近づいたものとなつて居なければならない。此くして漸進主義に對する私の疑問が持ち上る。凡そいかなる場合であれ、政治力が此れに反對する不合理的の力によつて把握せられなかつた場合があつたらうか。又理論的にあり得るだらうか。私は今理想を語らず、現實を語る。政治力は一の不合理的の力だ。政治の形式は、どれ程合理的に構成せられて居るにせよ、此れを實行に移すものは背後の不合理力だ。其の著しい實例は現在の議會制度である。表面的には此れ程合理的の制度は無い。民衆は自己の主張を代表し得べき議員を選擧することが出來る。選擧權の行使は民衆の自由だ。議會に於ける決議は、民衆全體の多數意見を其のまゝに表現したものだ。此く考へるのが議會主義の擁護者だ。けれども一旦其の形式の實際的運用を解剖するに於ては、議會主義は民衆の意見を表現するに適した形式では無い。デモクラシイには排斥す可きブルジョア、デモクラシイが許される。富者は其の富を利用し、選擧人を買收し、演說會



を開き、宣傳の印刷物を配附し得るに對し、貧者はすべて此等の便宜を持たない。其處に不合理的なる實力の相違があるのだ。いかに賢明なる形式も此の實力の前には死物と化せざるを得ない。其れ故に無產者が飽くまでも議會主義を取つて進まうと思ふならば、先づ其の形式を自らへ有利に運用し得るだけの實力を得ることが必要だ。其の實力を確保し得べき何等か別の手段を講ずることが必要だ。そして此事のみが死したる形式に生命を與へる。

資本家國家に於て、其事ある許りで無く、露國の如き無產者の國家に於ても亦、實際の政治を運用し得るものはたゞ不合理的の實力のみだ。例へば嘗てコロンタイ女史等の所謂「勞働者反對團」が、サヴェエト政府の政治を批評したとき、役員の選任に指名の方法を取ることの不可を論じたのは意味のあることだ。女史に隨へば、露國では役員選任の場合に、選擧の方法は廢棄せられひとへに指名の方法のみが採用せられて居るといふ。彼等は其の官僚主義を排斥して居るのだ。併し若し彼等が其の方法をいけないと思つたならば、最初に指名か選擧かを選ぶ自由を持つたときに、指名方法へ反對すればよかつたのだ。然るに其の場合に彼等は公然たる反對を爲し得ず、後になつてから背景に勞働組合の支持を得つゝ、此の抗議を提出した意味は何處にあるか。要するに政治の實際的運用を決定するものは、合理的の理論では無く其れとは全く反對の不合理的實力であつたからだ。其れは資本家國家と無產者國家とに於て差別あるものでは無い。

不合理の實力が政治の運用を決定する制度を、私は値打の上に於て貴いとは言はない。批判は寧ろ其の反對だ。併し苟くも政治的文化現象が、一つの權力の發揮としてある間は、此れを運用するものと、及び其れに對抗するものとは、等しく自らに實力を掌握しなければならない。所謂漸進政策を取るものといへども、不斷に實力の掌握を忘る可きでは無い。寧ろ言へばより強き實力を握ることが漸進政策を有利に、有意義に動かす所以である。併しなほ問題となることは、此の如き實力を握るに亦多くの手段があり、力を得るに力を以てするが賢いか、或は又力を得るに理を以てするが有利であるかは、後の問題として殘されよう。たゞ我々は、革命主義と漸進主義とが、內面的には一の力を獲得する問題として共通の立場に立つことを明白にして置きたい。此く考へれば、漸進策は實は合理的の推移では無い。推移の動力はすべて力だ。力と力との不合理的鬪爭によつて、社會は何れかの方面へ推移するのだ。今私は現實を考へる。社會の推移は政治的に不合理的なる力を把握することによつてのみ達せられ得ること、隨つて其は力の鬪爭によつての外には達せられ得ないことを主張するものが革命主義であると定義するならば、此の場合私の取る政策の傾向は依然として革命的だ。そして此の意味の革命主義を資本家國家と無產者國家とは、等しく容認せざるを得ないだらう。何故なれば、其の事實は苟くも政治的活動の在るところに一瞬として廢棄せられたことは無かつたから。



## 四　革命の經過と漸進的動力

今考察したものと同じことをいふに過ぎないとは思ふが、卽ち先きのものが定理ならば此れは其れの系であるが、外形の上に於て突然的の變化を受けるものを革命的と呼び、さうした突然的の變化無しに、徐々として推移するのを漸進的と呼ぶ場合がある。例へば彼の生物の趨異に、ドフリィス等の突然變異說あるに對して、ダアウィン等の進化說あるが如きものであらう。社會の制度も亦、此れと同じい趨異の對立を爲す樣に見える。例へば露國の勞農政府樹立は革命的であり、英國勞働黨の勝利は漸進的であると呼ぶやうに。

外形の變化は、勿論其の根柢に政治力の推移を豫定する。一の政治力が他の政治力によつて交替せられたとき、外形の上では社會制度の變化がある。そして此の交替の瞬間には、外形的に、よし其の程度は種々異るものあるにせよ、必らず革命的の推移を見るに相違無い。明治維新の場合の如くに、其の推移が全體として漸進的穩和的であつたときでさへも、なほ一の革命的瞬間はあつた。一の政黨の優支配が他の政黨によつて代替せられる場合も亦さうだ。いかに健全に、穩和に進んで居る社會であつても、此の瞬間的の革命時を避け得ない所以は、其の推移が兎に角甲政治力より乙政治力への質的推移であり、何等かの方法により、此れを量的のものに代へること

は出來ない爲めだ。

其れ故に漸進主義といへども、此の瞬間時の革命を否定す可きでは無い。其れは不可能事だ。此の意味の革命をすらも否定するものが漸進主義であるとすれば、漸次主義は全くの誤謬だ。

けれども同時に、此の意味の革命を必要不可缺だと主張し、のみならず其の點を高調するから單に革命主義者であつて漸進主義者では無いとする事は誤謬だと思ふ。更に進んでは此の意味の革命をのみ高調して、あらゆる漸進政策を否定するものがあるとすれば、私は其の人の短見を責めなければならない。此の場合の革命と漸進との關係を私は次の如くに見る。青色のリトマス溶液と一定濃度の酸液とを準備し、精確に連續的に後者の一定量づゝを前者の中へ滴下したとする。或る時間を經過すれば青色液は忽然として赤色液に變るであらう。酸液を滴下すること愈々多ければ、リトマスの赤色は愈々固定して動搖しないものになる。右の實驗に於て、瞬間的に色の質の變つたのは革命だ。けれども此の革命の背景には、精確に連續的なる漸進が、常に革命の動力として行はれたことを忘れてはならぬ。革命は、實は漸進の每瞬間に準備せられて居たのだ。そして外形的に見られる瞬間革命は、外形的にこそ重大なものとして我々の眼に映ずるが、全體の進みの上に於ては、其れほど決定的の意味を持ち得ないものであつたかも知れない。

例へば我々は、露國の勞農革命の場合を見る。資本家國家が無產者國家に變つた所謂政治力の



轉移は、割合に容易に行はれた。實際其の革命の爲めには、多くの生命を犧牲にする必要さへ無かつた。プロリズムが始まつたのは、主として此の革命の後である。此の例の場合に、我々は眞の革命を右の推移の何れの時に定む可きであるか。多くの人は、又勞農政府の幹部は、此の政治力の中心の推移のあつた瞬間を革命と呼び、其れより以後を革命後と爲し、其の革命への反對力を反革命的勢力と呼んで居る。けれども眞正の革命は、單に短い其の期間だけの事であつたか。私は主張する。露國の革命は今も尙ほ其の途中にある。共產主義者の政府は、露國の現實的政治力の恐らく二十パアセント位をしか把持しては居まい。殘りの七八十パアセントとを把持するに至るは、なほ甚だ遠い將來のことである。新經濟政策を採用するの已むを得なかつたことは、明かに其の革命が、全道途の第一歩にしか達して居ないことを我々に示す。政治力の中心が移動したことは、其れに比較すれば甚だ外表的の事柄だ。露國政府の幹部は屢々言つて居る。新政策によつての國家資本主義は、他の國家に於ての國家資本主義と根本的に其の質を異にすると爲す所以のものは、其の國家が他にあつては資本家國家なるに對し、此れにあつては無產者國家なる點にあると。形式の上に於ての此の差違を私は十分に容認しようと思ふ。併し實質に於て其の差違が、凡そ何程のものを意味し得るか。常に形式を捨てゝ實質に就かうとする我國の社會主義者などが、何故此の場合に限り、空なる形式主義に拘泥するのであるか。私は其の意を知る事が出來

ない。其れ故に私は斷じて批評する。露國の革命はまだ其の終りに達しないのみか、漸く其の第一歩にしか達して居ないものであると。革命と漸進とを取り、何れが早く其の實績を擧げ得るかと尋ねたときに、革命主義者の多くは漸進政策の無力を攻擊するが、私は特に其の人達へ對して非難して置きたい。右の如く主張する人は、恐らくは露國の革命を完成したものと考へるからであらう。我々は革命を實質的に、隨つて甚だ長い期間に亙るものとして考へる。其れ故に所謂革命と漸進との何れが有力であるかと反省した場合に、其の長い期間の革命が、何れの政策によつてより確實に、より敏速に行はれ得るかを先づ顧慮する。

具體的に例を露國に取るとすれば、新經濟政策によつて爲されたほどの仕事は、所謂革命の前の仕事として爲されるが賢いか、或は革命の後が賢いかを、我々は先づ顧慮する。そして革命は如何にしても避け難いものであるとすれば、あらゆる構成的準備の出來上つた後に此れを行ひ、所謂革命による社會のキャタストロオフを出來るだけ少ないものにし、且つ人類として最も慚愧す可き行動であるテロリズムを同樣に出來るだけ少ないものとするが賢明であるか、或は此れに反して、所謂革命を急速に行ひ、後すべての構成的政策を取るが賢明であるかを顧慮する。私は勿論其の前者を取らうと思ふ。外見的には確實敏速で無い樣に見えて居て、實は此の方が遙かに有利でもあれば、又遙かに理想的でもあるのだ。



此く言つても、私は露國の革命を、同時に歷史的に非難しようとするものでは無い。所謂革命は、歷史的に他の事件との關係に於て起り得るものだ。其の機を逸すれば最早永久に此れを爲し遂げることは出來ない。露國の革命は、歐洲の大戰が露西亞の無產者に與へた唯一最高の贈り物であつた。其の好意を受け取らないのは、甚だしい怯懦であるか、或は痴愚である。我々は此の歷史的事實の背景を置いて露國革命の功過と及び革命後の政策の得失を批評しなければならない。此の場合には、私は殆どすべての點に於てレエニンの行動を肯定するに躊躇しない。寧ろレエニンほど賢明に處置し得たものは、上下數千載の歷史を通じて幾人もあるまいと推服して居るものである。併し私がボリシェヴィズムの原理を取らない所以のものは、一般理論の立場に於てだ。又特に日本改造の原理としての不適當を思ふからだ。私はレエニンの一々の理論に推服するものであるが、併し他面には此れに反對した立論を爲した獨英の諸社會主義者の主張にも多くの共鳴を感ずる。此等の主張を、彼等の鄕國の歷史的事情に對比して考へるからだ。我國の社會主義者は其點に於て甚だ非歷史的である。非現實的である。露國の歷史的背景へ當て嵌めて、然る後に正しい意義を發揮し得るボリシェヴィズムから、すべての歷史的意義を脫却せしめ、取り來つて我國への適用原理にしようとする、人生に於ける抽象的態度を彼等は取つて居るのだ。

形式に於ての政治力の推移は、少しも急ぐ可きで無い。我々は其れの實質を問題にしなければ

ならぬ。

## 五　革命に伴ふ社會危機

或る人はかう言つて反對するかも知れない。

革命に準備の必要なことを予も認める。併し政治力を把握することの出來る機會があるとすれば、構成的準備を捨てゝでも、出來るだけ急速に其の機會を捕へなければならない。其の理由はかうだ。政治力を反對的勢力により握られて居ながら種々の革命的構成準備を爲すことは、不自由な方法だ。其の拘束せられた自由範圍の下で爲し得る經過の進みは、知れた程少ないものだ。先づ政治力を掌握して置けば、此の爲めの政治的自由を持つから、又反對的勢力に對抗する實力機關を自らに收めて居るから、其の下に於ける革命後の構成的仕事は出來るだけ急速に進められ得る。我々がボリシェヴィズムに同感する意味は其處だ。漸進は遲く革命は速い。其の收むる功績に雲泥の相違があると。

右の主張は、現に我國のボリシェヴィキの多くが隱然と懷抱して居る意見だから、今我々の考察に上ぼせて見たのである。私は此の主張に大いなる道理の潜むことを思ふ。革命を行ふことの難否等を今問題の外に置くとすれば、いかにも政治力を把握しての行動は、然らざる行動よりも



多くの功績を擧げ得るに相違無い。其の限りに於ては勿論私も此れに同意する。併しなほ一つの問題が殘されて居るといふことは、此く急いで爲された革命の後に、社會が全體として負荷せしめられたキャタストロオフの程度は、何れの場合にも同一であつたかどうかの疑問だ。右の主張は少くも其の程度を同一として計算して居る。然るに此の程度は常に決して同一なるものではあるまい。

現に露國の革命が實驗した如く、革命の後には必らず經濟的に、類例の乏しい生產の一般減退が來る。革命の首腦者すらも、精確には此事を豫想して居なかつた。又其れを豫想するものも、其の爲めの窮迫は割合に短少の期間に恢復せられ得るものと考へて居た。けれども事實は全く其れの反對であつたのである。第一に、民衆の幹部は革命と呼ぶ一政治的變革に全力を傾注しなければならぬから、經濟的の構成にまで多くの力を注ぐことが出來ない。第二に、革命に對する反革命勢力及び外國の干涉勢力に對抗する爲めに、民衆の甚だ多くの勢力が殺がれる。第三に、所有權が確定しない爲め、農業も工場も其の仕事を拋棄する。第四に、其等の產業に從事するもの、特に有能の技師監理者等は、多くは反革命的傾向を持つから、仕事の運用に對しサボタアジェを爲す。第五に、革命とは、此等の產業內部に於ける全員の命令的階級差違を破壞することであるが、現在の產業能率は實は此の階級的差違の賜だ。此の差違の破壞は直ちに產業一般の能率の

破壞を意味する。此等の理由は、すべて勞農政府幹部の容認するところであり、私は寧ろ其れを借用したまでのことだ。

此等の理由が僅に一個月續いたとしても、其の結果は、社會に對し豫想以上に恐る可きものであらう。若しも其れが、一年或は二年繼續したとすれば、社會は全然的に痲痺せしめられるに相違無い。我々の產業組織は、進步すればするほど、相互の關係に名狀し難いデリカシイを持つものだ。我々は現在、たゞ一種類の產業が一個月斷絕した場合をすら經驗して居ない。併し若し其事が起つたとすれば、社會の蒙る損害は、甚だ長い期間に亙つて癒やし難いものである。我々はあらゆる方面から其事を實證し得るのだ。

革命促進論者は、此の危險の中に我々を曝さうとする。思はざるも甚しい。急ぎ過ぎた革命の後に、此の如く痲痺した產業を基礎とし、其上に多くの構成的事業を積み重ねるがよいか、或は亦、出來るだけ所謂革命の急激的方法を避け、準備の完整した革命を基礎とし、其の後の經濟的構成を進めるがよいか、此く問題が具體化せられて後我々は正しい判別を爲すことが出來る。我々は所謂革命による社會の大いなるキャタストロオフを恐れなければならぬ。其れは實に革命の功績を確保する爲めにも、恐れられなければならぬのである。若し此の壞滅の程度が餘りに甚だしく進んで居た時には、既に革命自身が最後の勝利を收め得ないのだ。此の結論こそは露國革命



の實驗が我々に與へた敎訓だ。明治維新の場合の如きは、誠に一の奇蹟的經過であつたとも言へる。此時の經濟的變化を仔細に研究することは、我々に甚だ多くのものを敎へる所以であらう。十年西南の役は、明治維新の最後の一幕であるといつてよいものであるが、此の微々たる一戰役によつて政府の蒙つた傷害が、其後如何に長い間繼續して居たかを知るものは、思ひ半ばに過ぎるであらう。

## 六　テロリズムの問題

社會改造に於ける漸進と革命との本質的相違及び兩者の關係は明かとなつた。次には、其の問題の考慮每に、常に附帶的に持ち出される一二の問題の解決を試みよう。

改造の一部にテロリズムを使用することは、理想主義の立場にも許され得るか。なほ一般的に言へば、暴力に訴へて社會を改造することには、理想主義的基礎づけが與へられ得るか。改造の漸進策には、其れは殆ど問題とせられない。併し苟くも社會價値に於ける革命を本質的に正しいと宣言し、又其の意味に於ての革命は、必然的に政治力の把握を目的とした突然的社會變化を伴ふことを容認する以上は、テロリズム或は暴力は我々に切實の問題となつて來ることを否定し得ない。暴力論は理想主義の埒外に敬遠す可きでは無く、直ちに理想主義の運用途上に置かれた重

要問題だ。そして此の問題の解釋如何により、我々は理想主義の陣營内に幾多の分派をさへ作るに至るであらう。

## 七　暴力の道德性

私は先づ暴力自身の倫理性を考へよう。暴力は一の物理力の發動だ。腕力沙汰は手の筋肉の何等かの運動だ。たゞ其の運動の目的が自己の上に無く、他の人格の上にあることを特色とする。他人を動かすに暴力を以てするは、合理的の仕方では無く不合理的の決着だと普通には稱せられる。其の所謂合理不合理は何により區別せられたものであるか。一つの見方は、他人への强制を目標としたであらう。一人格は他人格により如何なる場合にも强制せらる可きで無い。人格を動かすにはたゞ説得によらなければならぬ。人格は自律する。自らの行爲が、他の暴力により强制せられた結果或る方向を取つたとすれば、其れは何等價値ある行爲では無い。若し自らの上に其の强制、其の暴力が加はつたとすれば、我々はあらゆる方法を以て此れを排擊しなければならぬ。説得は合理であり、强制は不合理だ。此く見れば、暴力により社會を改造することは、當然理想主義により非難せらるゝものゝ如くだ。

けれども右の非難は、人格の强制一般に加へられ、單に暴力に加へられる其れでは無かつた。



强制はすべて惡しく、暴力を使用しての强制だけが惡いのでは無かつた。其れならば、目標が他人格の上への强制だからといふ理由を以て暴力を非難することは出來ない。又其れだから暴力は不合理だとは斷定せられない。暴力を不合理的だと呼ぶには、なほ別の標準が必要だ。そして其の標準は、直接に暴力自身の性質を斷定するものでなければいけない。此くして或るものは、暴力は其れへ理性の加はらない單なる物理力の發動だから、不合理的だといふ。又他のものは、暴力によつて行爲の結果を決定すれば、其の結果に理性の參與するところが無いから、隨つて不合理的だといふ。此等の批評は、兎に角形式の上に於ては直接に暴力自身への批評だ。併し私は其の斷定へ全然的に賛成し得るものでは無い。

暴力は單なる物理力の發動だといふ觀察は誤つて居る。若し此れを單に物理現象だといふならば、我々の行爲の一つとして、物理現象ならぬものは無い。たゞ其の物理力の發動の背景に、一の心理的動機が潜むから、物理現象も一の心理現象となり得るのだ。此の批評にあたり、暴力の强制的方面を考へてはならぬ。强制は全く別の問題として取り放された、單に實質としての暴力が考へられなければならぬ。其れでなければ議論は何處までも循環する。一の心理現象として見られた暴力の發動は、價値に於て高いことも亦低いこともあらう。其の動機が飽くまでも理想主義的に客觀化せられたものであつた場合には、其の暴力は其れ自身として何等非難せらる可きで

は無く、却て甚だ高い價値を擔ふに相違無い。此れに反し、其の發動の動機が卑劣なものであつた場合は、暴力自身も亦大いに非難せらる可きだ。暴力卽ち無理想的なる物理力の發動と解する仕方は、單に傳襲的なる一の思想誤謬に過ぎぬ。

よし其の暴力が、理想主義的動機により充實せられたものであつたときにも、其の行爲の結果が、非合理的の決定に委せられることは事實だ。理性は最早其の役目を果さない。物理力の大なるものは其の小なるものを破るであらう。暴力によつて行爲の決定を爲すことの慚愧せらる可き根據は此處にあると思ふ。勿論我々の如何なる行爲も、其の結果の勝敗は其の動機の理想的なると否とに依存しない。行爲自身は未來の無限への創造的進展だ。何人かよく其の成果を豫言し得よう。此の意味に於ては、行爲の進展はすべて非合理的だと言はれる。ひとり暴力を使用しての行爲が、非合理的なのでは無い。けれども其の後者にあつては、我々はまざ〳〵と物理力のより大いなる事に絶對の信賴を置かなければならぬ。軍備擴張の爲めに列國の競爭するは其の適例だ。行爲の成果を出來得る限り合理的の理性に委するといふとは違ひ、此事は確かに人間として愧づ可きだ。

暴力の使用が其れ自身として非難せらる可きであるならば、其の理由は恐らくは右の一點だ。併し其れといへども、暴力の價値批判に取り究極的のものだとは言へない。其れは少くとも人類



の行爲の上から、暴力の參加する部分を出來るだけ少くしようとする根據にはなり得る。我々は出來るだけ合理的に行爲しなければならぬ。殊に他人の上に影響する行爲に於てさうだ。我々は出來るだけ世界の軍備を縮少しなければならぬ。軍備の絶滅は期せらる可くも無く、又其れは當然必要なことでは無いが、併し世界に軍備の存置せられる間人類は永遠に神より侮蔑せられて居る。

暴力を使用することは、必然的に其の行爲の成果を物理力の大小の上に信賴せしめることを含む。其れは暴力自身を非難する我々の唯一根據だ。併しなほよく考察すれば、此の理由は暴力に取り致命的のものでは無い。何故なれば、其れは少くも行爲の成果の「成敗」に就ての豫想であり、成敗を眼中に置かない、行爲自身の意義に就ての考慮では無いから。勿論いかなる行爲も其の成果の成敗を全く顧慮しない場合は幾程も無いであらう。併し其れは現にあるには相違無いし、又意味としては考へられ得ることだ。然る場合には、暴力自身の價値は其れの背景として含む心理的動機の價値如何によつて決定せられる。たゞ其の標準のみによつて決定せられる。今若し其の標準をも取り去つたとすれば、暴力自身は他のすべての行爲と同じく、價値に於て全然の無記だと私は思ふ。暴力なるが故に非難せらる可き根據は何處にも無い。他人格の上への强制の可否に就てはなほ後に考へる。

## 八　暴力の消極と積極

暴力を使用する場合に消極と積極とある。他より加へられる暴力に對し、自己防衛的に暴力を以て對するは其の消極的なる使用だ。他よりの强制如何に拘らず、自らの理想を貫徹するには此の一路を貫くより外に途は無いとして、自ら暴力を取り、他に攻勢を取るは其の積極的なる使用だ。前者は概ね人格の正當防衛として許される。私も亦其の見解を取るものだ。併し社會には、此の場合にあつてさへ彼の暴力への抵抗を取るまいとする人がある。そして此れが爲め、よし自らの生命を失つたにせよ理想は勝利を占めたと爲す。宗教生活に於て其れをいふには根據がある。私自身此れを否定しようとは思はない。又此の無抵抗により受けた損傷は、後に彼の悔悟や何かにより高い價値を以て酬いられる事を豫想し、且つ其の豫想に確かの根據があるものとすれば、此の場合の無抵抗も亦一の例外的場合だ。其等を外にし、倫理的生活の中に於ての無抵抗は却て無價値だ。人格の權威の爲めには、其の上へ積極的の暴力を加へるものと、我々は暴力を以て敢然たる戰ひを開始しなければならない。殊に其の暴力的抵抗の缺乏の爲め、自己一身を滅ぼすだけで無く全社會の損傷を來すに拘らず、晏然としてなほ暴力への無抵抗を主張するは、全く自己の社會成員たる職責を忘れたものとして非難せられざるを得ない。



積極的に他人格の上へ暴力的强制を加へることは、出來得る限り避けられねばならぬ。一般に人格の上への强制は、其の强制を加へる人格自身の汚濁でさへあるからだ。暴力の使用は、其の成果の成敗を物理力に委するからだ。併し今若し他人格の上への强制が已むを得ない社會理想に出た場合は、隨つて其の强制が正義化せられた場合は、此の强制の手段の暴力なることは、必ずしも非難せらる可きではあるまい。蓋し暴力の本質を解し、其れの使用は最低の限度に局限せらる可きことを自信するものが、なほ且つ其の使用を已むなくせられた場合の積極的暴力だ。消極的のものゝみ許され、積極的のものゝみ非難せられるは徒らに感傷的なる批判だ。事理に於て兩者は同一である。其他あらゆる方法を使用して效無く、最早此の積極的暴力を使用する最後の方策の外には何等の途も見出されず、我れ若し其の好時期を逸すれば却て彼れに乘せられ、悔ゆとも及ぶ可からざるに至る場合、敢然として其の最後の方策を實行するは、却て理想主義的なる態度だ。遲疑逡巡以て其の時期を逸し、恨みを全社會の上に殘すは、永遠に非難せらる可き怯懦と不明だ。殊に此の意味に於ての暴力を使用するときは、其の社會に取り、歷史の上に「彼れか此れか」の運命的決定點なる可きが故に、其の對策に賢明勇敢で無かつたものゝ冒す不德は、何物に比肩せらる可くも無い。

國家は一の聯合體だ。民族も亦現在の事實としては一の聯合體だ。聯合體は其の相互の間に共

通の目的を持たない。隨つて聯合體相互の間に目的の爭鬪を起し、結局は互に暴力に訴へることは、人間の社會に於て避け難き歷史的解決法だ。私は其れを否定しようと欲しない。たゞ從來の所謂帝國主義、所謂軍國主義は、此の爭鬪の究極に豫想せられる暴力的手段の道德性を考へるところが無かつた。我國の多くの倫理學者は、概ね暴力の否定論者であるに拘らず、國民道德の手段、國家の手段としては、無條件的に、獨斷的に、又單に傳統的に、其れを許容して自ら怪しむところが無かつた。暴力的手段使用の此の一實例に於ける彼等の批判を、私は誤謬だとは言はない。たゞ彼等が、暴力の道德性の一般的考察を爲すこと無く、其の事實的一適用を他のあらゆる事實へ擴張し得なかつた迂を責めなければならない。暴力の適用せらる可き場合を私は敢て右の國家や民族の上にのみ限定しない。自づから右の所論の中に、其の適用の範圍が示されて居たと私は信ずる。

## 九　革命に際してのテロリズム

革命の場合テロリズムは、殊に最近かの露國に於て經驗せられたが爲に、世の視聽を集めた。テロリズムの或る辯護者は言つて居る。テロリズムを使用したのは革命者では無い。革命者は何等テロリズムの手段に訴へるところ無くして政治力把握の目的を達成した。其の革命後に於て



も、新政府は强ひてテロリズムを採用しようとはせず、革命の民衆も亦甚だ靜穩に其の秩序を維持し、其處にテロリズムは何の問題をも起さなかつた。最初にテロリズムを取つたものは實に反革命の徒である。既に達成せられた無產者の革命を破壞する爲めに、反革命者は無賴暴戾至らざる無きテロリズムの手段を取つた。此れに對し革命者がテロリズムを以て應ずるは已むを得ない。しかも尙ほ彼等は、出來得るだけ其の方法を取ることを避けて居たのであると。

革命者が此の如く君子人らしい正當防衞論を持ち出したことを私は妥當だとは見ない。何れが最初にテロリズムを採用したかを詮議立てすることは、既に互ひに暴力的方法を採用することの可能を宣言した後の戰鬪狀態に於て無意味だ。革命者は政治力の把握を以て革命の達成であるとし、其後の反對運動をすべて反革命と呼ぶが、革命は一時的の政治力把握を形式的に呼ぶものでは無い。反革命運動の存續する限り革命は達成せられて居ず、殊に反革命者と革命者とが盛んにテロリズムの應酬を爲しつゝある間は、革命は正に其の途上にあるのだ。革命者は、其の革命運動を開始すると同時に、自らテロリズムの口火を附けた。何れが先きに事實的にテロリズムを取つたかを論じて何の意味を爲すか。

革命は政治力の中心の革命だ。一の潛勢的政治力が他の顯勢的政治力に取つて變る運動だ。此れに物理的武力の支持を伴ふは實に已むを得ない成果だ。其の地位を失墜した政治力の中心及び

其れを圍繞する勢力は、自己の滅亡を防ぐ爲めあらゆる力を以て革命的勢力を打破しようとする。眞に自らの生命をも失ふ最後の場面であるから、其の「あらゆる力」の中に暴力をも含めしめる事は言ふまでも無い。革命は常に字義通りの革命戰だ。一旦革命運動が起つたとすれば、現に勢力地位を占めるものは死を以て革命者に臨む。革命者は此れに反對する正しい理論を持たない。同時に革命者が形式的に政治力の把握に成功したとすれば、直ちに其れへ引き續いて取られる運動は、自らの戰鬪的武力を集中し、訓練することであらう。一日此れを怠れば、十年革命の達成は遲延する。或時には革命自身すら敗滅に歸するに相違無い。其れ故に勞農露國が、革命後に直ちに强大なる赤衞軍の編制を計畫したことは正當でもあれば、亦同時に賢明でもあつた。巴里コムミュウンが破れたのは、ひとへに革命後に戰鬪的武力の編制を怠つた事に歸せられるとするボリシェヴィキの批評は正しい。若し其の革命が正しい根據の下に起されたものであるならば、換言すれば、革命の目的の背後に儼然として理想主義が臨む場合には、其の目的の完全なる、又急速なる達成の爲めに、戰鬪的武力を編制することは何等非難せらる可きで無い。そして一旦戰鬪的武力の對抗を豫想する以上は、其の結果としてテロリズムの起ることも亦已むを得ぬ。其の已むを得ない場合に臨み、なほ且つ法則主義的に解せられた理想主義に拘泥して大義を滅ぼすことを、我々は理想主義の名の汚濁とす可きだ。



## 一〇 既成文化の破壞

此れに關聯して論ぜらる可き問題はなほ幾つかある。私は其の中の重要なる二つに就き所見を述べて置かう。

革命的行動の實行に入るが爲め、現代が歷史的に包容する「文化」を破壞するか、或は少くも其の文化の進步を阻害するに至ることは非難せらる可く、隨つて此事を常に伴隨する革命的行動は非難せらる可しと爲す意見がある。併し私は其の意見を誤謬であると信ずる。

元より私は現代が持つ歷史的文化の光榮をいささかでも輕視しようとするものでは無い。殊に過去の政治的戰鬪の爲めに、其時まで傳へられて來た古建築や古美術やが滅亡した幾多の實例を見る每に、其等の文化的所產に執着の强い私は、人間の政治的欲望、或は屢々權勢的欲望が、人間歷史の上に加へる亡狀の甚しさに義憤を禁じ得ないものである。併し理想主義的に基礎づけられた革命の爲めには、此の恐る可き既成文化の破壞も亦必ずしも避く可き途では無いであらう。其れを必ず避く可しとならば、凡そ歷史の經過の中に革命の機會は見出され得ない。革命の得た成果は、既成文化を破壞する罪惡を償ひ得ないと多くの人はいふが、果してさうであるか。妥當化せられた革命とは、人格の絕對的自律を目的としての其れだ。そして人格の自由は根據であ

り、文化の創造と享受とは其れの成果だ。我々は此の根據を確立するが爲めに、其れの成果を破るに至ることも一時的の現象としては已むを得ない。恰も或る患者が、外科的手術を爲すことによつて自らの體力を一時的に減退せしめる場合に比較せらる可きであらう。或る高貴な文化の創造と享受の機會は極めて少數なる人類のみの手に委ねられ、大多數の人類は全く其の機會を缺くが如き狀態に比較して、其の文化の程度は此くも高貴なる點に達しては居ないが、しかも其の創造と享受との機會は萬人の手に委ねられて居る狀態は、人類の希ふ可き社會價値をより多く保有するか、或は保有しないか。此れを決定するものは、殆ど全く其人の趣味と地位とによる。恐らくは絶對の理論としては、此の問題は何れにも決定せられ得ないであらう。何故なれば、理論の究極に於て此の問題は、文化の質と量とを比較することになつて居るから。今人格の自由を問題にしてさへ、一人の絶對自由の爲めに數人の人格を損傷するに至ることの正否は、理論的には絶對に定められ得ないのである。況んや右の如き文化の問題に於ては、甚だ高貴なる質と甚だ廣大なる量との間に、何の絶對的評價が加へられよう。併し我々は少しく議論を緩和して、其の高貴なる文化さへ、萬人の人格の結果として將來に創造せられ得ないものでは無いといふ豫想を、其中に包容せしめるとすれば、多數者が其れへ參畫の機會を保有する、割合に低い程度の文化を、多數者が其の機會を有しない高い程度の文化よりも、人類の爲めに希望多いものとして斷定せざるを



得ない。

## 一一　人格の上への强制

次に革命者が、自己の信奉する理想を他人格の上へ强制することは、我々の熟考を要する一問題である。强制を伴はない革命は無い。否寧ろ最も程度の高い强制が卽ち革命だと呼んでもよい。其の如き人格の他律的强制は、我々に許された途であらうか。私は此の問題を後に獨裁主義を考察する場合に再び詳しく考察する積もりである。今はたゞ從來の所論に關係ある範圍內に於て結論的の略述を爲す。私の信ずるところでは、人格は絶對に自律するが故に、其れは如何なる意味に於ても他人格により强制せらる可きでは無い。其れ故に社會が其の社會秩序の違反者に死刑を行ふことは、人格として絶對的に許され得る行動であるかどうかを私は疑ふ。よし其の犯罪者が社會成員の數名の生命を斷つたが故に、其の犯罪者は自らの生命を以て罰せられなければならぬといふことには何の根據も無い。私は其れほど高く人格の不可侵性を考へて居るものである。其れ故に個人が個人の上に强制を加へることは如何なる立場から考へても、絶對に許容せらる可き行爲では無いと信ずる。

併し其れが革命に際しての强制の考察である場合には、其れへ少なからず他の見地の考察を包

容することが必要だ。其れは革命自身が社會自體の理想的進展の爲に容認せられ得るといふことである。社會の成員は、自ら其の社會の成員たることに依り、其の社會の目的に背戻した場合、社會により、自からの上に加へられる强制を本質的に契約したと見なければならぬ。社會の法律が個人の上に强制することの妥當性は、其の根據を此處に置くのだ。然らば今若し其の社會が、自らの取る目的を理想主義的に進展する必要を感じ、しかも其の進展は客觀的に妥當化せられ得るとするならば、此の進展の目的に背戻するものゝ上へ社會が强制する事は、必ずしも不當ではあるまい。革命の强制は實に其の一つの場合だ。併し革命者が妥當的だと主觀的に自信することは、果して客觀的に妥當的だと基礎づけられ得るか。其れは常に大いなる問題だ。主觀的にのみ妥當であり、客觀的に何の根據をも持ち得ない目的を革命者が取り、のみならず此れを他人格の上に强制するならば、自らを傷け他を害するの罪は、死を以て償ひ難いであらう。露國に於ても革命後、良心的の一美學者は、「マルクス主義の立場に於て」美學を講義することを命せられたが、其の事を果すを得ず終に餓死の途を選んだ。

社會改造の方策上に於ける漸進と革命とは互ひに如何なる優劣を持つであらうか。私は今此の問題を殆ど全部的に批判し盡した。要約して言へば次の如くになる。

私は社會價値の見地に立つて現社會に臨む時には、理想主義なるが故に勿論革命的である。資



本主義は救濟せられ得ない。革命は一の潜勢的未來的政治力によつて他の顯勢的現在的政治力に取つて代ることだ。若し其の革命が理想主義的に基礎づけられ得るとすれば、換言すればすべての人格の絶對的自律を目的とすることが其の革命に客觀的に是認せられ得るとすれば、そして其の革命の道途を選ぶより外に他の進路が無かつたとすれば、其の革命は理想化せられる。更に若し其の進路の外に正しい道が無かつたとすれば、革命は人格の絶對的自律の名に於て、テロリズムを、既成文化の蹂躙をすら避ける事は出來ず。又避ける可きでは無い。併し勿論あらゆる方法を取つて、其の破壞を出來るだけ少ない程度に止めるやう、我々は努力しなければならない。革命に必らず伴隨する社會のキャタストロオフは戰慄す可く恐ろしいものだ。此のキャタストロオフの爲め、革命自身が其の目的を達成することの出來ない場合あるは勿論のこととして、すべての文明と、民族と、國家と、社會とを擧げて壞滅し了るか、或は其のすべてをして漁夫の利に委せしめ、永遠に他の文明と民族と國家と社會との下に屈辱せしめられる運命を見ることがあらう。其れ故に革命は無準備の上に急速に決行せらる可きものでは無い。所謂「涙無き革命」は空語であるにしても、革命の如く愼重に、あらゆる方策を盡した後に選ばれる眞實の一路は無い。革命は聖戰だ。

## 一二 レエニンの演說

革命露國の建設をひとへに其の双肩に擔つて立つたニコライ・レエニンは、一九二二年十一月莫斯科に開かれた共産黨インタアナショナル第四回會議の席上、病後の長演說を試みた。彼の演說の中には、我々により十分に注意せらるべき幾多の發言を含んで居た。私は先づ彼が、世界の共産主義者に忠言を寄せて、今や其の運動の退却方策を賢明に處理す可しと爲したことを重大視する。彼の論ずるところによれば、政治力の把握は、一朝敵の狼狽した虛を衝くに於ては甚だ容易であるが、反革命勢力の反動は非常に優勢であり、或時には敵の陷穽に陷り、終に其の革命運動を無效に歸せしめるに至る。彼は其れを警告して、今や世界の共産主義者に重要なることは、いかに賢明に退却するかの方策であると爲した。世界の列强は內實的には少しも恢復せられて居ず、歐洲生活の混沌は幾度の會議を重ねるも依然たる混沌に止まるが、併し其等の國家が國家としての地位を近き將來には失はないであらうといふことは、殆んど確定せられたかの觀を呈した。今若し世界の一角に資本主義壞滅の爲めの革命を實行したものがあるとすれば、列强は自らの地位を擁護する爲めに、相提携して此の運動の打破に努めるであらう。伊太利にはファスシスト團の反動內閣さへ成立した。國民的保守的運動の傾向は、漸く各國の中に芽出し始めて居る。



今や急速的革命の時代は世界的に過ぎ去つたのだ。此れに處する方策として、レエニンは世界の共産主義者に忠告するに、「十分なる準備の覺悟」を以てするのである。私は此の立論に多大の眞理のあることを認める。我國の革命論者は、徒らに革命の最後方策をのみ論じて現在の地位を忘却しつゝあるのみならず、彼等は本來、さうした漸進的建設的の、殆ど事務的と言つてもよい事業に參加する質實沈着なる性格を缺如するものゝ如くにさへ見えた。

## 一三 革命成功の至難

レエニンが革命直後に他の何よりも苦まされたことは、左翼共産主義者の反對であつた。レエニンは革命後の社會的建設を、革命の勝敗の分岐點と爲すが故に、革命後といへども全然的にプルジョア文化の手より自らを解放しようとは力めなかつた。革命が成功したものは、單に政治力の把握、卽ちプロレタリア國家の建設だけだ。レエニンは其他の點に於ては、寧ろ大いにブルジョア文化の擴大完成を計つた。其の反對側に立つたものは左翼共産主義者である。

露國の如く資本主義の發達の幼稚なるところに於ては、又自然的農業的生産が割合に豐富であり、小工業的生産さへ主としては農民によつて爲され、民衆は低い生活標準に滿足し得る社會に於ては、革命後のキャタストロオフはなほ其れほど甚しい程度に進まないで止まつた。すべての

條件が此れに反し高い程度の文化生活を爲す今日の英、米、佛の諸國に於ては、よし革命は行はれたにせよ、其後のキャタストロオフは、必らずや名狀することの出來ない激しいものであらう。其時まで繼續せられて來たブルジョア文化に對し、新興のプロレタリア文化が直ちに取つて代り得ないことは言ふまでも無いとして、其の程度のブルジョア文化を失ふは直ちに其の生活の不可能を意味するほどに文明化せられた民衆を包容する社會に於て、革命後に其の文化を低下しないで止まらうとするは、實に至難中の至難事であらう。生產の中に占める勞働の地位は割合に輕い。意味の上に於ては、勞働無きところ生產の起り得ないことはいふまでも無く、勞働は生產のアルファにしてオメガであるといつてもよいものであるが、併し現實のブルジョア的生產組織に於ては、勞働は富のすべての源泉で無い。或る人の論ずるところに隨へば、生產は其の九十五パアセントまでを其の共同社會の文化的遺產に負ふといふ。勞働問題の革命的解決は、直ちに社會組織の革命的解決では無い。レエニンが今回の演說中、退却は露國の如く產業的に發達の後れた國に於てよりも、西歐先進國の同志によつて特に熟考せられなければならぬと言明したことには、何等の說明も附せられては居ないけれども、其れは革命後に露國再建設の事業の困難が、彼に敎へた敎訓の告白であつたと、私は考へるのである。回顧すれば、露國の革命が今の如く成功したことは確に一の奇蹟だ。其の革命が成功した樣な、歷史の眞に稀れな機會は、數世紀を閱し



て容易に現はれるものではあるまい。

## 一四　改造方法の第三途

レエニンは其の演說の終りに於て、結局世界的に革命の敎育の必要なることを切言する。敎育は最も基礎的の漸進政策だ。レエニンは、私の考へるところでは、常に其の方策に自然科學者の冷靜と確實さを保持して行くことの出來る徹底的漸進主義者であつた。我國の共產主義者は、其の意味に於て、今後なほ彼れに學ぶ可き甚だ多くの缺陷を自らの上に見出すであらう。

革命は空想的詩人のよき獵場だ。其れ故に革命自身が詩の如く奔放に構想せられることは、敢て珍らしい例では無い。我々は、人間の歷史の上に革命ほど嚴肅な瞬間は無いことを自信して、深く自らの言動に警戒しなければならない。敢て言ふ、革命は詩では無いと。今や世紀は革命の時代を一度經過した。社會主義者に取つてすら、時代は漸進的構成を要求して居るといへる。我國に於て特にさうだ。此時に際し、徒らに寸步の前を望む底の革命語を放言するは、快はいかにも快であるが民衆の生活を眞に愛して居ない仕方だ。此く革命を排斥したにせよ、私は所謂議會主義を漸進方策の全部と考へず、且つ其れへは贊成し得ないものだ。普通選擧を要求しては居るが、よし普通選擧の實現せられた日にも、議會主義にすべてを信賴することは不明の甚だしいも

のだと考へて居る。此くして私は、社會改造の具體的方策としては、世の所謂革命にも贊成しなければ、亦所謂漸進にも左袒しない。私の歩む途は、革命と漸進とに右の批判を加へた後、自づから我々の眼前に展開せられた第三途だ。



# 第十三章　無産者の獨裁

## 一　無産者獨裁の意義

無産者の獨裁は、革命露西亞が標榜した社會改造の方策だ。無産者の獨裁を離れて露國の共産黨無く、共産主義者第三インタァナショナル無く、サヴェエト制度も亦無い。殊に注意す可きは、無産者獨裁とサヴェエト制度との關係だ。兩者の間に密接不離の關係を見る必要は無く、サヴェエト制度は無産者の獨裁と全く別に、當來社會に於ける政治機關の形態を敎へたものであると私は考へるのであるが、併しボリシェヴイキの人達は、兩者の間にさうした分離を置かうとはせず、寧ろサヴェエト制度は無産者獨裁の實行方策として、必然的に生れたものだと考へて居る。

彼等共産主義者の無産者獨裁論は、人も知る如く其の根據をマルクスの「ゴオタ綱領批評」に置く。マルクスに隨へば、資本主義的社會と共産主義的社會との中間には、一より他への革命的轉回の時期があり、其れに對應して亦無産者の政治的革命的獨裁がある。露國の新共産黨宣言も亦明かに此れを公示した如く、其れが機關としての國家は壓迫の爲めの一機關だ。無産者の獨裁と

は、此の無產者國家の機關を通じ、共產主義のより急速的なる實現を期する目的を以て、生產手段を完全に無產者の手中に歸せしめんが爲めに、ブルジョアジイの根本的壞滅を計ることを意味する。所謂形式的デモクラシイを破壞した、形式的獨裁主義なることはいふまでも無い。ボリシェヴィキは、既に徹底的に此の方策を實行し來り、なほ現に實行しつゝあり、更に將來へ一層有效的に此れを實行しようと欲して居る。兎に角彼等は其の方策によつて成功した。露國の革命と巴里コムミュウンを比較し、前者が今の如く成功した所以のものは、全く彼等が十分なる武裝を以て其の獨裁主義を實行し來つたことに歸せらるべきであると、私は信ずる。

## 二　革命と獨裁

勿論無產者の獨裁に對しては、世上既に多くの非難が發せられて居る。或る人は其れが一般に形式的デモクラシイの破壞である點を非難し、我々は革命の如何なる瞬間に於てもデモクラシイの原理を離れてはならないと論じた。我國の所謂有識者の間に瀰漫する批評も、亦概ねは此の意見である樣に見える。併し其の批評は一般の形式的獨裁主義の上へは適用せらる可しとするも、露國の無產者獨裁の上へは適用せられ得ない。言ふまでも無くデモクラシイは、一の動ける精神であり、固定せられた形式では無い。其れ故に一旦此れを固定形式として考へるに於ては、其の



中に排斥す可きブルジョア、デモクラシイを含む。此のものは精神に於て既に眞のデモクラシイでは無い。私は當來社會が民衆のプロレタリア化を目的とするとは考へない。寧ろ其の社會は富に於て十分の充實を持たなければならない。けれどもプロレタリアをブルジョアジイの對概念として考へざるを得ない現代に於ては、我々は當然、民衆のプロレタリア化を資本主義の壞滅であると見、進んでは當來社會實現への缺く可からざる一徑路であると考へなければならぬ。隨つて我々はプロレタリア的デモクラシイを、完全なデモクラシイの精神を實現する爲めの一經過として斷ずるのだ。

革命は力による人格の强制だ。デモクラシイを一の固定形式と考へ、無產者獨裁をデモクラシイの破壞であると言つて非難するものは、其の精神に於て實は革命其のものを否定したのだ。其の論の當否を私は既に前章に論じたから、再び此れに批評を加へようと思はない。何等かの事情の下に革命が容認せられ得る道德的根據を持つとすれば、革命は獨裁の方策下に行はれなければならぬ。形式的にすべての民衆のデモクラシイを容認して置いて、なほ且つ革命が行はれ得ると考へるは一の夢想だ。革命は實に戰ひだ。其れ故に私は露國に於ける無產者獨裁の價値を批評しようとするものに、次の考慮を要求して置きたいと思ふ。

第一に、彼は先づ露國革命の可否如何に對し、豫め其の意見を述べて置かなければならない。

若し其の革命を事情に於て避く可からざるものであると見、且つ此く革命の事業を始めたことには道德的の意義を持つと容認し得たとすれば、彼は當然革命の伴隨的形式としての獨裁を容認す可きであらう。

第二に、我々は特に其の革命が露國に行はれたことを顧慮しなければならない。露國民衆の大部分を占めるものは知識の乏しい農民だ。少數の共產主義者が、比較的教養ある工場勞働者を中心とし革命を起した場合には、其の革命の終極的勝利を得る爲めに、必然の勢ひとして獨裁主義を取らなければならなかつたであらう。然り、ボリシェヴィキは、革命を形式的に成功せしめ、革命後の產業的建設を可成りの程度にまで進達せしめ得た今日に於て、なほ且つ寸毫も其の獨裁主義の壓力を弱めてはならない事情の下に立つて居るのだ。

第三に、獨裁主義は、併しながらデモクラシイに對せしめられての獨裁主義一般では無く、完全なるデモクラシイを目的とし、其れの達成の爲めの獨裁主義であることを、我々は忘る可きでは無い。

## 三　政治運用と獨裁

私は一と先づ、政治機關の形態と、政治運用の方法原理とを區別する。サヴェトと言ひ、議



會といふは政治機關の形態だ。無產者獨裁と言ひ、議會主義と言ひ、又狹義に於て專制主義と言ひ、同じくデモクラシイと言ふは、政治運用の方法原理だ。併し其のすべてを通じ、理想的には、政治形態は、イデエとしてのデモクラシイを實現する爲めのものであり、政治運用の方法原理は、一般的原理としてのデモクラシイを具象化するものでなければいけない。私は今此處に當來社會の政治機關の形態を論じようとは思はない。既に私は本論に於て其の主張を公表して置いた。今は社會改造の方法原理を論じて居るのであるから、政治運用の方法原理として、凡そ獨裁主義が何程の價値を占め得るかを見て行きたい。

## 四　議會主義の中の獨裁

併し議論の仕方としては、私は寧ろ逆の途を取る。そして世の所謂議會主義者に對し、「議會主義の實行は、完全にデモクラシイの精神を實現しつゝあるか」と反問して見たい。私の理解するところでは、議會主義も亦其の實質に於ては、何等獨裁主義以外の精神により支配せられて居るものでは無いのだ。

其の事は既に述べた私の社會論より齎らされた當然の歸結ではあるが、今は其の推論をすべて省略し、一つの實例により、此れが事情を明瞭ならしめよう。私は今、社會へ適用せらる可き一

の政策案を懷抱し、且つ其の政策は私が理想的だと自信する許りで無く、良心的に判斷する多くの有識民衆も亦其れを非常に立派なものだと信じて居たと假定する。しかも其の政策の實行は、一日も忽せにしてはならないものであり、且つ其の實行の機會を失ふに於ては、恢復し得られない損害を其の社會に與へるものであつたとする。議會主義の下に於て我々が取る可き最良の方策は、兎に角此の政策案をして議會を通過せしめることだ。言ひ換へれば、其の政策案實行の勝利を得ることだ。少くも議會制度の社會に於ては、其れ以外の方案は我々に與へられて居ないのだ。

我々は議會成立の根本的順序を追うて考察するであらう。先づ始めに我々は、議會にあつて我々の主張を支持してくれるやうな代議士を選出するに努力しなければならぬ。勿論代議士を選出するものは全體の選擧人であるから、此の代議士を選出し得る爲めには、其の選擧人の中に於て我々の意見を支持するものゝ絶對多數を確保しなければならない。此に於て我々は重要な一問題に打つかつた。目的は我々の政策案の實行だ。然るに其の目的の達成を得んが爲めには、我々は如何にしても民衆の中に於ける其れの贊否の決定力を我々の手中に收めなければならない。此の決定力を掌握する事の出來なかつたときは、卽ち直ちに我々が其の目的の拋棄を宣告せられたときだ。我々は自らの目的の達成に忠實なる限り、あらゆる努力を以て、此の中間目的の達成に



成功しなければならない。

同じ經過は議會の內部に於ても行はれる。我々は議會に於て其の政策案可決の目的を達しようと欲すれば、先づ其の中間的目的として、議會の多數を制し得る實際的決定力を自らの手中に收めなければならない。此の場合にも亦、其の中間目的を達することの失敗は、直ちに全體的目的を達することの失敗を意味する。必然の勢ひとして、議會は其の決定力の掌握を先決問題とし、其れを直接の目的とし、其の目的の爲めに議員をして政黨を組織せしめた。或る政黨が議會に於ける決定權力を自らの手中に收め得たとすれば、其時政黨は、如何なる內容の政策案をも提出して、容易に此れを議決することが出來る。反對黨は、其れ故に議會に於ける活動のあらゆる努力を、現に決定力を掌握しつゝある政黨の結束打破に向けしめる。其の決定力の打破は、卽ち彼等の直接目的達成の第一步であるからだ。

## 五　政治的決定力の爭奪戰

今日の議會に於ける政黨間の論爭が、少しも原理的で無く、全く其の目的を離れた私情を以て爲されつゝあることは、國民衆知の事實だ。何故幾つかの政黨が此の如き私鬪に其の全力を注ぎ、制度としての議會自身を恢復す可からざる腐敗の中に投ずるに至つたか、其の根本的理由を

知らうと思ふものは、其等の制度を離れ凡そ政治の運用は、其の目的を達成する爲めの中間的手段として何の方策の上に其れが全力を注ぐ可きであるかの根本的理論に、主たる注意を向けなければならない。

議會あるところ必らず政黨の組織を見る。議會に於ての勝利は、黨員の多數により決定せられる。如何にして黨員を結束するかは議會に於いて勝利を占めるに重要なる研究問題であり、議會へ提出せられる議案の內容的研究は、すべての議員に必らずしも必要なる任務では無い。議員はたゞ議決の算に入る爲めの議員だ。此れだけの事は議會主義自身が必然的に招く結論だ。故に見よ、現在の議會は議員の絕對多數を占める政黨の獨裁壇場だ。提出せられる議案の內容に關し、幾分でもの知識を持つものは、寥々として數へ得るに過ぎない。議員は國民の選良であると稱しつゝ、今日の如く無識者の選惡を連ねたことは寧ろ珍らしい。議會は政黨の獨裁によつて動き、政黨は首領の獨裁によつて動く。我々は飽くまでも其の實質を檢する。其の形式を云々しようとは欲しない。今日の議會主義が其の實質に於て全然の獨裁主義であることを、其の實質に就き何人か否定し得るものぞ。民衆が議會に失望したのは其の實質に就て失望したのだ。議會に絕對多數を占めつゝある一政黨が、國民の信望未だ自黨を離れずと傲語して居るのは、其の形式的獨裁を誇示して居るのだ。惜むらくは、時代は遷移する。民衆の要望するものは生活の實質であつ



て、抽象的なる形式では無い。

議會は政治機關の形態として既に失敗のものだ。然るに政治運用の方法としての議會主義も亦同樣に失敗のものだ。此處に失敗といふ意は、議會主義は、其れの支持者が豫期するやうな合理的漸進主義では無いといふことだ。

併し審さに考へれば、凡そ政治の運用は、合理的漸進的に動かされ得るや否やは疑問である。政治の運用は、其れの中心動力となる政治力を離れては考へられない。政治力は、其の政策の內容如何に拘らず、此れが採否を決定し得る究極實力だ。其の社會の實際政策は、其の社會の政治的決定力を掌握して居るものゝ意志の儘に動かされる。其の形式はいかにデモクラティックであるにせよ、政治運用の實質は常に獨裁主義其のものだ。又其の決定力を掌握して居ないものは、其の努力を既に存する政治的決定力の打破に向ける。其れが政治運動の實質のすべてだ。政權の爭奪は政治への必然的なる附き物だ。政策の內容を詳密に研究することは、如何なる時代の政治にあつても輕視せられる。

政治運用の方法的原理は、此くして一般に獨裁主義だ。其れはひとり議會主義に固有の現象では無い。今革命露西亞が公然と獨裁主義を標榜したにしても、議會主義者は此れを非難する資格を持つては居ない。露國の共產黨が實質に於て獨裁的なると全く同じ程度に於て、世界の政黨の

あらゆる自由派は其の實質に於て獨裁的だ。

## 六　革命の過渡期と獨裁

勿論私は獨裁主義を政治運用の理想態だとして讃美するのでは無い。精神に於てのデモクラシイが合理的漸進的なる如くに、形式に於ての議會主義が合理的漸進的なることは、私の希求して已まぬところだ。すべての人間が其の性情を理想的に改變せしめ終つた後ならば、我々は理想的の議會主義を運用し得る希望を十分に持つ。たゞ我々の考へねばならぬ人間は、根本的變化を其の性情の上に加へて居ない現實の其等なることを忘れてならない。議會にあつて今の如く墮落の極に沈淪する其の議員、常に私情を以て公的政黨の去就を決定する其の政黨幹部、此くの如く腐敗した議員に愛想も盡かさないで其の再選に肯んじて悔いない其の選擧人を包括した、現實の民衆を、政治は對象とするのだ。我々は無下に獨裁主義を排斥することが出來ない。一般に獨裁主義已むを得ずとすれば、我々に與へられた宿題は、其の獨裁主義に伴隨する弊害を出來るだけ輕くする何等かの方策を別に講ずることだ。

無產者の獨裁は革命の過渡期にあつての政治樣式であると露國革命の幹部は言つて居る。其の理論には十分の眞理が潜むと思ふ。革命は政治力の中心が甲より乙に遷移することだ。其は卽ち



革命が武裝を要する一の戰ひなる所以の根據だ。革命自身は人格の他律的强制だ。獨裁無しに革命の行はれ得る道理は無い。殊に革命は、其の當初少數の自覺者を編制して大衆の無自覺者に對抗する。少數が大衆を破り得る方法は獨裁の外に無い。一旦革命を起した以上、革命者に取り第一の目標は、兎に角其の革命に勝利を得ることだ。革命の理由が理想的に容認せられ得るものならば、彼は此の目標を失はないことに、あらゆる理想主義的心熱を體感しなければならぬ。革命は舊組織と新組織との岐路に立つ。其の岐路の標識こそは正に死と生とだ。我々は斷じて其の生の途を擇ばなければならぬ。此かる場合に獨裁は全く不可避でもあれば、又同時に當然の方策でもある。少數者獨裁は、よし人格の他律的支配であるとは言ふものゝ、其の革命が道德的に許容せられ得るものなる限り、革命時にあつては當然道德的に容認せられ、淨化せられると私は信ずる。私は徹底的の平和主義者だ。理想主義者だ。戰ひは悅んで自ら擇ぶ途では無い。併し社會は單なる觀念では無く、正しく動ける現實だ。現實の歷史的威力は、我々の觀念的豫測を突破して進む。其處には戰ひすら避く可からざる歷史の機會として我々の上に臨む。我々は斷じて戰はなければならぬ。此の場合、單に抽象的なる平和主義の形骸に固執して、實現せらる可き理想を失墜するものありとすれば、私は當然彼の道德觀の機械的であり、法則的であることを攻擊しなければならぬ。理想主義は直ちに不戰主義では無い。

## 七　理想と過渡期の意義

革命は確に一の過渡期だ。そして過渡期の政治方法を支配する精神が獨裁主義なることには、道德的の根據さへ與へられ得る。其の場合には、デモクラシイの破壞は却てデモクラシイの遠い目的に一致するのだ。併し其の所謂過渡期は、一體どれだけの期間を意味する積もりか。ボリシェヴィキの幹部達は、また我國に於けるボリシェヴィズムの支持者達は、其の場合に、理想とユウトピアとを混想して居はしないか。私は其れに疑問を懷かざるを得ない。彼等は單に政治的形式に就き、また經濟的內容に就き、歷史の一定點に理想社會を考へて居るのであるか。資本主義が壞敗して共產主義的社會組織が形成せられることは、歷史の一定點に於て或は略々豫想せられ得るかも知れない。若し其れを理想社會と呼ぶのであれば、理想社會は確に現實化せしめられ得る。現に露國が無產者國家を組織したことは、其の理想社會へ到達する爲めの一歩であると言へよう。けれども人生の諸樣相は相互密接に聯關し、政治は宗敎を反映し、經濟は道德と照應する。政治だけが、また經濟だけが理想的となり、宗敎や、道德やは理想的になつて居ないといふ場合はあり得ない。勿論其れは逆に、宗敎や道德の立場に立ち、政治や經濟を望んでも言ひ得ることなのだ。然らば政治や經濟の世界が理想的となり得、又其の理想態を繼續し得る爲めには、



其他の文化生活が等しく理想的となり、また其の理想態を繼續しなければならぬ。言ひ換へれば、我々の生活全體が理想態とならなければならぬ。併し其れは永遠の努力を以てして現實的には不可能のことだ。現實的に考へられ得る理想社會は、要するに理想では無くしてユウトピアだ。知的空想の產物だ。人道の永遠的追求に其の精進の心熱を與へ得るイデエでは無い。

若し理想とユウトピアとの間に、右の如く截然たる區別のあるものとすれば、理想を追求するすべての經過を指して我々は此れを過渡期と呼び得るか。言ひ換へれば、人生のすべての歩みを稱して過渡期と爲し得るか。其れは概念の使ひ方の巧みなものだと思へない。過渡期とは、さうした歷史の全經過に就き、或る中間的目的と、其れへまで餘り多くの間隔を置いて居ない現實との間に成立する、其の割合に短時期なる經過を意味するのでは無いか。革命は其の一例だ。其の意味の過渡期にあつてこそ、獨裁は道德的にも容認せられ得る。理想と混想せられたユウトピアへの過渡期に獨裁を取るは、結局永遠の人生經過に獨裁を取る事だ。獨裁は單に獨裁を生む。其の中より何等の飛躍もまた創意も生れ出ではしない。此の場合に依然として獨裁主義の取られて居ることを容認し得べき道德的根據なるものは無いのである。

## 八　獨裁主義の弊を救ふ途

其れ故に私は、革命の露西亞が何時まで其の獨裁主義を形式的にも實質的にも支持して行くかを興味深く眺めて居るものである。革命後の露國は確に獨裁を必要とした。私は其れを十分に容認する。經濟的建設の事業が其の第一歩を始め出した現在も亦確に或る程度まで獨裁を必要とする。私は其れをも十分に容認しようと思ふ。たゞ我々は、此の獨裁政治の中にあつて革命勞働者自身が今や其の創意心の傷害を訴へ始めたことに深き注意を拂ひたい。獨裁主義は政治運用の永遠的精神ではあり得ない。勞農露國の幹部は、今後果して何れの方面に其の政策を進めようとするか。

私は從來無產者の獨裁に對し、幾度と無き分析や批評を試みて來た。其れ故本論に於ては、餘り詳しい論評を書かうとは思はない。要約して次の如く言つて置かう。私は革命の過渡期に於ける獨裁主義を、道德的にも正當だと信ずる。永遠の政治的精神としては、獨裁主義は多くの價値を持ち得ない。併し實際に政治が運用せられる場合には、我々の政治はいかにするも獨裁主義の色彩を離れ得ない。其れ故に合理的漸進的であると信ぜられつゝある議會自身すら、其の實質は獨裁主義以外のものでは無い。右の如くにして我々の政治の實際的運用は、よし其の價値乏しきものであるにせよ、多少に拘らず獨裁主義を離れ得ないものとすれば、我々は何等かの方策を以て其の結果の弊を打破するに努めなければなるまい。此の場合に、民衆敎化の方法を持ち出すこ



とは適當して居ない。敎化はあらゆる場合に甚だ重要なる方策であり、且つ其れは方策以外の自律的目的を持つたものではあるが、今の場合には、民衆を現實の敎養に止めてなほ且つ有效に作用し得る底の方策でなければならぬ。卽ち其の方策は一の精神であり、敎養である許りでは無く、直ちに客觀的の組織であり、形態でなければならぬ。方法の問題は一轉して組織の問題に歸つたのだ。

凡そ獨裁主義が生活に傷害を與へる所以のものは、其れが生活の飛躍と創意とを害することだ。獨裁主義は政治に於ける一の方法的精神なるが故に、我々の政治生活を傷害するといふに止まらず、直ちに我々の藝術、科學、道德等のあらゆる文化生活を傷害するものだ。其の弊害は、獨裁政治の行はれる政治範圍が廣汎なるほど甚しい。蓋し其處にあつては、獨裁政治は最も强い程度の集中主義に伴はれるが故だ。此に於てか獨裁主義は地方主義と結婚しなければならぬ。獨裁主義と地方主義との結合を客觀的形態と爲すものは、社會改造の道程上に常に必要とせられて居る。

# 第十四章　政治運動と直接行動

## 一　改造方策の第三途と現實

改造方策に於ける革命と漸進とをあらゆる方面より解剖し、更に無產者獨裁の方策を檢討した結果、我々は亦其等の中から多くの有益なる暗示を與へられた。私は今所謂革命と所謂漸進の何れにも左袒せず、寧ろ其の兩者を止揚しての第三途、獨裁主義の弊を救ひ、此れを地方主義と結婚せしめた改造方策の統一態を展開す可き適當の場所に到達したのである。我々は先づ我々の取るあらゆる方法規準に於て、次の二點を其れの根本條件と爲す。其れの理論基礎は、從來本論の中で幾度と無く繰返された。

第一、我々の生活とは、現實の其の生活を外にしての何物でも無い。我々の環境、我々の實現資料は、今、此處に、我々が經驗しつゝある其の物だ。其れ故に我々の改造方策は、其の現實の環境、現實の實現資料を材料とし、手段としなければならぬ。我々は、勞農露國の改造方策を問題にするのでは無く、今日、此の社會の其れを考察しつゝあるのだ。我々は、議會主義が廢棄せら



れ、其れの代替機關の構成せられた將來の一時期を觀察の主題とはしない。現實はたゞ與へられた、より適當に言へば自己の開拓した、現實眼前の歷史的事實の外には無い。其れ故に私は、理想としては云々の方策が最適であるとは言はない。此の場合の理想とは、實は現實的歷史的條件を無視しようといふことだ。又私は、より理想的なる自己の方策を適用するに適當なる時期の到來するまでは、すべての改造方策を考へず、現實を廻避しようとする休戰的態度にも贊成しない。我々は現實を理想的に生きなければならぬ。其れは人間としての一つの最も大いなる義務だ。理想實現を逃避するを得る瞬間は、死の外には、少くも我々の生活上に求めらるべくも無い。

然るに此の二つの嫌忌す可き態度は、我々の周圍の社會主義者に甚だ珍らしく無い其等だ。彼等は一般に社會革命の理論、ボリシェヴィズムの其れを熱心に考察するが、其れと我國の現實との關係を求めようとはしない。ボリシェヴィズムの日本化を主張する評論が、漸く近年現はれ出したことは、其の實際的效果の問題を外にして、兎に角彼等も亦其の態度の無意義なることに氣附き始めた一の證跡であらう。又彼等は現實の國家、議會、政治、政黨等の改造を議するものをすべて侮蔑し、其等の論者は既に現實の社會構成を許容して居るかの樣に批評しながら、其の半面に於て何等の建設的意見を公表しようともしなかつた。併し其れも亦最近には幾分緩和せら

れ、社會主義運動の方向轉換の必要を論ずるものさへ現はれるに至り、其の主張は世の多くの注意を惹いたが、私は社會主義のさうした現實化は、今後一層盛んになる可き形勢であると考へる。

第二、我々の理想的生活は、現實其のものゝ理想的生活だ。ジムメルも言つた。我々の人格がすべて目的として取扱はる可く手段として取扱はる可きで無いとすれば、我々の歴史的生活のすべての部分に就て、同じ事が言はれなければならぬと。我々の生活は、其の如何なる瞬間といへども無意義に經過してはならぬ。其の生活意義は、より大いなる歴史的生活意義の中の一系列として、何等の矛盾をも自らの中に認めない許りでは無く、其の生活意義自身を以て亦同樣に自律しなければならぬ。一瞬間の生活は、他瞬間の其れの手段に供せられてはならず、又後者により他律せられてはならぬ。其の手段は神聖であれとは、我々の生活の中に、實は何等の手段も含まれず、其等はすべて生活の目的系列なることを言つたものであらう。其れ故に我々の理想社會は、事實的には歴史的現實其のものゝ意義化だ。最高可能度の人格化だ。其の意義化、人格化は、其の歴史を離れて價値的に批評せられるときには、一より他への進歩高上が認められるかも知れない。併し其の何れの瞬間も、其れの環境と、其れの人格的努力との對せられた結果として、最理想的に生きて居なかつたと評價せられたくは無いものである。無產者獨裁論の非難せらる可き理論基礎の根本は其處にあるのだ。繰返して言ふ。我々はユウトピアと理想とを混想す可きでは



無い。

## 二　現在の議會と政界革新

改造方策として最初に問題となるのは、政治運動の可否如何だ。舊式政治家、評論家は、元より此れを問題にしない。此れを問題にするのが、寧ろ彼等に取つては不思議なのだ。現代の政治運動がどれだけ腐敗したものであるかの感覺を、彼等は持つて居ないからだ。ブルジョア、リベラリズムの政治家、評論家は、よし現在の腐敗した議會は排斥せらる可しとしても、議會其のもの、政治運動其のものは排棄せらる可きでは無いと主張する。其の腐敗の實質は、大いなる部分に於て、其の形式自身の產出したものだといふことを考へないからの樂天主義だ。今や勞働組合主義者、社會運動家の間に、改造方策として政治運動を取ることの可否が論せられつゝあるは、當然の形勢といはる可きだ。私の方策論も亦、其の問題を看過することが出來ない。

政治運動とは抑も何を意味するか。政治運動は卽ち議會主義であるか。私は必ずしも兩者を同一視するものでは無いが、今は問題を局限して、假りに政治運動は卽ち議會主義であるとし、我々當面の改造方策に議會主義を取ることの可否を考へて見よう。當來の立法機關として、議會制度は優秀なる組織で無いことを私は既に論じた。又議會主義は漸進方策で無く、其の中に必然的

に獨裁形態を含むことをも既に論じて置いた。其れ故に制度としての議會、方策としての議會主義は、共に私の取るところで無い。況んや現在我國の實質的に腐敗した議會に對しては、何の希望を置かうとも思つては居ない。併し其の議會は現に我々の環境だ。私は其れに對していかなる方策を取らうとするか。

第一に、我々は現在我國の政界を革新する目的を以て、新人を議會に送り、又は新人自ら議會に現はれようと努力するは無效であると思ふ。現在の議會と議員とは、其の腐敗を行きつく處まで徹底せしめるがよい。此の中へ立ち交つて種々の運動を續けることは、全然我々の勢力の濫費だ。我々は其の勢力を他の改造方策の上に傾注するがよい。のみならず、長く此の議會の中にあつて戰ふ時には、其の結果として、やはり既成政黨に對する濃厚なる好惡感情を釀成し、知らず識らず自らも亦狂人を追うて舞踏する一人になるを常とする。現に革新倶樂部、無所屬の一部にあつて割合に新しい意見を持ち出しつゝある所謂議會の新人なども、年を經るに隨ひ、やはり一個の黨人としての感情を持つに至つたことを否定し難い。人間は理論だけで終始しない。感情の交雜は、あらゆる事件、あらゆる批判の背景力となる。其れ故に私は思ふ。新人政黨が眞に政界を革新しようと志したとすれば、須らく其の運動の主力を地方青年の敎化に置き、議會內での活動を第三義、第四義とするがよい。地方青年は、政友會憲政會を云々したいと思つては居ない。



何故ならば彼等は其等すべての政黨に對し何等好惡の感情を持たず、たゞ現在の政黨と議員とは革新倶樂部に屬する其等に至るまで、自らに益する處は無いと考へつゝあるからだ。革新者は、根本的に其の出發點から出直さなければならぬ。

## 三　選擧運動と無產者

第二に、併し我々が選擧を爭ふのは惡いことでは無い。寧ろ我々は進んで選擧を爭はなければならぬ。それに對して默殺政策を取ることは賢い仕方では無い。今日アナアキズムに關係の多い勞働組合、我國勞働組合の凡そ半數は、すべて議會運動に加擔することを勢力の濫費であるとし、且つ其の運動に加はることによつて、或は過去の政黨に利用せられ、或は組合員の心理を不純にすることあるに至るを惧れて、議會運動のみならず、一般の政治運動に加盟しないことを公然と標榜して居る。此れに反し、ボリシェヴィズムに關係の多い他の一半の勞働組合は、政治運動を排斥しない許りでは無く、議會運動をすら排斥しようとはせず、其の政治運動の意味は、現在の政治運動を破壞する爲めの政治運動であることに置かれねばならぬとするものゝ如くだ。私自身は、從來は寧ろ前者の傾向に傾いて居た。併し今は必ずしも議會運動自身を排棄しようとは思はず、進んで選擧を爭はうとさへ欲する。蓋し民衆の政治的意識は最早其點にまで達したのであ

る。

然らば我々は、何故今日の議會運動の選擧を爭はうと欲するか。其れにより我々無產者の鬪爭心と團結心とを高めることが出來るからだ。默殺政策によつては、其の集團意識を强めることが出來ぬ。併し勿論我々は、既成政黨に屬する某々候補者を支持するのでは無く、又既成政黨自身と對抗しようとも思はない。よし彼等候補者が、無產者に利する立場に立つて居る場合でさへも、我々は彼等を支持しようと思はない。我々は民衆の中から根本的に出發するのだ。我々の候補者は、既成政黨に何等の關係無き、我々自身の同志でなければならぬ。よし其の選擧は破れてもよい。覺醒した無產者の投票はどれほど集まるか。今日の勞働組合の實力を以てしては、社會に相當のシ■ックを與へる票數を集め得ると私は信ずる。其の運動に我々の鬪爭力のすべてを費すのでは無い。此の方策を取る事も亦決して不利なるものでは無いといふのだ。

若し此の運動により、幸ひに數名かの無產者代議士を得ることが出來たとする。然る時には、此の代議士は議會に於て無產者の立場の意見を陳述してもよいことだ。既成政黨と問題の實際的解決を爭ふのでは無い。其等の政黨とは面目を一新した要求を、議會に於て表明すれば其れでよいのだ。勝敗は我々の眼中に無い。すべて其等は、無產者運動の宣傳力を强める所以だ。

無產者の中から選出せられた代議士の數が相當に增加するまでは、我々は既成の政黨に宣戰しようと欲しない。我々は選擧を爭ふが議會の問題を戰はない。議會に於て意見を開陳するが、其れは宣傳以上の目的を持たない。其の方策の細目は時に臨んで定めらる可きだ。愛蘭のシンフェーン黨は對議會策として、我々と同じい方策を取り、熱烈火の如き選擧運動を續けて來たことは、既に世人の熟知する處だ。

我々の運動は、すべて少數の純粹者を根據とし、其れの理想的擴充を計るにある。

## 四　普通選擧の價値

第三に、然らば我々は、普通選擧に對して如何なる見方を取るか。

普通選擧が實現せられたからといつて、其時から理想的の議會政治が始まると、私は考へない。理想的の立法機關形態及び選擧樣式を私は先きに記述して置いたが、此れに普通選擧及び其の上に立つ議會政治を對せしめれば、後者は制限選擧及び其上に立つ議會政治よりも、より一步我々の理想態に近づいたと言はる可きものでは無い。我々の其れと、普通選擧制議會政治との間には、全く質の上の溝渠がある。普通選擧制は、同時に機能的の其れでなければならぬ。議會制度は私の所謂執行機關に轉化しなければならぬ。普通選擧と制限選擧とは、單に選擧人の人員數の相違に過ぎず、等しく我々の問題と關與するところがない。

理論的に然るのみならず、我國の全民衆の政治的良心を現實的に考察するときには、普通選擧になつたからといつて、其時から直ちに政治は、選擧は、理想的のものへ移りさうに無い。寧ろ一時は現在以上の混亂をさへ招致するであらうと信ずる。既成の政黨によつて毒された民衆の政治的腐敗は、一普通選擧によつて癒さるゝには其の程度は餘りに深い。

併し兎に角私は、普通選擧制は制限選擧制よりも、よりよい制度であることを認めるに吝かでは無い。現在制度の議會主義は、其時一先づ形式的の完成を示す。其れによつても議會の腐敗は依然たるものであつたとすれば、其時民衆は始めて全體的に議會主義其のものゝ價値を疑ひ出すに相違無い。現在の議會は排斥せらる可しとするも議會主義なる形式は排斥せらる可きで無いと論ずる新聞の評論家は、其時始めて形式としての議會主義其のものが本來腐敗の原因を其の形式の中に含んで居た實證を觀察し出すに相違無い。其時の一日も早く到來することを私は望む。普通選擧其のものに多くの期待は無い。其れに伴隨する時代的動搖と民衆の政治的失望感は、より新らしい政治形式を生むに十分の資料だ。動力だ。私は其の時代の到來に多くの期待を投げる。其れ故に私は一個の普選促進主義者であり、其の運動に出來るだけの力を盡して來たものである。

要約するに私は、現在の議會に對し何等かの方策を取ることを全然の愚擧とは信じない。現



在の議會主義を對手にしたから、其れはブルジョア、リベラリズムであると斷定するは、其の外形を見て其の意義を解しない仕方だ。議會主義を闘ひ議會運動を爭ふが故に議會を許し、隨つて議會制度の立脚する資本主義的社會を許したとは言へない事だ。其れと同じい場合は我々の勞働運動の上にもある。我々は賃銀制度其のものを不合理的であるとする。其の制度の廢止は勞働運動の最終眼目である。賃銀値上、勞働條件改善は運動の眼目では無く、本質的に其等は却て不純のものだ。何故なれば其れは賃銀制度其のものゝ前提の上に立つて居るから。併しながら我々の現實の勞働運動は、依然として賃銀値上、勞働條件改善を方策として取る。失業者頻出の場合には、雇傭主に對し勞働者を解雇しないやうに要求する。其等はすべて不純の勞働運動であるか。斷じてさうでは無い。其等の運動を非難するものは、實行力無き一個のセンチメンタリストたるに過ぎぬ。そしてユウトピアを何處かに幻視するものだ。現實は常に何等かの點に於て理想的では無く、又我々の理想化の努力は、如何にするも理想化せられない部分を其處に殘す。併し其れあるが故に人生は「妥協」では無いのだ。我々は「妥協」の爲めに議會運動に加はらうとするのでは無い。

## 五　背景としての直接行動

政治運動は議會主義と同視せられない。我々の生活が政治的價値により導かれた時、それはすべて政治的文化生活だ。議會主義はその中の僅かに一部だ。政治生活は文化生活の一樣態であり、議會主義は政治生活の一樣態だ。議會主義は滅亡しても政治生活は永遠に滅亡しない。議會主義は存續しても、議會主義以外により廣汎なる政治生活がある。私は既に議會運動への對策を論じたから、此れと並行す可き其れ以外の政治運動の樣式を幾つか主張して置かう。

第一に、我々は現在の議會の腐敗、議會制度自身の含む論理的矛盾を民衆の間に宣傳しなければならぬ。其れは政治運動として最も根本的のものだ。其れの結果は、現在の政治運動其のものゝ上に反應を與へる。意義としては敎化運動であるが反應としては一の政治運動だ。

第二に、議會主義を介し、資本家階級が直接的に我々無產者の階級に挑戰した場合、我々は進んで其の挑戰に應じ、或は其の挑戰に先んじて敵の氣勢を挫く方策を取ることに勇敢でなければならぬ。其れをも我々は默殺して置いてよいと主張するものもあるが、私は其の默殺が、結局は大いなる損害を我々の上へ與へるに至ると觀察する。此の政治運動の適例は嘗て過激思想取締法案等に對し、我々が激烈なる反對運動を續けたのが其れだ。

然らば此の挑戰に對して民衆は如何なる手段を取るかと言へば、勿論直接行動だ。直接行動は、我國に於ては全然誤つた意義に理解せられて居ることを、私は從來幾度と無く注意して來て居る



が、正しい意味の直接行動は、議會主義的ラショナリズムの手段に依らず、民衆の意志を直接に表現する非議會主義的イラショナリズム又は行動主義の手段を取る事だ。直接行動は、非合理的ではあるが不法的では無い。議會主義に對抗する民衆運動の手段は、其の意味の直接行動でなければならぬ。例へば過激思想取締法案を葬つたものは、民衆の大衆運動であつた。民衆の此の實力表示無ければ、政府は元より其の法案を議會へ提出したに相違無い。また特殊部落の改善問題は、此れを議會の議員の手に放任して置けば、永遠に方策の講ぜられる時無く、百年河清を待つの嘆を發す可きであつた。一朝水平社の集團運動、卽ち正しい意味の直接行動が發達し、議會に依らず、十分に其の實力を表示するを得るに至つたときに、議會は早急に其の運動の精神を容認しなければならぬことゝなつた。すべて議會主義の背景には、此の意味の直接行動が地位を占めて居なければならぬことだ。卽ちラショナリズムの形式固定を流動化せしめるイラショナリズムの哲學が高い意義を持つ所以だ。

勞働組合運動も亦此の種の行動の一つだ。其れに就ては私はなほ後に述べる。我々の利害と關係の無い議會の政治問題に對しては、我々は全然の默殺政策を取る。

第三に、其他の改造運動は、自づから其の表現を我々の政治生活の上に及ぼす。

## 六　政治運動の兩端

我々の取る政治運動は概ね右に述べるところのものだ。此處に注意す可きは、政治運動は、政治運動なるが故に直接的に政治力の把握を目的とし、其れに向つて動くものだと論ずるは、一の謬論に過ぎないことだ。勞働組合主義者の中で、あらゆる政治運動を排斥するものゝ取る議論に其の傾向を含むから、私は此れを一言するのだ。直接的に政治力を把握する爲めに議會運動に加はることには、私自身贊成しない。其れは却つて社會の改造を後らす。其れ故に私は先づボリシェヴィズムの如く、急激的革命の方法によつて直接的に政治力を把握した政治運動には反對する。其の理由は前に詳しく論じた。次に英國の勞働黨の如くに、永久に議會主義を取り、議會主義の中にあつても無產者政策を繼續する政治運動にも反對する。ラシヨナリズムの背景を構成す可き直接行動の力弱く、其の手段によつての改造も亦甚だ長き期間を要するが故だ。英國勞働黨があれだけの勝利を占めたことの理由は、勿論其の大部分に於て時勢の變轉と勞働者の自覺に歸せらる可きではあるが、併し我々は他面に於てロイド・ジヨオジ氏の失脚した偶然的事情が、大いに勞働黨に利した事を忘れてはならない。議會政策による勞働黨の發達は、常に英國勞働黨の其れの如くになり得ると考へたとすれば、其れは全然の誤謬だ。



要するに我々は議會運動、並びに其他の政治運動を廢棄す可きでは無い。其の運動の形態は、私が今述べて來た其等でなければならぬ。そして政治運動は、其の範圍以上に進められ又は範圍以下に下されてはならぬ。深く考へれば、右に述べた政治運動の如きも、私が次に主張しようとする積極的の方策に對比せしめられゝば、其れの效果をより急速に、より的確に發揮しようが爲めの保護的政策、又は消極的方策たるの意義をしか持たないのだ。併し其の限りに於ては、政治運動は十分に自らの威力を發揮することが出來る。我々無產者は先づ政治運動に於て團結しなければならない。

# 第十五章　實際的綱領の建設

## 一　現實と典型的社會

唯物史觀に立脚する社會主義は唯理論だ。其れに對するアナアキズムは經驗論だ。社會主義から分枝した國家社會主義、無產者獨裁のボリシェヴィズムは唯理論だ。其れを排擊するサンディカリズムは經驗論だ。議會主義は唯理論直接行動論は經驗論だ。批判哲學は、常に唯理論と經驗論とへの第三途を行く。私の改造方策も亦隨つて其の批判哲學の根本基礎の上に立たなければならぬ。方策の規準として私の取つたものは次の數箇條である。

第一に、我々は直ちに現實の中に、理想とする社會に最も近いものを建設し、其の中に生きつゝ進まねばならぬ。其事の理由を私は幾度と無く述べて來た。特に此事を主張する所以は、ボリシェヴィズムを我國の改造方策として取るものに反對する爲めだ。ボリシェヴィキは、理想とユウトピアとを混想したから、現實の全生活を犧牲とし、ひたすら幻想の理想社會を地上に建設することへ急いで居る。併し現實が全部的に理想化せられるとは、現實に歷史が無くなることだ。



經濟的生活だけの理想態を考へても其事は言ひ得られる。マルクスの唯物史觀說にあつても、共產主義的社會の現出した後の經濟的歷史、唯物的歷史が何であるかは問題だ。結局我々は、現實にあつて最高度の理想化を計らなければならぬ。ボリシェヴィキは、幻想的理想社會の爲めに、現實の全歷史的連續を獨裁主義の支配下に置く。勿論さうした方策により、現實の物質的享受は減じたにせよ、精神的意義はより高く發揮せられたとすれば、私は其の生活の價値を低く評價するものでは無いが、彼等の場合には、「過渡期」なる名目の下に、現實のあらゆる生活意義を其の幻想的理想の祭壇へ犧牲として供し、悔ゆるところが無い。人間の歷史を動かす力の中に最も根本的なるものは、人間の懷抱する人生觀であると思ふ。人生觀は、突如としては變化せしめられない。人間の意志を動かすに、長い時期の敎養を必要とする所以だ。獨裁主義は、政治的には、又經濟的には、いかに多くの價値を擔ふにしても、人生觀としては其間に獨裁に特有なる英雄主義や、奴隷心やを養ふ。獨裁主義の完成したときは、卽ち直ちに共產主義制の達成せられたときだとボリシェヴィキはいふが、其れは人間の內面性を見ない觀察だ。英雄主義や奴隷心やの頂點に、人生觀としての共產主義は宿り得ない。此れに反して私は、理想社會の組成員たり得る素質を現に、次第に、我々の社會の中に敎養して行きたい。後にもいふ事であるが、勞働組合は一の經濟的運動として、自らの利益を主張し得る爲めの機關として見られる外に、寧ろ其れよりは重要な

る要素として、理想社會の道德を、社會連帶を、今現に典型的小社會の中で經驗して行く爲めの其の一機會として見られなければならぬと思ふ。改造は外形的では無く、內面的でなければならぬ。形態の機械的變容は、其の形態の根基となる有機的要求を產み出す原因とはならぬ。

此點に就て、は、我國、では ボリシェヴィキはすべて誤まり、却てアナアキストは正しい見解に達して居る。勞働組合の中央集權主義と自由聯合主義とが爭つた時に、後者に屬する正信會信友會の有志の名で發表せられた或るパンフレットは、「我々は理想する社會の芽生えを、先づ我々の中に造つて行くことが何よりも必要だ」なる言葉を以て結んであつた。私も亦其れに同意するものである。そして此の見解の相違が、改造方策の上に融和し難い二つの途を創る。

## 二　社會構成原理への順應

第二に、我々の方策は社會構成の原理に適應するものとなる事が必要だ。方策が理想に照應す可きは勿論であるが、併し方策は其の理想の形式原理と、現實との結び付いたものだ。現實は現實としての構成原理を持つ。其の構成原理を無視して働らくことは理想に許されて居ない。例へば我々は、化學や生物學の法則に反對して、現實を改容することを爲し得ない。同樣にして理想主義による社會改造は、社會の存在的構成原理を無視することが出來ない。寧ろ其の構成原理、言



ひ換へれば、社會の木理を利用して、我々の彫刻は創作せられるのだ。

然らば其の所謂社會構成の原理とは何か。私が前に論じた複合的、多元的社會構成論が卽ち其れだ。複合的社會觀は社會の當爲原理では無く、其れの存在原理だ。多少でも其の原理に背反したやうな現象が社會の中に行はれて居るとすれば、其の原理の自己主張力は社會の該現象を壓倒して進む。結局我々は社會の構成原理に屈服せざるを得なくなる。

併し其の構成原理をよく利用すれば、理想社會は其の原理の末端に豫想し得られることは、私が前に論じた通りだ。一元的社會は多元的社會となる。多元的社會の構成がより複合的となり、小宇宙は個人自身と一致したとすれば、小宇宙と大宇宙との區別も亦撤回せられ、社會は言はゞ無元的のバアソナル、アナアキイとなる。集中主義は地方主義へ、英雄主義は自律主義へ、一元的國家至上主義は多元的社會自治主義へ移る。此の社會變化は、直ちに社會構成の原理を利用した進みだ。然るに無產者獨裁主義にあつては、强勢なる權力の强制により、多元的社會は一元的國家へ進み、其の發達の頂點は無元的アナアキズムになるといふ。社會の構成原理を無視した發達順序だ。失敗に歸せざるを得ない。現に勞農政府は、其の構成原理より來る抗爭を幾度と無く經驗し、次第に其れと妥協して進む。我々は最初より其の進み方を取らない。

此くして我々の改造方策は、複合的多元的でなければならぬ。全社會を擧げて一の方策の支配

下に置く事は不可能だ。我々の方策は、民衆の如何なる小群からでも始まる。併し其の代りに、其の小群の間だけでは、其の集團(聯合體)を成立せしめる要求は單一化せられて居る。其の要求の複雜なる限り、いかに小なる集團も、構成原理に隨ひ、複合する要求の數だけに分裂せざるを得ないからだ。我々は又其等の小集團を、强ひて一つの當爲原理の統制下に置くことを必要としない。强制はあらゆる不德の中の最大のものだ。殊に人間の要求を强制することは、人間の社會に全然の不可能事だ。我々の方策の基礎となるものは、小集團自身の要求である。其等の集團を一の當爲原理の統制下に置くは、結局社會の構成原理と對抗することだ。小集團は自らの理想的、人格的發達により、其中より一の當爲原理を創出する。其れが自由に聯合し、更に其の聯合の上に訓練を加へたものは、小集團の複合自身の統制原理となるであらう。すべて其等の理想的なる進みに動力となるものは、他の權力よりの强制では無く、小集團を組成する個人の創意心だ。

併し勿論、其の創意心を民衆の中に喚び覺ます働らきは、今言つたことの補充として必要になる。其れが敎化運動だ。改造方策は根本的には一の敎化方策だ。

## 三　直接行動と分離主義



第四に、我々の方策は、唯理的、形式的なる政治的議會主義を主とせず、不合理的、實質的なる直接行動に、より多く信賴する。

複合的多元的の小集團は、自らの創意を以て其の集團の實質的なる構成を進める。其れは現行の法律と及び現在の社會制度の下に於て、合法的に爲され得る。其の小集團が次第によく構成せられ、小集團は其の相互の間に自由なる聯合を形成したとすれば、其れは現實の中に理想社會の典型を作つたのだ。社會の外面的形式は如何にもあれ、我々は現實に於て、實質的に理想社會を克ち得たのだ。

第五に、我々の方策は、現制度下、現行法律下にあつての理想的構成を出來るだけ遙かなる程度に進めることを其の原則とする。革命は歡び迎へられてならない。其れは理想の運命的危機に際會して、斷乎たる救濟の奇策を取ることだ。革命が齎らす社會文化の壞滅は、常に革命者の豫想する以上に大いなる程度のものだ。其れ故に我々は、出來得る限り其の革命の途を避ける。或は全然的に其の途は避け得られるものだ。此れに代るものは、我々の直接行動による社會の實質的理想的構成だ。外形を內面より占領する仕方だ。舊囊を新酒により廢棄する方策だ。

第六に、我々の方策は、人生觀的に一致し難い人達、言ひ換へれば要求の根本を異らしめる人達と協同して、其の事業を進めるものでは無い。我々は我々と要求や、利害や、理想を同じく

する人達だけと協同純粋の途を進む。

此く言へば私は、人間の教化の可能を疑ふものとも見られよう。そして理想主義の實現力自身を限定するものとさへ考へられるかも知れぬ。併し私は勿論根本的には、理想主義の實現力を無限に信頼するものである。たゞ現實を動かす教化の效力性を考へるが故に、此の分離主義を取るのだ。深く考へれば、理想主義の理論自身が分離主義の上に立つ。理想主義は、價値に關しての相對主義や懷疑論と同じ水準に立ち、其等を包容して自らの主張を建設しようとはしない。理想主義は理想主義に固有なる礎石の上に立つ。そして價値に就き何等かの相對主義を取る人達を忌避し、此れと論戰を交へない。言換へれば、苟くも「普遍妥當的の眞理は成立する」との信念を自らに持たない人達とは議論しない。何故なれば、議論をすることは普遍妥當的の眞理を求めることであり、其れを否定する人と議論するは議論自身の意味を沒却して居るから。我々が社會にあつての改造方策も亦其れと同じい樣式を取る。理想主義者は唯物史觀論者と運動を共にしない。また其れは現制度改造の必要を感じないものや、或は現制度を其のまゝ存續せしめようと努める人達とも行動を共にしない。此點に於て私は、デモクラシイ一般の美名の下に隱れて居たブルジョア、デモクラシイの醜姿を暴露し、其れを忌避したボリシェヴィキの功績を忘れないものである。

ボリシェヴィキの排擊するものは、デモクラシイ一般では無くて、ブルジョア、デモクラシイで



あつた。ブルジョア、デモクラシイとの提携を忌避し、それと分離したプロレタリアン、デモクラシイは卽ちデモクラシイ一般であつた。ボリシェヴィキの此の理論の背景にも亦、我々の其れと全く同じい方策上の分離主義がある。人間がすべて完全に發達し、理想的な人生觀を懷抱するものならば、すべてを包容しての方策も亦有效ではあらう。併し我々は到底其の事實を信じ得ないから、我々の運動の效果を擧げる爲めに根本的に分離主義を取るのだ。

併し分離主義を取るが故に、忌避せられ、分離せられた民衆との社會的連帶を捨てたのでは無い。寧ろ其等の民衆と出來るだけ早く聯合したいから、此の方策を取つたのである。彼等を教化するには、言論によつてだけでは十分の力を持たない。實行的模範は、徹底的に他の人生觀を動かすことが出來る。我々は自らと人生觀を同じくしない民衆の社會の中に、理想を同じくするものゝ小集團を作り、其れの理想的構成によりおのづからよき社會的模範を示す。其れは全社會に沈默裡の影響を與へる。我々は此の經過の擴充によつてのみ全民衆の社會を理想化し得ると自信するものだ。

## 四　實際的綱領

以上主張した改造方策の標準は、既に私の人生觀として取られるものである。そして此の標準

に、唯理論と經驗論との結び付きが、其の目的を達して居ると信ずる。此の標準に隨つた我々の改造運動の形態は次の如きものである。勿論其れは主たる形態だ。補助的の方策は其外に幾つもある。先きに政治運動について論じたことは其れを例示しよう。

我々の改造方策は、民衆の中の理想的少數者を主眼とする。其の少數者の集團は、改造運動のよき萠芽だ。集團は現在の制度、現在の法律の許し得る範圍內で、直接的構成の行動を取る。其處に一社會典型の模範が行はれる。理想的行動の模範は、社會のあらゆる面角に沈默的影響を及ぼす。人格は連續する。一人の理想は、他の人格の自由活動を通ほし、理想として響應せられる。集團は次第に自由に、複合的、多元的形態に聯合する。集中主義、英雄主義の代りに地方主義、民衆主義が、社會人の懷抱する人生觀となる。我々と根本的に人生觀を異らしめるものを、自由聯合の一員に歡迎しようとは欲しない。此の集團運動の理想的擴充は、全く革命手段を用ひないか、或は出來るだけ少ない程度にキャタストロオフを止めて、現社會の理想を、組織を、制度を、根本的に改造し得るであらう。勞働運動に於て、はた教育運動に於て、此の方策の適用せられる範圍は廣い。我々は單に社會の外形を强制的に改容するものでも無ければ、また其れを組成する個人の心情を敎化的に變化しようとするものでも無い。此の方策の一方のみを使用して其他を忘れてはならぬ。併し其れの併用は、其等の上に綜合的なる一原理の成立し得る思索餘地を我



々に殘す。此に於て我々は、制度としての意義を、行動としての理想を求める。今私の主張したものが其れだ。卽ち形態としての理想主義である。現社會の中にあつて、私は其の方策の徹底的實現を志し、且つ其れを實行しつゝあるものゝ一人である。

# 第四篇　文化諸形相に於ける社會理想の實現

# 第十六章　現今の教育

## 一　教育を根本として

私は前著「文化主義原論」の中で、改造論の歸結として、結局は教育と藝術と宗教とを改造の究極手段に爲す可き事を主張して置いた。爾來私の思想に幾多の改變を加へた點はあるが、此の根本的信念だけは私に益々强められて來る。殊に教育は其等の中でも普遍性の範圍の最も廣いものであるから、改造運動は結局教化運動だといつて差支へは無い。我國現在の教育には、私は失望す可き多くの點を見出すものであるが、併し今は絶大の勇氣を揮つて其れが改造に着手し、其の功を達す可き時期だと信ずるものである。

改造の實際的綱領として、私は曩きに分離主義を主張した。根本的に人生觀を異にするものと

の提携を避け、我々は我々の同信者によつてのみ結合せられた集團を中心とし、其の運動を繼續するの謂だ。何故に分離主義を取るか。デモクラシイは、一般の民衆を眼目としての行動では無いか。分離主義は此くも疑はれようが、併し民衆の懷抱する人生觀と實際に接觸して見れば、恐らくは何人と雖も終局には我々の分離主義へ歸つて來るに相違無いのだ。勿論從來の敎育の仕方が自由で無かつた爲め、民衆に此の固執心を養つたのではあらうが、其の理由は何れにせよ、私の實際に觀察するところを以てすれば、既に成人となつたものゝ人生觀は、如何によく此れを敎養するも、其れをして他に轉回せしめるは不可能事である。人生觀の回心は、未成年の少年に於て特に可能だ。其れ故に唯物史觀論者は、論理的に其の所說が如何なる難點に陷つて居るかを知悉したとしても、其れから離れようとは欲しないし、英雄主義、專制主義の人生觀によつて敎育せられ、人間を他律的に拘束することを絕對の罪惡と感じなくなつたものは、舊時代の資本主義的英雄主義、資本主義的專制主義を排斥するとしても、自らの取る方策としては、其れの目標を異らしめるも其れの精神を共通ならしめる社會主義的他律主義を取つて憚らない。此の信念を敎化により回心せしめることは、絕對に不可能では無いかも知れない。併し其れが達成までの努力は無限に大きい。敎化は人格と人格との交通だ。知識の强制では無い。敎化せられるものが敎化せられようとの心的準備を持たなければ、敎化活動は行はれない。そして此の準備は、絕對に敎化



せられるもの自身の人格的活動だから、其れを强制するは全然の無意義だ。敎化運動は其處に自らの限界を見出す。分離主義の起らざるを得ぬ所以だ。分離主義を取るから理想主義は其の根據を薄弱ならしめるとは言はれ得ないことだ。そして此の分離主義を全く必要としない民衆は、未成年の少年子女に限られる。分離主義を必要とするのは時代の恥辱だ。敎育の目的が達成せられて居ないことの一證據だ。我々は今は分離主義を絕對に必要であるとするが、隨つて敎化運動に於てさへ其の分離主義を必要であるとするが、結局は分離主義を不必要ならしめる爲めに、幼童の敎育を徹底的に理想的のものとしなければならぬ。敎育はやはり改造の根柢だ。

現代人は種々の偏見を持つて居る。哲學者は眞理の普遍妥當性を信ずるも、具體的事實に對する彼の批判は通俗的、妥協的だ。經濟學者政治學者は、經濟政治現象の社會的考察を基礎とし、人生の廣汎なる文化範圍の上へ其の方法を無限に適用しようとする。此等は人類的偏見の中の最も常套的のものだ。民衆は其他に幾干の偏見を懷抱するか、恐らくは計り知り難い。我々は歷史の經過の中に一地位を占める。言ひ換へれば一定の制度と傳統と道念との中に生長する。我々の懷抱する文化內容は、概ねは此等の歷史的環境によつて固定形を與へられた既成の文化其物だ。此れを批評し此れを排棄するものは、社會への叛逆者とせられて攻擊を加へられ、自らは內面の固定良心と鬪はねばならぬ。マックス・スチルナアが言つた如く、人は此の良心との爭鬪に於て最

も悲痛なる生活を經驗する。併し我々の正しい教育は、教育せられるものを常に社會への叛逆者にまで仕上げなければならぬ。良心の棄却者にまで訓練しなければならぬ。教育とは自律的人格を造ることだといふのは其の謂だ。

階級は社會の中の惡だ。經濟的、政治的の階級は、すべて更改廢滅せしめられなければならぬ。階級は秩序と異る。其れは一が獨占し、他が搾取せられる爲めの階級だ。併し其等の階級の中で、文化的階級ほど憎む可きものは無く、また其等の獨占の中で知識の獨占ほど根本的のものは無い。經濟的、政治的の階級と獨占とは、寧ろ文化的階級と知識の獨占との上層建築だ。デモクラシイは文化の上の、又知識の上のデモクラシイとならねばならぬ。

## 二　勞働學校

我國の教育は、現在如何なる點に根本的の缺陷を持つて居るか。

第一に、其れを支配する精神は、舊世紀的舊時代的のものであつた。大戰前期の其れであつた。言換へればブルジョア、リベラリズムの精神であつた。我々は今や大戰後の教育方針を建設する爲めに、先づ此の精神の打破を計畫しなければならぬ。ブルジョア、リベラリズムの教育精神は、自由主義に屬しはするが、併し單に形式的に自由であり、內容的には獨占的のものであつ



た。何を呼んでブルジョア、リベラリズムと爲すか。現社會の政治的制度を其儘に許容し、此の前提の上に立つての自由競爭主義を奬勵するのが其れだ。其の教育の掲げるモットオは、「偉いものになれ」であつた。併し此の教育精神は、人間の利己的衝動を飽くまでも强めて行くものだ。「爲すに任せよ」の自由主義經濟思潮と同一の精神的基底の上に立つ。其の所謂自由は、生存競爭に於ける、相互的排擠に於ける强力主義の自由だ。英雄主義を產み、共同社會的連帶心を破壞する。社會が其の組成員の共同的勞働によつて支持せられることの道念を忘れしめる。のみならず此の自由主義は、デモクラシイに於けるブルジョア、デモクラシイと同じく、自由の前提に各自のハンデイキャップの置かれてある事を無視する。有產者だけに利益を與へて、しかも形式的には公平であるやうの外觀を呈せしめる。

大戰前までの教育は、すべて此の精神を以て一貫せられた。其れ故に我々は現在の小學教科書の內容に徹底的斧鉞の加へらる可き必要を高調せざるを得ない。ブルジョア、リベラリズムは經濟的自由主義の父だ。ブルジョア、デモクラシイの母だ。其の必然的結論は、生存競爭に於ける强力主義の自然演繹としての戰爭だ。世界は全く自らの取る人物涵養の方針を誤つたが故にかの大戰を招いたものだ。此の精神の除去せられない限り、世界に戰爭は止まぬ。我々は今其の精神に代へるに、共同社會への連帶心、生產と消費とに於ける協同動作を以てしなければならない。

生産は勞働を通ほしてのみ可能の行動だ。共同社會に於ける生産の協同は、卽ち勞働を通ほしての民衆生活の協同だ。學校の教育は其れ故に、從來よりもずつと著しい程度を以て勞働の協同動作的訓練を爲さなければならぬ。訓練の中の大部分を占めるものが、其の勞働訓練であつてよい。其れは知識偏重の修身教授に代るものとなつてもよい。寧ろ進んで言へば、學校は卽ち勞働學校となるが至當だ。

ブルジョア、リベラリズムは、人間を機會主義の信奉者たらしめる。事功の達成は、競爭と詐僞と投機とを通ほしてのみ可能のものだ。排擠によつての獨占はあるが、協同動作の共同創作は見られない。成功するものゝある一面に、無數の不成功者がある。或る一個人としては、成功は稀れに得られる好運だ。教育に於ける個人激勵が異常的に、更に進んでは英雄主義的にならなければならぬ理由は其處にある。然るに協同勞働精神によつては、事功の不成就者は社會に一人も無い。其の事功の成果を享樂してならない人も亦社會に一人も無い。すべては成功者であり、すべては好運者だ。寧ろ言へば、好運なる術語が其處では無くなるのだ。

過去の教育は、既成文化の沒批判的注入を主とする消極的の其れであつた。既成文化の傳達に關係の少ない訓練は、教育で無い樣にさへ考へた。此れに反して新時代の教育は、既成文化を批判し、其れに變化と創造を加へ得る創意心の伸長を第一義とする積極的の其れだ。勞働訓練を外



にしての教育は全く考へ得られない。

## 三　文化的教養と職業教育

第二に、過去の教育は、其の目的を實用に置いた。其れが現代を導いてひたすら功利主義的文明理想を追求せしめ、現代文明の特色を、「結果に對する支拂ひ」の其れたらしめた所以だ。私は既に其事を本書の始めの方で言つて置いた。

目的は自律する。實用は人生の理想では無い。眞と善と美とは理想として自律する。教育の目的は人格の自律だ。言換へれば、眞、善、美等の各文化生活範圍に於ける自治的活動、文化價値の無限追求だ。此くして教育的活動は、其れ自身を以て自律しなければならぬ。其の自律的人格が、自らの自律的活動を愈々鞏固ならしめる爲めに組成するものは社會だ。そして此の自律的活動の當然なる産物は社會的文化だ。我々は此の文化を社會人として生産し、社會人として享樂する。歴史は人格の創造だ。

然るに世の政治家實業家は、人間教育を見るにブルジョア、リベラリズムの政治と經濟との手段だとする。實用主義的教育理想の生れる所以だ。學校は機械の製作所だ。其の機械の性質、種類等に註文を發するものは、政治家と實業家とだ。教育者は其の註文に唯々諾々しなければなら

ぬ。帝國主義の教育は此の註文の一形式であつた。職業教育も其の一形式、殖産興業主義の教育も亦同じく其の一形式であつた。學校の經營者は其等の註文を發する有産階級だ。國家政治の幹部となるものは、其等の有産階級に外ならぬが故に、教育の方針を規則として指令する國家も亦同じい内容の註文を強ひた。けれども私は、教育の精神を見るに政治や經濟やによつて指令せらるべきものだとすることは出來ない。教育の精神は斷じて人格本位に自律しなければならないものだ。

併し私は此處に一つの警戒を發して置きたい。人間の文化的活動を自律的ならしめようとする教育が、藝術的の色彩を帶びるは當然の事だ。我國現在の自由教育論者は、其れ故に概ね藝術的自由教育の精神を貫かうとする。職業本位、實用本位の教育に對する文化的教養本位の其れの一反動と見る可きだ。彼等は音樂、文學、舞踏、繪畫等の教授に全力を注ぎ、兒童の藝術的創意心の自由表現に能ふ限りの機會を與へ、教育に於ける商業主義、經濟的競爭主義を排斥したのである。此れに對して職業教育論者は、敢て文化的教養の必要を無視するのでは無いが、兒童はやはり學校から社會に入るものであるから、實生活の準備としての職業教育を等閑に附すべきでは無いとした。更に注意す可きことには、其等の職業教育論者は、文化的教養本位の教育を目するに有産者的貴族的色彩を多分に持つものだとし、職業本位の教育こそは無産者本位の其れだとしたこ



とだ。

私は此の問題を次の如くに解しようと思ふ。職業本位の教育論者より發せられた此の最後の批評は、確かに部分的に適中して居る。文化的教養本位の教育は、現在のところ主として私的經營の學校に行はれて居るが、其等の或るものは如何にも有産者的貴族的色彩を發揮する。かの所謂文化生活が有産者的貴族的であつたと同じい傾向の現はれであり、また其の同じい徑路を進んだのだ。併し其れだからと言つて私は、ブルジョア、リベラリズムを肯定し、其の前提に立つより外に仕方の無い所謂職業教育を採用しようとも思はぬ。要するに此等の論者は、職業教育と勞働教育とを混同したのだ。職業とは、現制度の中に於て個人主義的に競爭する商業主義的經營のことだ。職業的に成功するとは、商業主義的に多くの利潤を收めることだ。其れ故に職業教育の目的は、其れに費消せられる勞働とは無關係に、如何にしてより多くの利潤を收む可きかを教へるにある。此れに反して私は、勞働教育を主張する。そして文化的教養を計れば計るほど、其の教育は有産者的貴族的特色を離れ、學校其のものは勞働學校にならなければならぬと主張する。勞働教育は、現制度に於てより多くの利潤を收めることを目的とせず、共同社會の生産的勞働に參畫し、協同作業の愉悦を得ることを以て其れの目的とする。勞働教育の歸結は、共同社會的生産によつて私的利潤を破却するに至る事であらう。私は文化的教養の教育と勞働教育とこそは、

無產者的色彩を持つて結合するものだと信ずる。

## 四　教權と教育の低質

第三に、過去の教育にあつては教權の强制力が强よ過ぎた。すべての教育は、其時の制度と緊密の關係を持つ。其の制度が產んだ慣習や道德は社會的良心となり、無意識的に教育の內容を限定する。從來の教育が、或はブルジョア、リベラリズムの其れとなり、或は實用主義の其れとなつたのは、此の一例だ。其の影響は無意識的だから、此れを教へるものも、また此れを學ぶものも、其の慣習や道德が社會制度と關係を持つことを反省しないで濟む。寧ろ此く反省する方が不自然の感じを持つのだ。然るに教權は、其の社會的集團の政治的權力と結び付いたものだ。政治的權力は、自らの統制力を維持し、其の制度を永續せしめる爲め、故意に、意識的に、教育機關の上に政治的權力を加へて、一定內容の教育を强制する。教權なるものゝ成立する所以だ。

此の場合の教育は、其れ故に正しくは教育と呼ばれることが出來ず、宣傳といふ名が其れに適はしい。併し其の宣傳も長い時代に亙つて行はれるときには、此れを宣傳するものも嘗ては此の宣傳によつて訓練せられたものであるから、良心的に其れを正しい教育だと思ひ込み、宣傳だとは信じないのだ。所謂教育の內容には、寧ろ宣傳の分子をより多く含むことが、明白に意識せられ



始めたのは、最近の事だ。大戰後、資本主義的國家と社會主義的國家とが世界に併立するに至つたとき、其等の國家の行ふ教育の內容は全く異るものとなつて居た。若し教育が、人を人にする爲めのものであつたとすれば、國家制度の如何により其の內容を異にする筈は無いのであるが、既に事實的に此の差違を生じた以上は、所謂教育の內容の中に、其の社會制度から演繹せられて來た所謂宣傳の要素が如何に多くの部分を占めるかは明瞭とならう。資本主義的國家は教權によつての宣傳を爲す。併しより强い程度に於て、勞農露國の如き社會主義的國家も亦、强力なる教權によつての宣傳を爲すのである。

現代の教育家が、人心を更改せしめ得るだけの實力を持たないことを妄りに攻擊してはならない。教育の內容となる可きものは、國家の制定した教科書として彼等に提供せられて居る。教育の精神の根本義は勿論のことゝして、授業の時間數の細末に至るまでが、すべて煩瑣な規則によつて規定せられて居る。教育者は、其等の精神と內容とを、命ぜられるが儘に施行する一の職業的技師たるに過ぎない。其の地位は教會の牧師と全く同じいものだ。然るに教育は一の人格的事業だ。教へられるものゝ人格が自律せしめられるは勿論のことゝして、先づ始めに、教へるものゝ人格が自律しなければならぬ。然るに現代の教育は、其の重大なる教育者の人格を教權により全部的に束縛して居る。其中から生きた教育活動の生れ出でる道理は無い。

現今の教育に比較すれば、德川時代の寺小屋教育は寧ろ大いに惠まれたものであつた。其の施設は不完全であり其の方法は非科學的であつたから、其の爲めに損せられる教育の效果は大いなるものであつたが、併し教權によつて束縛せられる教育的部分は甚だ少なかつた。教育は、教權の存在をすら殆ど全く意識せずに爲されることが出來た。其の精神は、國學であつてもよければ、朱子學、陽明學、實學の何れであつてもよかつた。現代の社會制度から見れば社會主義やアナアキズムの禁制書に屬する筈の老莊も、何の拘束を受けずに教育せられた。此くして教育者は、自らの人格を自律せしめ、自らの信念に隨つた教育を爲すことが出來たから、其の形式は不整備であつたにも拘らず、其の精神は生氣を持つことが出來た。私は其時の教育を祝福しようと思ふ。

教育とは、人を人にする活動だ。然らば教權は、其の教育を妨害する宣傳を禁遏する爲めにこそ働き出さなければならぬ。教權自身が宣傳の本據となり、教育を萎縮せしめるは、甚だしい不合理だ。教育により人が合理化せられたとすれば、彼は進んで教權や、國家や、制度やに批判を加へ、其の正しく無いものは正しいものに改めるやうに努めるであらう。教權や、國家や、制度やが其れ自身合理的であれば、此の批判を恐れる筈は無い。教育は教權の活動を不必要とする爲めの教育だ。



私は思ふ。教育家の事業は、人間一生の計畫として決して不愉快なものでは無い。恐らくは現在のあらゆる職業の中で、最も多くの愉悅を其れに於て見出すことの出來るものであらう。其れ故に教育界は求めずして多くの人材を集め得る筈だ。然るに事實は全く其れの反對となつたのは何故であるか。私は信ずる。教育者の報酬が貧弱なことは、必ずしも其れの主原因では無い。教育が教權により徹頭徹尾束縛せられて居る爲めに、教育者たることほど卑屈な職業は無いといふ觀念を、社會のすべての人の頭腦に植ゑつけたことは、實に教育界から多くの人材を驅逐する主原因であつたのだ。言換へれば、教權が教育を粗質ならしめたのだ。

自由教育は、現代の主たる教育的主張だ。注入主義の其れは到る處排斥せられ始めた。併し僅かに教授の方法に於ての自由教育が、教育の效果に何程の寄與を爲し得るか。我々の要求するものは、其れよりはもつと根本的の自由教育だ。教育者自身が全然的に教權により束縛せられることから自由にせられた教育だ。教育者の人格が自由に、彼自身の自律を恢復することの出來た教育だ。其れは自由教育の根基に横はる問題だ。

## 五　教育の機會のデモクラシイ

第四に、過去の教育は學校と共に終りを告げる其れであつた。のみならず其の學校教育を受け

る爲め、人は多大の經濟的資力を必要とした。此の傾向は、ブルジョア、リベラリズムの時代的特色と平行する間は何等の批判をも受けないで濟んだが、現代のデモクラシイの大勢によつては當然非難せられなければならぬものだと私は思ふ。

教育とは幾度も繰返して言つた如く、人を人にする行動だ。然らば我々の生涯を悉くして教育の事業は終りを告げることが無い。現在の所謂學校教育は、人生全體の教育の中の一小部分を占めるものに過ぎぬ。人は其の學窓を離れた後も、生涯學ぶことの出來る教育設備を持つて居なければならぬ筈だ。言換へれば學校概念は今よりも甚だ廣汎なる範圍に擴張せられなければならぬのだ。

教育の機會は國民の前に平等に開けて居る。能力さへあれば、何人も專門教育大學教育を受ける事が出來る。此れが現代の學校教育の標榜するところだ。併し其等の高等教育を受ける資格は人の能力によつて定まらず、其の資產の多寡によつて定まる。無產者はよしいかに高い能力を自らに持つにせよ、其の高等教育の機會を捕へることが出來ない。ブルジョア、デモクラシイの特色と平行するのが、學校教育に於ける機會の均等だ。此の傾向は正に舊世紀的だ。我々は既に教育を生涯に亙る事業とした。然らば我々の教育は、すべての無產者が、其の生涯に亙り、生產的勞働に努力しつゝ、同時に就學することの出來る其の教育でなければならぬ。生活の半面は教育



他の半面は勞働だ。其れがすべての民衆の權利であり、同時に義務だ。勞働するものとしないものとの分離する社會、乃至は教育を受けるものと受けないもの、教育を受ける時期と受けない時期、其等が截然と分離する社會は、決して健全だとは言はれない。形態は違ふが此等の階級的分裂の上には、皆な同じ精神が支配するのだ。我々のデモクラシイはひとり經濟や政治やの上にのみ限らる可きものでは無い。

現在の工場、銀行、會社を見よ。其等にある從業員は、嘗ては學校にあつて豐かな教育を受けた。其の或るものは勿論高等教育をさへ受けることが出來たのだ。然るに彼等は其の商業主義的機關の運用に今のすべての勢力を奪はれ、自らの文化的教養に費す可き何等の勢力と時間も許されては居ない。彼等はたゞ商業的機關の中にある一機械だ。資本家は學校を見るに其の機械の製作所を以てする。工場、銀行、會社は能率的經營法を工夫した。其の所謂能率の增進は、其の中に働らく個人に取つては其の勢力の可能的部分を奪はれ、自己教養への勢力を愈々狹少ならしめる所以のものであつた。

我々は先づ人間としての教育の機會を社會に對して要求しなければならぬ。其れは必然的に現代人の人生觀を改變せしめなければ已まない大勢を作るに至るものだ。

## 六　教育概念の革命

一の制度を發見するは、一の概念を建設することだ。一の概念を建設するは、一の人生觀を創造することだ。多くの人は、私有財産制度と共産主義制度との間、或は制限選擧制と普通選擧制、專制政治と民主政治との間などには、さうした概念の建設、卽ち人生觀の創造に於ける全然の革命を容易に認識しようとするが、學校や教育の概念には其れと同じい革命の齎らさる可き必要を容認しようと欲しない。其れ故に、今若し社會制度が共産主義的に變革せられる時があつたにしても、其の制度下には、やはり現在の其れの如き學校や教育やが、其の共産主義の國家により施設せられるものと考へるのだ。併し私は、現在の學校や教育の概念其のものが、既に一の社會制度に對應するものなることを指摘する。政治的經濟的の概念は、寧ろ此の文化的概念よりの演繹だ。學校や教育やに就ての現代人の概念の考へ方を根本的に改變せしめたとすれば、隨つて其の概念に相應する教育の制度を今直ちに民衆の手によつて建設し始めたとすれば、其れにより現代の社會的缺陷は一々に改造せられ始め、當來社會の形態は、革命を用ひずして我々の眼前に現前せしめられ得るとするは、此の理由によつてだ。私は其の運動の前途に多くの希望を置く。既に私の批評した現代教育觀は、今や漸く私だけの懷抱する感慨では無くなつた。地方の爲すある青



年達は、近來皆な其れだけの批判を持ち始めたのである。そして此の教育概念の革命は、他面世界的の現象となつた。其れは大戰後に見られる著しい特色だ。今日の教育學者教育行政家は、私の主張を實行し難き理想論と觀察するであらう。新らしい人生觀を創造する要求を彼等は持たないからだ。併し私の主張するやうな教育制度は、今日の世界の國家として、世界の民衆として、其の實行に何等の困難をも感ず可きものでは無いから、其れが世界的の豫望より實現に移るは、豫測し難い遠い將來のことでは無いだらう。

## 七　商業主義より共同社會主義へ

當來教育の精神及び形態として、私の主張するものは次の諸項だ。其れは現代教育の精神と形態との根本意義を私が非難したものへ、直ちに對角として來る其等だ。

第一に、眞の教育の精神は、ブルジョア、リベラリズムを打破して、共同社會の協同的、連帶的作業の精神を建設するものでなければいけない。現代の社會を動かす精神は、社會によつて社會を破壞する機會を無限に個人へ與へた其れだ。社會奉仕の念慮は、全人類を包容する共同社會の意識によつて動かされず、其れ々々の集團の團體利己主義を助けるに力あるものとなつたゝけだ。愛國心、帝國主義等に、多大の自己犧牲心の含まれることを私は看過するものでは無いが、

併し其の究極の理想が團體鬪爭心に置かれて居ることをも亦我々は同時に看過してならない。機會の僥倖的爭奪、利得の投機的模索に、人間活動のすべての刺戟を見出さなければならない現代人は、何といふ不幸か。其れが永遠に呪はれずに、社會展開の動力となつて行くことは、考へ得られない。教育は社會を支配しなければならぬ。教育の精神の更改は、社會人の活動に幻滅と批判とを與へなければならぬ。

當來教育を支配する精神は、現代のあらゆるブルジョア的精神を打破して、無產者精神を建設するものだ。現代制度の中にあつての教育が、破邪的鬪爭的一面を持たざるを得ないのは其の爲めだ。併し教育は、其の環境のあらゆる不正に對する幻滅と批判とを民衆の意識の中に養ふものであるから、敢て經濟的社會制度の方面にあつてだけ破邪的鬪爭的なのでは無い。寧ろ教育は無知と怯惰とに對する永遠の鬪爭だ。無產者精神の建設とは、あらゆる階級的對立を排棄し、眞の民衆的精神を建設することに外ならない。無產者精神を建設する爲めに、教育が現代の制度的不正に鬪爭を宣言することは、同時に教育がマルクス派唯物史觀の基礎の上に立つことを意味しない。又其れを意味してはならない。現代日本の總ての無產者運動を見れば、無產者運動なるが故にマルクス派社會主義の運動である如き狀態を呈し、其の狀勢は社會の各方面に及ぼうとして居るのは、無產者運動の爲めに大いなる不幸だ。民衆は據る可き哲學を他に知つて居ないことより來



たものだ。今教育の場合にも私は其事を切言して置かなければならない。

第二に、其れは文化的教養の爲めの教育なるが故に、隨つて勞働學校の教育である可きだ。教育は實生活の爲めの準備を與へることでは無い。學校と實生活との區別が取り去られ、教育は卽ち生活、生活は卽ち教育だとすれば、我々がすべての文化的教養を無限に追求することが卽ち我々の生活だ。實利的手段的目的は、結局快樂を人生の目的として選ぶことだ。人生の目的は此れに反し其れ自身を以て自律する價値だ。我々の人生に於て、從來は實利的手段的にしか考へられ得なかつたものは、今後は價値的自律的の意味のものに改鑄せられなければならぬ。經濟的生產の活動は、商業主義の制度下にあつては實利的手段的の意味をしか持たない。我々は今教育に於て其の見方の革命を達成し、此れを政治的經濟的制度の上に反映せしめようと欲するのだ。經濟的生產は其れ自身に獨立の價値を追求する。生產者が其の活動を繼續する動機も亦、生產の爲めの自律的悅樂だ。經濟的生產が卽ち一の文化的教養だ。不愉快なる手段的活動に携はることゝの間の二元性は消失する。學校自身が勞働學校であることの意味は其處にある。勞働學校は卽ち文化的教養の爲めの學校だ。

嘗て我國の教育界には、勞働學校の思潮が論議の主題目となつて居た時もあつた。其れは主として獨逸の勞働學校の思潮が輸入せられたものであつた。隨つて其の教育の目的は概ね二つある